

扇が丘ハイゴク遺跡

扇が丘・住吉土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

2003

野々市町
野々市町教育委員会

扇が丘ハイゴク遺跡

扇が丘・住吉地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

2003

野々市町
野々市町教育委員会

例　　言

- 1 本書は石川県石川郡野々市町扇が丘に所在する扇が丘ハワイゴク遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は野々市町扇が丘住吉土地区画整理事業に係るものであり、野々市町産業建設部都市計画課からの依頼を受けて野々市町教育委員会が実施した。各年度の調査期間、面積、担当者は以下のとおりである。

調査年度	調査期間	調査面積	担当者
平成9年度	5/9～10/21	4,700m ²	横山貴広（町教委主事）、永野勝章（同左）
平成10年度	5/7～8/10	1,783m ²	横山貴広（同主査） 布尾和史（同主事・県教委文化財課派遣）
平成12年度	5/11～6/20	260m ²	徳野裕子（同主事）

- 3 発掘調査にあたっては、野々市町産業建設部都市計画課の協力を得た。
- 4 遺物の整理及び報告書作成に必要な記録資料の整理については竹田倫子・野村祥子がおこなった。その他図版作成・遺構図トレース・写真撮影を横山が担当した。
- 5 本書の執筆及び編集は各担当者と協議の上横山がおこなった。
- 6 図版の縮尺はすべて図上に標示し、水平基準線レベルは海拔高である。なお、方位はすべて磁北を指す。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。
- 7 調査によって得られた資料は、すべて野々市町教育委員会が一括して保存管理している。
- 8 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々や機関からご教示、ご協力をいただいた。以下にご芳名を記して深甚の謝意を表したい。（順不同、敬称略）
垣内光次郎・木立雅朗・北野博・出越茂和・藤田邦雄・本田秀生・吉岡康暢
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター・金沢市埋蔵文化財センター

目 次

第1章 位置と環境	1
第1節 遺跡の位置と地理的環境	1
第2節 周辺の遺跡	1
第2章 調査に至る経緯と経過	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 1997年度の調査	5
第3節 1998年度の調査	6
第4節 2000年度の調査	6
第3章 遺構と遺物	8
第1節 調査の概要	8
第2節 弥生時代以前の遺構と遺物	8
第3節 古代の遺構と遺物	15
第4節 中世以降の遺構と遺物	18
遺物観察表	74
第4章 まとめ	78
第1節 はじめに	78
第2節 出土遺物の組成	78
第3節 集落の変遷と構造	78
調査写真図版	85
遺物写真図版	104

第1章 位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

石川郡野々市町は、石川県のほぼ中央南寄りに位置し、町域のほとんどは手取川によって形成された広大な手取川扇状地の扇央部東北～北端に当たる。白山連邦を源とする手取川は、鶴来町付近より流路を北から西方向に転じ、石川郡美川町にて日本海へ注いでいる。手取川扇状地はこの県下最大の河川の堆積作用により扇径約12km、展開度約110度の規模を有し、往時の加賀百万石を支えた中核としてその威容を金沢平野に横たえている。町域の北側から東側にかけての一帯を金沢市に、西側から西南にかけての一帯を松任市に、また南側を鶴来町に接する当町は、古くから交通の要地、商都として開かれた。その伝統は今に伝えられ、面積約13.56km²、人口約43,000人を有する日本海側唯一の雄町として発展を続けている。

扇が丘ハイゴク遺跡は、この野々市町の東端に当たる扇が丘地区の通称「ハイゴク」に存在しており、標高21～23mを測る手取川扇状地に特徴的に見られる痩せ尾根上に立地していた弥生時代後期後半と奈良時代～中世の集落跡と考えられる複合遺跡である。本遺跡の東側には伏見川によって形成された扇状地が間近に迫っており、一帯は両扇状地に挟まれた低湿地帯となっていたことが予想されており¹⁾、周辺に連なる遺跡群の生産基盤となっていたことが予測される。この扇が丘ハイゴク遺跡を擁する野々市町扇が丘・住吉地区は、町施行による土地区画整理事業もいよいよ終盤を迎える。都市計画道路高尾・堀内線の開通や良好な住宅用地の供給等、周辺の景観は調査当時とは比べ物にならないほど変貌を見せており、至近に広がる金沢工業大学を核とした文教地区の存在と併せ、健全な環境のもと急速な発展を続けている。

註 1 「扇が丘ゴショ遺跡」(1998 石川県立埋蔵文化財センター)掲載図版1による。

第2節 周辺の遺跡

本遺跡の所在する手取川扇状地扇端北東部周辺では、縄文時代から連続と続く多くの遺跡が確認されており、とりわけ現高橋川流域では、本遺跡を含む上・下流域に弥生時代後期～末を中心とした良好な集落跡が速なるように營まれていたことが最近の調査結果から想定されるようになった。

本遺跡の周辺で最初に入々の足跡が確認されるのは、山間地の散布地を除けば富樫丘陵麓に立地する縄文時代中期中葉の額谷カネカヤブ遺跡である。その後、後・晩期になると、平野部における拠点的集落である米泉遺跡・御経塚遺跡・新保チカモリ遺跡といった、長期に亘り安定した様相を見せる遺跡が出現する。これら3遺跡については、確認された遺構・遺物の量の豊富さと質の高さからともに北陸の縄文時代を代表する遺跡として位置付けられている。



第1図 野々市町位置図

弥生時代に入ると、本遺跡の周辺でも前期柴山出村式期の資料が検出された遺跡が散見されるようになる。この内、高橋セボネ遺跡SK-46出土土器は該期の遺構出土土器として希少である。また、押野タチナカ遺跡・御経塚遺跡・御経塚シンデン遺跡では一定量確認されているもののすべて包含層資料であり、集落構造までを推し量るものではないが、出土状況については以降続く後期後半までに大きな断絶があり、むしろ繩文時代晩期後半～末の色彩が強いことが特筆される。中期についても希薄な状況はさほど変わらず、僅かに押野タチナカ遺跡8号住居跡に礎部式に比定される一群を認める程度である。また、押野大塚遺跡・御経塚遺跡ツカダ地区においては先行する矢木ジワリ式土器も僅かに確認されている。続く後期になると、法仏式期以降県内一円に見られる傾向に漏れず本遺跡周辺でも集落の数は急速に増加し、規模も拡大するようになる。至近な部分だけに目を向けても、高橋川の流路に沿うようにして南から大額キヨウデン遺跡、額新町遺跡、扇台遺跡、扇が丘ハイゴク遺跡、扇が丘ゴショ遺跡、高橋セボネ遺跡、横川・本町遺跡、押野ウマワタリ遺跡の8遺跡が連なるようにして営まれており、一帯が当時の中心的な地域であったことがわかる。この他、近隣では押野タチナカ遺跡を中心とした押野地区や、地下水の自噴地帯に位置する御経塚遺跡群なども当時の中心的な集落として知られている。

古墳時代に入ると、前代の増加・拡大傾向から一転して集落の確認は希薄になる。前述の高橋川流域では扇台遺跡以南の3遺跡で前期まで存続することが確認されているが、確実な遺構を伴うものは額新町遺跡の堅穴出土資料のみである。また、下流域については、横川・本町遺跡で弥生時代終末以降古墳時代初頭にかけて墓域に転換する」ことが確認されているが、調査面積が僅かであり全容は知り得ない。この時期、御経塚地区では4基の前方後方墳を盟主とし、その他を方墳で構成された全15基からなる御経塚シンデン占墳群が造営される。これらは直前まで営まれていた集落を移動させて造営されており、畿内・東海の影響を受けつつ在地首長層の再編がおこなわれたことを物語っている。なお、基盤となる集落については金沢市の上荒屋遺跡が想定されている。また、御経塚シンデン遺跡では前期古墳群の造営が終了した後、しばらくの空白期において6世紀末～7世紀初頭のごく短期間再び集落が営まれている。

奈良時代以降、平安時代にかけて周辺では野々市町の南部地区に遺跡が集中する傾向が見られる。7世紀第3四半期、白鳳期の建立とされる末松庵寺跡を中心として、末松から上林、新庄地区では7世紀前半に集落の萌芽をみ、同後半から9世紀前半にかけて爆発的と言ってもよい規模で拡大する。中でも上林新庄遺跡・下新庄アラチ遺跡は一帯の中心的な集落と思われ、当時の押御郷の郷家と言ってもよいほどの内容を持つ。本遺跡周辺でも巡方を出土した額谷カネカヤブ遺跡や、扇が丘ハイゴク遺跡（平成2・3年度石川県立埋蔵文化財センター調査）で見られた四面庇付の御堂を勢髪とする建物の存在など、特殊な機能を有する集落跡が確認されている。

中世期に入ると、周辺での遺跡の動向は加賀の守護富樫氏の本拠となった野々市町本町二丁目から扇が丘・住吉にかけての一帯に集中する傾向が見られる。平成6年度の調査で館内郭を巡ると思われる濠跡を確認した宮櫻館跡を始めとして、同郷土居地区、扇が丘ヤグラダ遺跡などが連なり、南東約1.5kmに所在する高尾城跡を含め周辺が該期の一大中心地であったことを物語るものである。1488年（長享2）、加賀一向一揆での富樫正親の自刃により、加賀は広く百姓の持ちたる国として長い自治の時代に入り、野々市という地名も1546年（天文15）の金沢御堂創建によりしばらく歴史の舞台からその名を消すこととなる。近世に入って野々市町各地の地名が文献に登場するのは主に村御印によるところが多く、この頃にはほぼ現在の集落の基礎が出来上がっていたものと思われる。

註 1 金沢市埋蔵文化財センター 前田雪恵氏のご教示による。



第2図 周辺の遺跡 ($S=1/25,000$)

周辺遺跡一覧

[石川県遺跡地図] 石川県教育委員会1992より

野々市町			01111	高尾ジョウザプロウ横穴 (古後)
16002	上新庄ニシウラ遺跡	(弥・古・奈)	01112	高尾A遺跡 (奈・平)
16004	上林新庄遺跡	(繩・古~平)	01113	高尾C遺跡 (弥・古)
16005	上林古墳	(古後)	01114	高尾天神堂遺跡 (平)
16007	下新庄タナカダ遺跡	(奈・平)	01115	高尾新町遺跡 (奈・平)
16008	栗田遺跡	(繩・奈・平)	01116	高尾新マトバ遺跡 (奈・平)
16034	上宮寺跡	(室)	01117	崖遺跡 (古・中世)
16035	押野館跡	(室)	01118	高尾イシナ坂古墳 (古)
16036	押野タチナカ遺跡	(弥~古)	01119	高尾公園遺跡 (平)
16037	押野ウマワタリ遺跡	(弥後)	01120	大額キヨウデン遺跡 (弥~古・平)
16038	押野大塚遺跡	(繩・弥)	01121	扇台遺跡 (弥・平)
16039	富樫館跡	(中世)	01122	扇が丘ハワイゴク遺跡 (繩~中世)
16040	高橋ウバガタ遺跡	(弥末)	01123	久安トノヤシキ遺跡 (古)
16041	高橋セボネ遺跡	(弥前・後・奈後)	01124	久安さんまい川遺跡 (平)
16042	扇が丘ゴショ遺跡	(弥~中世)	01125	米泉遺跡 (繩・弥・平)
16043	扇が丘ヤグラダ遺跡	(繩~中世)	01126	有松D遺跡 (古・平・室)
金沢市			01127	有松B遺跡 (平)
01002	四十万B遺跡	(平・中世)	01128	有松C遺跡 (繩~古)
01005	四十万中世墓群	(中世)	01129	有松A遺跡 (繩)
01008	高尾城跡	(室)	01130	寺地シンドロ遺跡 (古~平)
01069	八日市サカイマツ遺跡	(繩・奈・平)	01131	寺地向田遺跡 (奈)
01070	八日市ヤスマル遺跡	(弥・奈・平)	01132	円光寺向田遺跡 (奈・平)
01072	押野西遺跡	(繩・弥・奈・平)	01133	円光寺B遺跡 (繩)
01073	押野大塚古墳	(古)	01134	寺地B遺跡 (奈・平)
01103	御廟谷填墓群	(中世)	01135	寺地A遺跡 (繩・奈・平)
01104	額谷遺跡	(古)	01139	円光寺A遺跡 (繩)
01105	額谷ドウシンダ遺跡	(繩~平)	01141	山科やなした遺跡 (奈・平)
01106	額谷城跡	(平)	01142	山科かなした遺跡 (古)
01107	高雄山寺遺跡	(不詳)	01398	四十万遺跡 (繩)
01108	狐青横穴群	(古)	01399	三十刈遺跡 (奈~平)
01109	高尾古墳	(古)	01400	馬替遺跡 (繩)
01110	高尾B遺跡	(奈)		

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

扇が丘ハイゴク遺跡の発掘調査は野々市町扇が丘住吉地区画整理事業の施行に伴い実施された緊急発掘調査であり、現地における実調査は平成9・10年度と同12年度の3次にわたった（第3図参照）。これに先立ち、本調査区の東側では高橋川の改修を原因として平成2・3年に石川県立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施しており、御堂を劈縫とさせる四面庇付擁立柱建物を確認するという成果を上げている。この結果を受け、町教育委員会としても野々市町側での扇が丘ハイゴク遺跡の詳細な広がりを把握する必要を感じ、平成6年度に当該区画整理事業予定地区全域について埋蔵文化財分布確認調査を実施している。その結果、対象地内には西より富樫館跡・鬼ヶ窓地区・同郷土居地区・扇が丘ヤグラダ遺跡の新たな遺跡が存在することに加え、本遺跡の詳細な分布範囲が明確となり、町産業建設部都市計画課と協議をおこなった。その結果、本遺跡については都市計画道路高尾・堀内線の築造予定範囲を最優先に、順次都巿公園予定地を除く遺跡推定地全域に対して発掘調査を実施することで合意を得た。

第2節 1997年度の調査

都市計画道路高尾・堀内線の築造予定地及びその南側に広がる民地部分の発掘調査であり、当初の計画では約5,000m²の調査予定であったが、調査地を南北に延びる基幹農道と用水の撤去が不可能となつたこともあり、最終的には4,700m²の調査となった。平成9年4月25日付で町産業建設部都市計画課長より町教育長宛て埋蔵文化財調査依頼が提出され、同5月6日付で回答として実施計画書を提出している。現地での調査は5月9日より着手し、10月21日に埋め戻しを含めたすべての作業を終了している。調査期間は延べ166日間を要している。

- 5月9日（金） 重機オペレーターとの現地打ち合わせ終了後調査区設定。畑作の関係で2区及び3・4区北半を先行して表土除去することとする。
- 5月12日（月） 重機搬入、表土除去作業開始。
- 5月16日（金） 現場仮設小屋建て上げ、備品搬入。
- 5月19日（月） 調査開始。周辺草刈後遺構検出。
- 5月20日（火） 1次表土除去作業終了。重機を一旦撤出する。
- 6月11日（水） 3・4区南半及び5区表土除去作業開始。
- 6月19日（木） 2次表土除去作業終了。
- 7月9日（水）～17日（木） 現場排水作業。長雨のため調査休止。連日の排水作業をおこなう。
- 8月26日（火）・27日（水） 布水中学校2年生職場体験受け入れ。
- 9月11日（木） 2・3区航空測量実施。
- 10月2日（木） 4・5区航空測量実施。
- 10月3日（金） 機材等撤収。
- 10月7日（火） 調査区埋め戻し作業開始。
- 10月21日（火） 調査区埋め戻し作業終了。本日すべての行程を終了する。

第3節 1998年度の調査

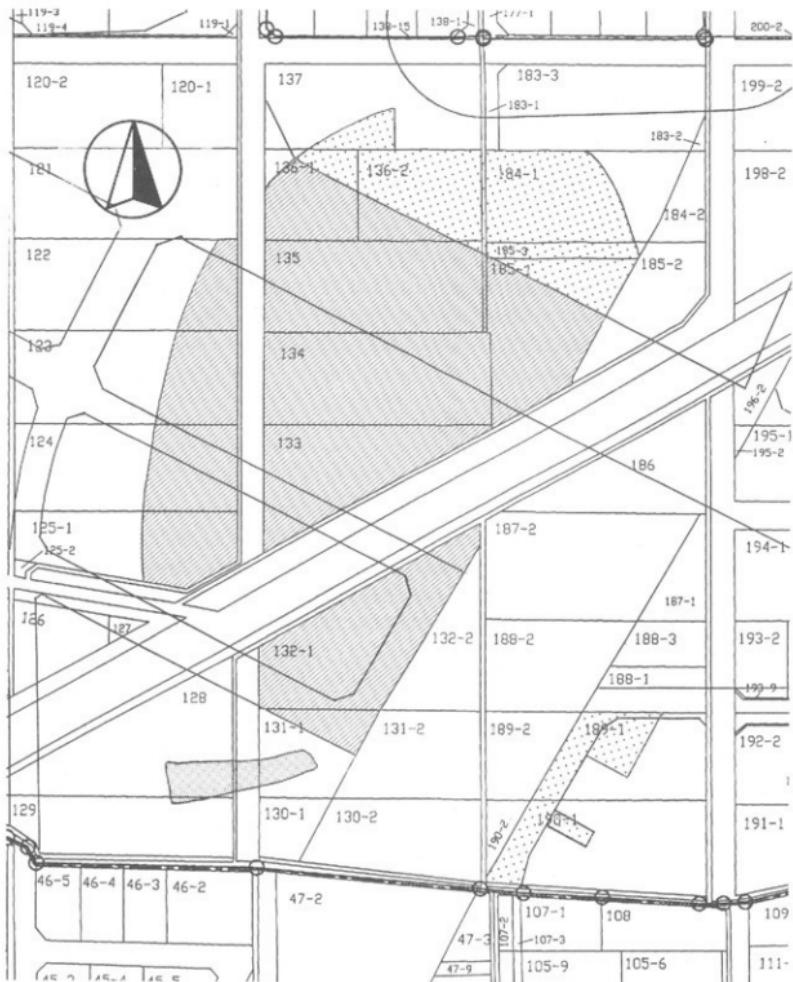
前年度調査区の北側及び高橋川の流路を挟んだ右岸南側にあたり、全城が民地部分での調査である。当初予定面積は約3,000m²であったが、高橋川右岸南調査区（7区）については造構密度が極端に薄く、覆土も暗灰色を呈し水分を多く含む強粘土であったため縄文時代の旧河道路跡を検出した部分に絞り、他はトレンチによる確認調査とすることに方針を転換した。結果として最終調査面積は1,783m²となっている。平成10年4月27日付で町産業建設部長より町教育長に宛てて埋蔵文化財調査依頼が提出され、これを受けて同5月6日付で実施計画書を提出している。現地での調査は5月7日より着手し、8月10日に埋め戻しを含めたすべての作業を終了した。調査期間は延べ96日間を要している。

- 5月7日（木） 重機オペレーターとの現地打ち合わせ終了後調査区設定。工事日程の関係で橋梁工事により破壊を受ける1区東側部分を最優先して調査をおこなうこととする。
- 5月11日（月） 重機搬入、表土除去作業開始。
- 5月14日（木） 1区東半表土除去作業終了。一旦重機を搬出する。
- 5月15日（金） 現場仮設小屋建て上げ、備品搬入。工事日程の関係で1区東半は緊急を要するため、航空測量をおこなう入札の日程が合わず造構完掘後直ちに手実測で追いかげることとする。測量用杭打ち作業実施。
- 5月20日（水） 造構検出手作業開始。
- 5月27日（水） 造構平面実測作業開始。
- 6月5日（金） 1区東側部分調査終了。
- 6月10日（水） 1区東半埋め戻しと共に西半部分の表土除去作業を開始。
- 6月16日（火） 1区西半造構検出手開始。
- 6月30日（火） 1区の調査と並行して7区の調査区を設定。
- 7月1日（水） 7区表土除去作業開始。
- 7月2日（木） 7区表土除去作業終了。
- 7月6日（月） 7区道具小屋（ユニットハウス）搬入。
- 7月8日（水） 1区西半航空測量実施。機材等を7区へ移動。
- 7月28日（火） 7区航空測量実施。
- 8月10日（月） 埋め戻し作業終了。本日ですべての行程を終了する。

第4節 2000年度の調査

5区の南側に造成予定の都市公園内に設けられる曲水部分の調査であり、事前の打ち合わせで工事掘削面が造構面に達すると判断から急遽調査をおこなうこととした。平成12年4月3日付で町産業建設部長より町教育長に宛てて埋蔵文化財調査依頼が提出され、同日付で実施計画書を提出している。該当面積は260m²であり、現地での調査には5月11日から6月20日までの延べ41日間を要している。現地では調査着手前にすでに旧高橋川に注いでいた周辺用水の水を現高橋川に落とす仮設の排水路が掘削されており、一部遺跡を破壊していたことが悔やまる。

- 5月11日（火） 重機オペレーターとの打ち合わせ終了後調査区設定。
- 5月15日（月） 表土除去作業開始。同日で終了。
- 5月18日（木） 造構検出手作業開始。
- 5月29日（月） 実質的な造構検出手作業は本日で終了。
- 5月30日（火）～6月16日（金） 平面図、土層図作成作業。写真撮影。補足調査実施。
- 6月20日（火） 機材撤収。本日で現地作業を終了する。



第3図 調査区図 (S=1/1,000)

第3章 遺構と遺物

第1節 調査の概要

扇が丘ハイゴク遺跡は標高21~22m程度を測る手取川扇状地の北東端部に位置する集落跡であり、縄文時代後期中葉から15世紀後半にかけて、長短の断絶を挟みながら人々の生活の舞台となった遺跡である。この内、遺構・遺物の出土状況より中心となるのは中世期であり、11世紀末の段階で古代とは一線を画した初現的な中世集落の萌芽を見る。その後12世紀末から13世紀初頭の段階では、開発領主的地位を窺わせる大型の掘立柱建物を中心に集落としての成熟期を迎える。以降14世紀代にかけて集落内の区画を移動しながら性格をも変えて營まれ続け、15世紀以降急速に衰退していく。周辺に分布する該期遺跡群の動向と併せ、時代的にも加賀の守護富樫氏の治世のルーツに関わるとも言える貴重な調査成果をもたらした。

第2節 弘生時代以前の遺構と遺物

1 縄文時代（遺物 第5図）

本遺跡からは若干の縄文土器と一定量の打製土器が出土しているが、ここで扱うのは単独で遺構に付随するものと包含層出土遺物に限った。その他後代の遺構に混入したものについては、報告書という体裁上、該期の遺物の広がりを示す目的から敢えて抽出をおこなわず、遺構の帰属時期を問わずに出土地点を優先して報告している。そのため、図版によってははなはだ煩雑な印象を受けるものもあるが了承願いたい。なお、このことは縄文時代遺物に限らず、古代以前のものについても中世に帰属する遺構の中で同様な扱いをしている。それらについての詳細は、本章第4節末の遺物観察表を参照願いたい。また、SD-17以外の遺構については実測図を割愛している。

SP-01

1区東南隅に位置し、略椭円形を呈する2段掘りのビットである。長径50cm、短径42.2cm、深さ最深部で30.5cmを測る。遺物は打製土器が1点出土している。6は図の上半を欠損しているが、長さ現存で13.1cm、幅7.9cm、厚さ2.1cm、重さは268gであり、自然面を多く残している。石質は凝灰岩である。

SP-02

1区東南角近くに位置し、略椭円形を呈する。長径30cm、深さ9.5cmの小さなビットであり、暗褐色土を基調とした单層のものである。遺物は1点出土している。1は口縁部が大きく外反して開く深鉢である。内外面共に強い横ナデを施し、端部は強い摘みナデで先細りに仕上げた後等間隔で外面より強く押圧を加え波状に見せる。黄褐色を呈し焼成は良い。

SP-18

3区中央南端に位置し、椭円形を呈する。長径64.8cm、短径54.4cm、深さ20cmを測る大型のビットである。2は斜位に縄文を施す体部片である。褐灰色を呈し、施文原体はLRである。他に羽状縄文を施す同一個体と思われる体部小片が1点出土している。

SP-19

SP-18のすぐ北側に位置する略椭円形を呈するビットであり、長径30.4cm、深さ9cmを測る。3は灰黄褐色を呈する浅鉢の口縁部小片である。口唇端部に体部と同一の原体で縄文を施しており、

沈線と口縁端部の広がりより波状口縁となる可能性がある。

S P - 3 0

3 区北東側、S I - 0.5 の西に接する不定形のピットであり、内部にテラスを有する。長径46.4cm、深さ中央で35cmを測る。4は口縁端部が大きく外反して開く精製の深鉢である。端部に上面より等間隔で押圧を加え、小さな波状に見せる。外面に上位より3本-2本-3本のヘラ沈線を横位に施し、外周に対して約30度に1回の割合で(・)状の線刻を持つ。内面は4本のやや太いヘラ沈線をやはり横位に施し、外面に対応する位置で円形の刺突文を上下に2列持つ。全体に炭化物が付着しているが、胎土の素地にはぶい黄橙色を呈する。

S D - 1 7 (遺構 第4図)

高橋川の右岸7区の北端に位置する自然河道である。環状を呈するように見えるが、検出時に黒色土を確認した部分のみの掘進であり、実際は黒色土が内側下層へ続いているが河床となる。内側については上面を黄褐色土が覆っており、後代の耕作に関係する畝間溝状の溝が確認されている。また、弥生時代後期後半の壺半個体分も確認されており、このころまでには機能を失い埋まつたものと考えられる。遺物については水分を多く含んだ非常に柔軟な状態での出土であり、接合は適わなかった。平成2年度に石川県立埋蔵文化財センターが検出した流路と一致するものである。また、溝本体に帰属する遺物は出土していない。

包含層出土遺物

上器片が1点、打製土掘具が7点出土している。本遺跡からは後代の遺構に混入したものを含めほぼ全城より該期の遺物が出土しているが、包含層遺物に限っては現高橋川を挟んだ対岸の7区に集中する傾向が認められる。掲載したものの中では7・8が1区より、9が4区より出土している他はすべて7区よりの出土である。5は粗製深鉢の体部片と思われる。斜縞文を横位に施し、施文原体はRLを用いている。打製土掘具については以下の表に一括することとする。

表-1 包含層出土打製土掘具一覧

No.	サイズ(cm)	重量	石質	No.	サイズ(cm)	重量	石質
7	長12.2、幅8.5、厚1.9	231g	安山岩	11	長9.1、幅5.9、厚2.6	171g	凝灰岩
8	長14.9、幅7.8、厚2.1	210g	凝灰岩	12	長12.3、幅7.7、厚3.4	414g	凝灰岩
9	長18.2、幅9.0、厚2.5	444g	凝灰岩	13	長9.0、幅6.1、厚2.1	173g	凝灰岩
10	長7.4、幅6.2、厚2.2	124g	安山岩				

* サイズについてはすべて現存部分でのデータである。

これら的一群は概ね縄文時代後期中葉の酒見式（加曾利B2）に比定されるものであり、当町では押野大塚遺跡と並び最も古い部類に属する。高橋川流域の周辺遺跡では、若干ではあるが縄文時代晚期中屋式土器や弥生時代前期柴山出土式土器を作う例が報告されているが本遺跡では確認されておらず、むしろ北西側に連なる富樫館跡複土居地区や同ノダ地区に該期のものが散見される。集落を構成する主要な遺構は確認されていないものの、縄文時代後期中葉には本遺跡から北西側約500m程度の範囲である一定の広がりを持っていたことは間違いないようである。

2 弥生時代（遺物 第7図）

確実に弥生時代に属すると思われるものに堅穴住居2棟、土坑1基がある。これらは本遺跡南側の5区及び7区に位置しており、その他実測し得なかった包含層出土の該期遺物も5区及び南端の7区に集中して見られる傾向を示している。周知のとおり本遺跡の南側至近には弥生時代後期後半の集落跡である扇台遺跡が存在しており、本遺跡で確認された一群はその北限を示しているものと捉えるの

が妥当であろう。

S I - 1 0 (第6図)

5区中央北端の最も遺構が密集した地点に位置し、端正な隅丸方形を呈する住居である。南壁を中心の竪穴状遺構に破壊されているが、主要な部分の残りは良い。軸長5.21m、深さ10~15cm、床面積推定で約24.5m²、軸方位N40°Wを測り、北半にのみ幅32~48cm、深さ13~16cmの壁溝を持つ。主柱は4本と思われるが、南側の1本は確認されていない。柱穴は径50~64cmの略円形を呈しており、深さは床面より32cm程度である。南東側の壁に接して炉跡かと思われる深さ10cmほどの四角い落ち込みを検出しているが、焼土等は確認されていない。内底部は平らに仕上げられており、2基のピットを持つ。遺物は5点図化しており、すべて覆土より出土したものである。14は丸く脛の張る小壺である。口径17.2cm、胴部径16.0cmを測り、にぶい黄橙色を呈する。頸部を除く外面に煤が付着しており、摩耗・剥離が見られる。15・16は壺の口縁である。15は口径12.0cm、16は9.6cmを測りいずれも灰白色を呈している。17はずんぐりとした作りの底部である。底径5.8cmを測り灰黄褐色を呈する。18は高坏受部である。口径22.1cmを測り黄橙色を呈する。本住居より出土した土器はいずれも小片であり、18は特に摩耗が激しい。

S I - 1 5 (第6図)

5区南端に位置し、過半が調査区外へ延びているため全容は不明である。東側の壁部分に自然礫の噛み込みが激しくプランの確認は曖昧であるが、状態の良い西側の意匠を見る限り円形もしくは多角形となる可能性もある。深さ6~9cmを測り、西端から中央にかけて幅27cm、深さ5cmの壁溝が巡る。主柱穴及びその他の付随する遺構は確認されていない。遺物は2点図化している。19は高坏の脚部である。長さ現存部で11.7cm、幅最大で4.0cmを測る棒状脚であり、胎土に海綿骨片を少量含む。黄橙色を呈し、焼成は並である。20は台付鉢の鉢部底部であろう。大きく膨らんだ体部を持ち、橙色を呈する。胎土に海綿骨片を少量含み、焼成は並である。摩耗の激しい個体である。

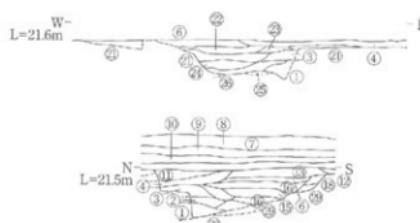
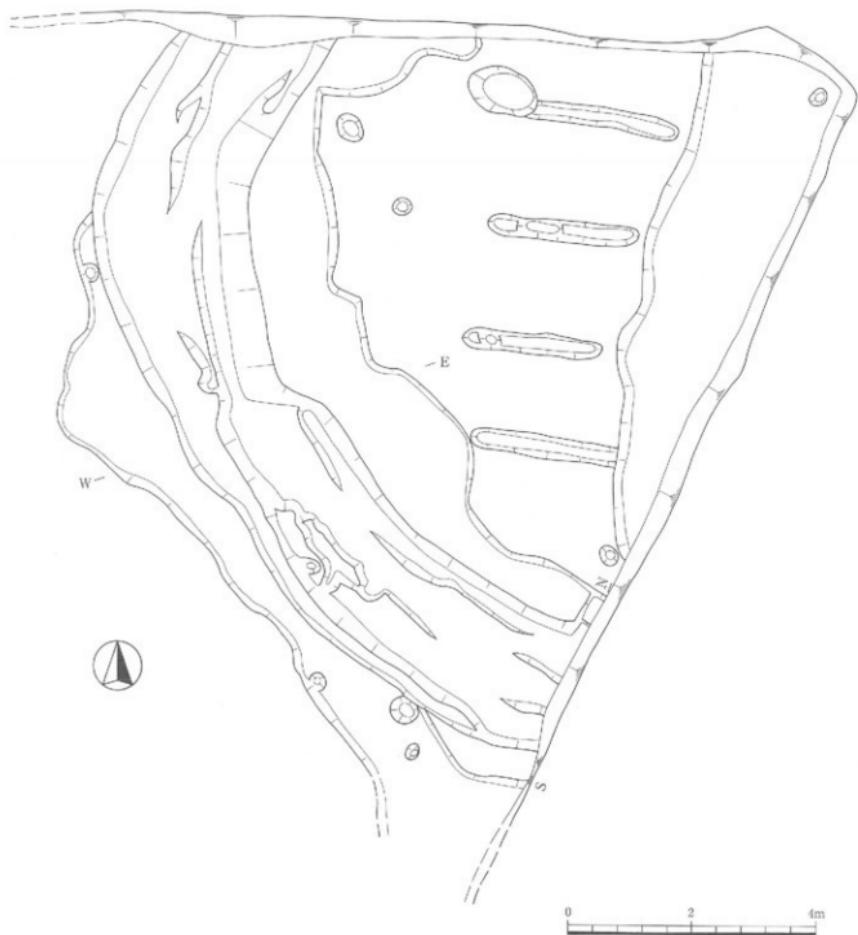
S K - 5 0 (第35図)

7区中央に位置する略方形を呈する土坑であり、軸長南北で128cm、深さ18cmを測る。地山、覆土共に水分を多く含んだ粘土質であり、高橋川左岸の1~6区とは大きく様子が異なる。遺物は5点図化している。23は口径20.0cmを測る有段口縁の壺である。段部がかなり弛緩しており、外面に擬凹線を持たない。胎土は荒く、器肌に小穂が多数表出しており、灰白色の色調を呈する。24は口径10.4cmを測る壺の口縁である。全体に摩耗が激しく、灰白色を呈する。25は台付葵瓣壺の壺底部であろう。底径16.2cmを測り、やはり灰白色を呈する。26・27は壺・壺類の底部である。26は底径推定で5.2cm、27は6.8cmを測る。共に胎土の粒子は粗いものの、色調は黄橙色を呈する。

包含層出土土器

21は4区南半より出土した有段口縁の壺である。段部外面が垂下し、やや外反ぎみに短く伸びる端部を丸縁に仕上げる。口径22.6cmを測り、にぶい黄橙色を呈する。ごく小片であり、摩耗が激しい。22は5区の竪穴状遺構が密集した地点の上面より出土している。くの字状口縁の端部を垂直に肥厚させ、断面三角状に仕上げた外面に擬凹線を施す。灰白色を呈しており、やはり摩耗が激しい。

これらの土器は概ね法仏式期から月影Ⅰ・Ⅱ式にわたるものを含んでおり、遺構の錯綜した状況から同時に存在するものか、それとも混入したものか判断に苦慮するものがあるが、実測点数こそすくないもののS I - 15はその平面形態と併せ法仏式期としてよいものと思われる。また、SK - 50に見られるやや新相を示す状況は隣接する扇台遺跡にも見られることであり、共に明確な外来系土器が確認されていないことから月影Ⅱ式期の範疇に収めておきたい。

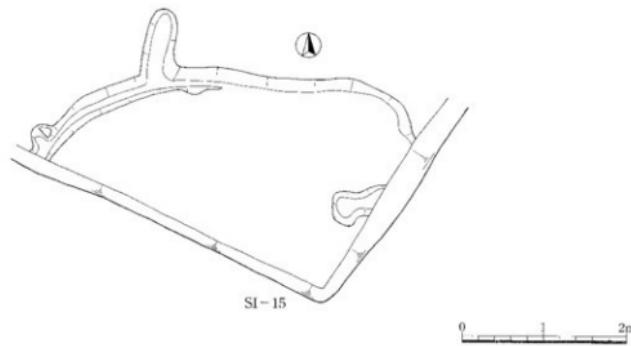
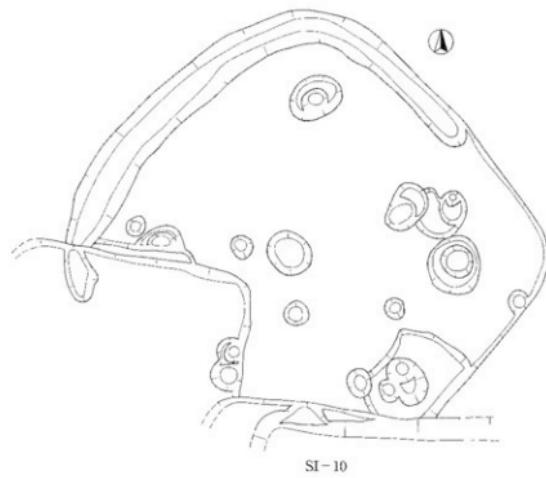


- | | | |
|----------------|--------------|------------|
| ① 青灰色砂質土 | ② 細粒灰黑色土 | 21 帶褐色的黃土 |
| ③ 黑灰色沙土 | ④ 細粒灰黑色土 | 22 帶灰褐色的黃土 |
| ⑤ 沉積沙土 | ⑥ 黑色粘土 (中礫層) | 23 黑灰褐色沙土 |
| ⑦ 黑色粘土 | ⑧ 黑褐色粘土 | 24 灰黑色沙土 |
| ⑨ 黑色粘土 | ⑩ 黑褐色粘土 | 25 細粒灰黑色土 |
| ⑪ 灰黑色粘土 (礫層) | ⑫ 黑色的粘土 | 26 細粒灰黑色土 |
| ⑬ 黑沉積物 (礫層) | ⑭ 黑灰褐色粘土 | 27 黑色粘土 |
| ⑮ 灰白色粘土 (古代灰土) | ⑯ オリーブ灰色細沙 | 28 黑色粘土 |
| ⑯ 灰褐色粘土 | ⑰ 灰褐色細沙 | 29 黃灰褐色的黃土 |
| ⑰ 褐色粘土 (海生岩系層) | ⑱ 黑褐色細沙 | 30 黃灰褐色的黃土 |

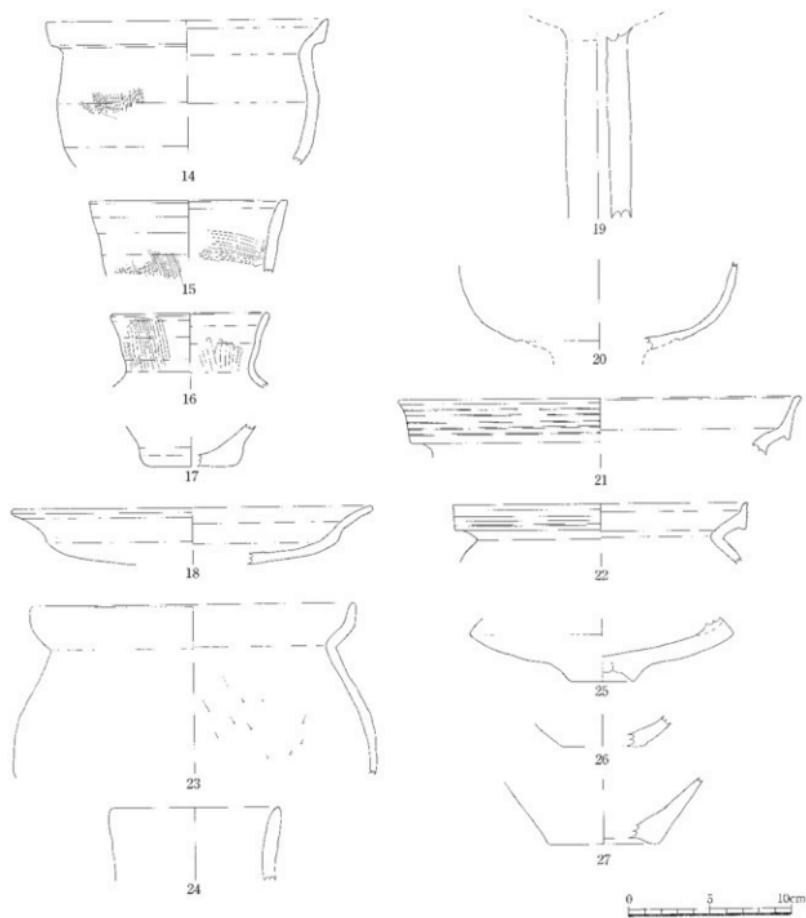
第4図 SD-17(S=1/80)



第5図 縄文時代遺物 (S=1/3) 1(SP-02)・2(5P-18)・3(5P-19)・4(SP-30)・6(3P-01)・5,7~13(貝壳屑)



第6図 弥生時代遺構 (SI-3=1/60)



第7図 張生時代遺物(S=1/3) 14~18(SI=10)・19・20(SI=15)・21・22(包含層)・23~27・(SK=50)

第3節 古代の遺構と遺物

遺物の様相より該期に帰属すると判断したものは竪穴住居（S I・竪穴状遺構含む）4棟、掘立柱建物（S B）2棟、樹列（S A）1基、土坑（S K）2基、ピット（S P）15基、溝（S D）2条、性格不明遺構（S X）1基である。これに遺構の形態及び立地の状況を加味し、更に竪穴住居2棟、掘立柱建物跡1棟、樹列1基を加えた上で古代という範疇で報告することとする。なお、出土遺物の詳細については次節末の遺物観察表を参照願いたい。

I 竪穴住居

S I - 0 1 (第8図)

1区のはば中央に位置し、略方形を呈する小さな住居である。長軸172cm、短軸166cm、深さ11cm、面積2.4m²を測り、主軸はN2° Wを指す。床面積は小さいものの、径26~43cm、深さ床面より44~60cmのしっかりとした主柱穴を4基各コーナーに持つ。内部の有効面積を考慮した場合、とても居住施設とは考えられず、カマド等の痕跡も確認されていない。松任市北安田北遺跡¹や野々市町栗田遺跡藤平地区²などでは一辺220~280cmと本例より二回りほど大きなものが確認されており、前者にあつてはカマドの痕跡が確認されている。また、両者とも柱穴は確認されておらず、平面プランも本例に比べ歪曲である。これらの類例を検証する時、その対象とされるのは主に「厨房説」や「倉庫・作業小屋説」であったが、次のS I - 0 2と併せ本遺跡のような「しっかりと作り込まれた」上に使用痕跡を残さないもの、また主柱間の有効床面積が僅か0.8m²に満たないものについては従来の仮説を超えて検証しなければならないものであろう。その他、中央に見られる数基のピットと住居との先後関係は確認できていない。遺物は3点図化している（第11図28~30）。

S I - 0 2 (第8図)

1区中央北端、S I - 0 1の北西7mの地点に位置する。長軸176cm、短軸158cm、深さ21cm、床面積2.6m²、軸方位N7° Wを測りやや東西に長い方形を呈する。やはりしっかりとした4本主柱であり、径28~32cm、深さ床面より36cm前後の柱穴が四隅に配置されている。有効床面積（主柱芯・芯間）はやはり0.7m²程度である。S I - 0 1ともども該期の同種のものに比べ作りが丁寧であり、プランもしっかりとしている。遺物は2点図化している（第11図31・32）。

S I - 0 6 (第8図)

3区中央やや北寄りに位置し、略長方形を呈する。長軸263cm、短軸183cm、深さ24cm、床面積4.4m²を測り、軸方位はN8° Eを指す。北東側コーナーの意匠がやや崩れており、壁の立ち上がりも弛緩した状況を示す。柱穴となる可能性を持つものは北西側で確認された径32cm、深さ床面より25cmを測るピット1基のみであり、カマド等他の施設の痕跡は確認されなかった。遺物は3点図化している（第11図33~35）。

S I - 0 7 (第8図)

3区南東角に位置し、過半が調査区外へ延びているため全容は不明であるが、壁のライン及びコーナー部の意匠より端正な方形を呈するものと思われる。深さ15cm程度を測り、軸方位はN16° Eを指すものと推定される。内部に見られる小ピット群は本住居とは直接関係のないものである。遺物の出土はなかったが、前述の推定されるプランより本期に含めたものである。

S I - 0 8 (第8図)

4区北端に位置し、北壁部が僅かに調査区外へ続く住居である。長軸推定で345cm程度、短軸304cm、深さ40cm、床面積推定で10.4m²を測り、軸方位はN3° Wを指す。南東角に深さ床面より4cm程の不定

形な浅い窪みが確認されており、明確な焼上痕等の確認はなかったがカマドの痕跡と考えられる。また、中央に見られる土坑状の遺構については、設定したセクションベルトが降雨で倒壊してしまい住居との先後関係を確認することはできなかったが、底面レベルが床面より更に50cm近く掘り込まれていることと併せ、掘り進む段階で上面よりプランを確認することができなかつたことより本住居に付随する施設と考えてよいものであろう。その他、ピット状の遺構が数基確認されているが、柱穴となるものではない。遺物は8点図化している（第11図36～43）。

S I - 0 9 （第8図）

S I - 0 8 に隣接し、西側半分を切られている。規模を示すことは不可能であるが、S I - 0 8 よりも一回り大きな住居であろう。深さは36cmを測り、やや浅い。南西角に小さなピットを確認しているが、床面に対して1～2cm程度の窪みとも言えるものであり、積極的に柱穴と言えるものではない。ただ、該期の堅穴を数多く調査して得た経験からむしろこのような在り方を示す事例の方が圧倒的に多く、一考を要するものであろう。なお、本住居から遺物は確認されなかつた。

註 1 松任市北安田北遺跡 1 松任市教育委員会 1994 第4章 考察

2 采田遺跡藤平地区・清金アガトウ遺跡 野々市町教育委員会 2000 第4章第3節 まとめ

2 掘立柱建物

S B - 0 1 （第9図）

1区ほぼ中央に位置する3×2間の南北棟の建物であり、北梁間に庇状の施設を持つ。桁行758cm（庇部を含むと1,004cm）、梁行464cm、平均柱間距離は桁行で246cm、梁行で229cm、床面積は身舎で35.3m²を測り、軸方位はN1.5°Wである。柱穴プランは略（楕）円形若しくは方形で構成され、径42～64cm、深さ14～64cmを測る。南側梁の中柱は確認されていない。遺物はP-1～4まで7点図化している（第11図44～50）。

S B - 0 2 （第10図）

1区ほぼ中央北端に位置し、S B - 0 1との距離は15mの至近距離にあたる。北半が調査区外へ延びており全体の規模は不明であるが、梁行3間、桁行現状で3間を確認しており、南北棟の建物と思われる。梁行580cm、柱間距離は西より220・166・194cm、西桁北より182・138・142cmを測り、軸方位はN2°Wを指す。柱穴プランは略円形又は略方形を呈し、径54cm前後、深さ13～67cmを測るが、西桁南より3・4本目の柱穴掘方が一回り小さく径34cm、深さ17cm程度となる。遺物は出土していないが、主体となる柱穴の形状・規模及び遺跡内での位置と併せ該期に属するものとして判断した。

S B - 0 3 （第10図）

1区中央やや西寄りに位置する3×2間の南北棟の建物であり、西側に庇状の施設を持つ。桁行738cm、梁行538cm（庇部を含むと764cm）、床面積身舎で39.7m²、柱間距離は桁行で平均290cm、梁行西より230・238・296cmを測り、軸方位はN3°Eを指す。柱穴プランは略（楕）円形若しくは略方形を呈し、径40cm前後、深さ9～47cmを測るが、身舎南西角だけは径約80cmと飛び抜けて大きい。また、北側梁の中柱はS D - 0 1に破壊されているものと思われる。遺物はP-1～4まで各1点ずつ出土している（第11図51～54）。新しい様相の遺物は出土していないが、プラン及び柱穴の意匠より中世に位置付けられる可能性もある。

3 棚列

S A - 0 1 （第9図）

1区中央東側、S B - 0 1の東桁に重なるようにして南北に延びる3間の棚列である。長さ876cm

を測り、中央の柱穴 2 基を S B - 0 1 と重複する。柱間距離は北より 352・242・282cm を測り、軸方位は N15° E を指す。柱穴プランは略方形又は略円形を呈し、径 42~62cm、深さ 22~34cm を測る。S B - 0 2 に付随するものであろう。遺物は P - 1 より 4 点出土している（第11図55~58）。

S A - 0 2 (第10図)

1 区中央北側、S B - 0 3 の東側に位置する南北に延びる柵列である。現状で 3 間を確認しており、長さは 856cm を、柱間距離は北より 240・318・298cm を測り、軸方位は N1° W を指す。柱穴プランはほぼ略円形を呈し、径 36~42cm、深さ 35cm 程度を測る。遺物の出土は見られなかった。

4 土坑

S K - 0 1 (第8図)

1 区中央やや東側の S B - 0 1 南西側に重複して存在する端正な円形を呈する土坑である。径 102cm、深さ 122cm を測る円筒形であり、当初は井戸となる可能性も考えて掘り進んだが底面はきれいなシルト系の地山質土であり、湧水の可能性を認めることなく完掘したものである。遺物は埋土中層より 1 点のみ出土したものである（第12図59）。

S K - 4 9 (第35図)

6 区東端近くに位置する長径 229cm、短径 69cm、深さ 35~41cm を測る略長方形を呈する土坑である。他の古代に属する遺構がほぼ本遺跡の北半に集中するのに対して、やや異質な分布を見せる。遺物は出土していないが、西方 4m 余りに位置する同種の土坑も同時代のものである可能性がある。遺物は 2 点団化している（第12図60・61）。

5 ピット

当該期に属するピットは 15 基確認されており、5 区に位置する S P - 33 以外はすべて 1 区及び 3 区に集中している。このことは、前述の 6 区に存在する土坑と併せ南半にも該期の広がりが若干残ることを窺わせるが、中心となるのはやはり 3 区中央以北であることを物語っているものである。以下、ピットについては個別に記述すること避け、下記の表により一括することでご容赦願いたい。また、遺構図についてはははなはだ至小ではあるが卷末遺構全体図を参照いただきたい。

表 - 2 古代ピット一覧

No.	形状	径(cm)	深さ(cm)	土器No.	No.	形状	径(cm)	深さ(cm)	土器No.
03	椭円	(56)	33	第12図62	16	椭円	41	45	第12図72
04	椭円	32	23	63	17	略円	39	18	73
05	方	58	42	64・65	22	椭円	32	9	74
06	椭円	56	21	66	24	椭円	42	49	75
07	略円	36	28	67	26	椭円	50	48	76
09	椭円	36	21	68	28	椭円	56	38	77
10	椭円	44	32	69・70	33	略円	38	48	78
11	円	28	31	71					

6 その他の遺構

ここでは性格不明遺構と溝状遺構を一括して報告することとする。遺構図についてはピットと同様卷末の遺構全体図を参照いただきたい。なお、包含層出土遺物については割愛する。

S X - 0 3 (遺物 第12図79)

3区北東側に位置する不定形な落ち込み状の遺構であるが、東壁の掘り方が比較的しっかりしているため竪穴住居となるかもしれない。長軸308cm、深さ15cm程度を測るが、南西側では底面と遺構検出面との比高が僅かに1~2cm程度であり、床面が削平されていることも考えられる。なお、内部のピットは本遺構に伴うものではない。遺物は1点のみ図化している。

S D - 0 4 (遺物 第13図80)

1区中央に位置し、後出のS D - 0 1 東側に沿うように伸びる南北溝である。南側は削平されており終焉は確認できないが、S D - 0 2 と接する部分で完結するのであろうか。幅約42cm、深さ北端で6cm、南端で2cm、検出長10.9mを測る。遺物は1点のみの図化である。

S D - 0 8 (遺物 第13図81)

1~3区の南東端を弯曲して伸びる溝である。幅48~104cm、深さ北側で40cm、南側で35cm程度を測り、検出長は約55mである。遺物は1点のみの図化である。

この他にも1区東半から2区、3区東南隅にかけては遺物の確認はないものの同様な溝状遺構が集中して見られる。S D - 0 8 とはほぼ同じ規模のS D - 0 7 をはじめとして、これらはS D - 0 5 を除けば南西→北東の流路を志向しており、中世期に見られるほぼ東西南北を志向する溝群とは明らかに意識の異なるものと考えられる。ここでは遺跡の中での古地の傾向も含め、S D - 5 ~ 7 及び1 2 を該期のものとして扱いたい。

古代の遺物が出土した遺構は全体として見れば調査区の北半を中心に分布しており、本遺跡の北に位置する扇が丘ゴシヨ遺跡との関連が想起されるが、高橋川の南上流に連なる扇台遺跡や大額キウデン遺跡、北西に位置する扇が丘ヤグラダ遺跡においても濃淡の差はあるものの該期の遺構・遺物がある程度確認されている。本遺跡については概ね8世紀後半~9世紀代とやや幅のあるものであるが、周辺では細かな移動を伴いながら古代末を中心として人々の暮らしが連続と営まれていたのである。

第4節 中世以降の遺構と遺物

掘立柱建物29棟、横列5基、竪穴状遺構7基、土坑47基、方形溝遺構1基、その他ピット、溝、性格不明（落ち込み状）遺構を確認しており、遺構・遺物の量と内容より本遺跡において中心となる時期である。中央を東西に延びるS D - 0 9 と、調査区東側の南北溝S D - 0 1・1 1により四分割された地割りを窺うことが可能であり、それぞれに一定の建物群が配され竪穴状遺構・土坑群が付随する。1区西端から3区へ続き、南半で西折する南北方向の帶状ピット群は該期の遺構に伴うものと考えられ、小路で区割りされた集落像が浮かび上がる。出土した遺物の様相より、12世紀末から15世紀後半までは細かな移動を繰り返し存続していたことが知られるが、15世紀以降は急速に衰退していくものと思われる。

1 竪穴状遺構

通常の土坑状のものと区別し、床面の意匠が窺われ建物機能を有する可能性のあるものをS Iとして分離した。

S I - 0 3 (第14図)

1区西南に位置し、略台形を呈する。長軸2.7m（中央部分。以下同様）、短軸2.1m、深さ11cm、面積5.3m²を測り、軸方位はN3° Wを指す。明確な柱跡らしきものは確認されていない。また、遺物の出土も見られなかった。

S I - 0 4 (第14図)

3区北東側に位置する不定形な遺構である。長軸2.1m、短軸1.8m、深さ11cm、面積4.4m²を測り、軸方位はほぼ磁北を指す。プランの上からはS B - 0 7との明確な先後関係は把握されていない。遺物は1点図化している(第39図88)。

S I - 0 5 (第14図)

S I - 0 4の南1.2mの至近に位置し、略長方形を呈する。長軸4.0m、短軸2.2m、深さ21cm、面積8.1m²を測り、軸方位はN5° Eを指す。底面には目立った遺構を持たず、上記同様S B - 0 7との関係は不明である。遺物は10点図化している(第39図89~98)。

S I - 1 1 (第14図)

5区中央北側に位置し、比較的端正な方形を呈する。長軸3.1m、短軸3.0m、深さ20cm、面積推定で9.7m²を測り、軸方位N13° Eを指す。プランの確認より後述のS I - 12に先行するものと思われるが、遺構が錯綜しておりS B - 3 0との先後関係は確認できていない。遺物は3点図化している(第39図99~101)。

S I - 1 2 (第14図)

S I - 1 1の南東に接しており端正な方形を呈する。長軸3.9m、短軸3.4m、深さ42cm、面積13.6m²を測り、軸方位はN3° Eを指す。西辺にテラス状の段部を持ち、比高は23~30cmである。やはりS B - 3 0との先後関係は不明である。遺物は27点図化している(第39・40図102~128)。

S I - 1 3 (第15図)

S I - 1 1の南西にコーナー部を接しており、略長方形を呈する。長軸推定で4.3m、短軸2.6m、深さ15cm程度、面積推定で11.5m²を測り、軸方位N6° Eを指す。底面の仕上げが粗く深さが一定していない。また、他ピットとの干渉が激しく付随する内部遺構を特定することは不可能であり、遺物は10点図化しているが(第40図129~138)、確実に作ると思われるものは抽出が困難である。調査時の所見から、遺構としてはここ(中世)での最古段階のものと考えている。

S I - 1 4 (第15図)

S I - 1 2の南1.2mに位置し、略方形を呈する。長軸推定で4.0m、短軸3.8m、深さ23cm、面積14.2m²を測り、軸方位はN4° Eを指す。中央をS B - 3 0の桁筋が貫通するが、柱穴の痕跡は確認されていない。上記のS I - 1 1・1 2と併せ古代の堅穴住居と意匠面での共通点が多く、中世初頭段階での付属屋的建物と考えられる。遺物は3点図化している(第40図139~141)。

2 挖立柱建物

遺物を伴うものが少なく、大半はプラン及び柱穴の意匠、柱間距離等より中世段階と判断したものである。

S B - 0 4 (第16図)

2区東半に位置する2×2間南北棟の側柱建物であり、東側に庇を持つ。桁行4.4m、梁行3.9m(庇1.3m)、床面積身合で17.2m²を測り、軸方位はN6° Eを指す。柱穴は略楕円形若しくは円形を呈し、径25~46cm、深さ8~44cmである。遺物は出土していない。

S B - 0 5 (第16図)

2区西半北側に位置する2×2間南北棟の側柱建物である。桁行4.4m、梁行3.9m、床面積17.2m²を測り、軸方位はN6° Eを指す。柱穴は略楕円形若しくは方形を呈し、径37~54cm、深さ10~31cmである。南側で干渉するS D - 0 9は近世段階でその流路を再利用されており、柱穴は底面近くでの検出である。遺物は出土していない。

S B - 0 6 (第16図)

S B - 0 5 の南 1m の至近に位置する東西棟の建物である。中央に間仕切り状の柱穴を有し、桁は北側 2 間、南側 3 間となる。桁行 4.2m、梁行 3.4m、床面積 14.3m² を測り、軸方位は N4° E を指す。柱穴は略楕円形を呈し、径 29~49cm、深さ 13~40cm である。遺物は出土していない。

S B - 0 7 (第17図)

3 区北東隅に位置する 5 × 3 間南北棟の総柱建物である。桁行 12.3m、梁行 7.6m、床面積 93.5m² を測り、軸方位は N7° W を指す。建物南半で間仕切りにより柱間距離を違えており、北から東桁 (2.1) - 2.2 - 2.6 - 3.0 - 2.4m、西桁 (2.2) - (2.2) - 4.1 - 2.7 - 1.1m となる。柱穴は略楕円形若しくは円形を呈し、径 28~53cm、深さ 9~36cm である。遺物は P - 1 - 2 よりそれぞれ 1 点ずつ出土している（第40図142・143）。

S B - 0 8 (第16図)

3 区中央北側に位置する 2 × 2 間南北棟の建物である。桁行 5.2m、梁行 3.9m、床面積 20.3m² を測り、軸方位は N2° W を指す。南側で間仕切りされ、柱間距離は桁行で北から 3.5 - 1.7m となる。柱穴は略楕円形を呈し、径 33~52cm、深さ 16~39cm である。遺物は出土していない。

S B - 0 9 (第18図)

S B - 0 8 の南方 2.2m に位置する 2 × 2 間東西棟の総柱建物である。桁行 6.1m、梁行 4.1m、床面積 25.0m² を測り、軸方位は N10° E を指す。柱穴は略楕円形を呈し、径 27~52cm、深さ 17~32cm となるが西梁の柱穴は確認されていない。また、遺物は出土していない。

S B - 1 0 (第18図)

S B - 0 9 の西 1m の至近に位置する 3 × 2 間南北棟の建物である。桁行 5.2m、梁行 4.4m、床面積 22.9m² を測り、軸方位は N10° E を指す。柱穴は略楕円形を呈し、径 27~50cm、深さ 10~45cm となり北側で間仕切りされる。遺物は出土していない。

S B - 1 1 (第19図)

3 区西北端に位置する 3 × 3 間南北棟の総柱建物であり、後述する S B - 1 2 と重複するが柱穴は直接干渉しない。桁行 7.9m、梁行 7.3m、床面積 57.7m² を測り、軸方位は N4° E を指す。柱穴は略楕円形若しくは円形を呈し、径 30~50cm、深さ 20~40cm である。遺物は出土していない。

S B - 1 2 (第19図)

S B - 1 1 に重複する 4 × 3 間東西棟の総柱建物であり、北東角及び南西角の柱穴を欠いている。北側梁の柱間距離が極端に狭く北面庇付きの建物となろう。桁行 9.3m、梁行身舎で 6.2m、庇を含むと 8.0m となり床面積は身舎 57.7m²、庇を含めると 74.4m² となる。軸方位は N3° E を指している。柱穴は略楕円形を呈し、径 30~52cm、深さ 16~40cm である。遺物は P - 1 より 1 点、P - 2 より 2 点の計 3 点図化している（第40図144~146）。

S B - 1 3 (第20図)

3 区南半東側に位置する 2 × 2 間の総柱建物であるが、柱間距離が桁 4.5m (3.6m)、梁 3.5m と極端に広く、中間に礎石を持つ可能性も考えられるが調査では確認されていない。桁行 8.1m、梁行 7.0m、床面積 56.7m² を測り、軸方位は N27° W と他の建物群に比べ大きく西に振れる。柱穴は略楕円形を呈し、径 33~68cm、深さ 15~34cm である。遺物は出土していない。

S B - 1 4 (第20図)

3 区南半中央に位置する 2 × 2 間東西棟の総柱建物であり、南東角の柱穴を欠く。S B - 1 5 と重複するが、柱穴の直接干渉はない。桁行 6.1m、梁行 4.3m、床面積 26.2m² を測り、軸方位は N4° E を指す。柱穴は略楕円形若しくは円形を呈し、径 32~54cm、深さ 10~21cm である。遺物は出土していない。

S B - 1 5 (第18図)

S B - 1 4 の南に一部重複する 2 × 2 間南北棟の総柱建物である。桁行 6.3m、梁行 4.7m、床面積

29.6mを測り、軸方位N10° Eを指す。柱穴は略楕円形を呈し、径31~48cm、深さ22~40cmである。遺物は出土していない。

S B - 1 6 (第18図)

S B - 1 5 の南方7.2mに位置する2×1間南北棟の側柱建物である。桁行5.4m、梁行2.3m、床面積12.4m²を測り、軸方位はN10° Eを指す。柱穴は略楕円形若しくは円形を呈し、径25~50cm、深さ8~47cmである。遺物は出土していない。

S B - 1 7 (第21図)

3区中央西側に位置する4×2間東西棟の総柱建物であり、南西角と東から2番目の中柱を欠いている。桁行9.3m、梁行4.6m、床面積42.8m²を測り、軸方位N12° Eを指す。桁行西端の柱間距離が若干狭く、庇状の施設となる可能性もある。柱穴は略楕円形を呈し、径26~47cm、深さ10~36cmである。遺物は出土していない。

S B - 1 8 (第21図)

S B - 1 7 の南至近に位置し、間隙は1.2mたらずである。3×2間南北棟の総柱建物であり、桁行7.8m、梁行4.6m、床面積35.9m²を測る。南西角の柱穴を欠いており、軸方位はN4° Eを指す。柱穴は略楕円形を呈し、径29~47cm、深さ17~48cmと平均して小振りである。遺物は出土していない。

S B - 1 9 (第20図)

S B - 1 8 に重複しており、若干南側へずれる。3×2間南北棟の総柱建物であり、桁行5.6m、梁行3.6m、床面積20.2m²を測る。柱穴は略楕円形若しくは円形を呈し、径30~36cm、深さ12~28cmである。軸方位はN8° Eを指し、遺物は出土していない。

S B - 2 0 (第22図)

S B - 1 8 の西1.2mに位置する変則的な建物であり、3×1間南北棟の側柱建物の南西部分が西に2間分張り出す。桁行東側で8.4m、西側で4.6m、梁行北側で3.0m、南側で6.4メートルを測り、床面積は40.8m²となる。南から2本目に中柱を、3本目手前に西側張り出し部分の受け柱を持ち、軸方位はN2° Eを指す。柱穴は円形若しくは略楕円形を呈し、径28~58cm、深さ8~23cmである。遺物は出土していない。

S B - 2 1 (第22図)

4区ほぼ中央に位置する3×1間の側柱建物であり、南西面に庇を持つ。桁行5.6m、梁行3.4m(底部2.0m)床面積身合で19.0m²を測り、軸方位はN39° WとS B - 1 3 と同様大きく西へ振れる。柱穴は略楕円形若しくは円形を呈し、径27~44cm、深さ9~32cmである。遺物は出土していない。

S B - 2 2 (第23図)

S B - 2 1 の西側に位置する6×1間南北棟の細長い側柱建物であり、その間隙は2.3mである。桁行15.0m、梁行2.2m、床面積33.0m²を測り、軸方位N1° Eを指すが柱間距離は一定しない。柱穴は略楕円形を呈し、径30~45cm、深さ9~28cmである。後述する構列S A - 0 5 とセットになるものと考えられ、土間打ちの納屋のような機能を考えられる。遺物は出土していない。

S B - 2 3 (第24図)

S B - 2 2 の南東側に接する5×4間南北棟の総柱建物である。桁行12.8m、梁行9.0m、床面積115.2m²を測り、軸方位はほぼ磁北を指す。西端梁の柱間距離がやや狭く、西面庇となるかも知れない。柱穴は略円形若しくは円形を呈し、径32~70cm、深さ15~38cmである。遺物はP - 1・2より各1点ずつ図化している(第40図147・148)。

S B - 2 4 (第25図)

S B - 2 3 の北側に重複する3×1間東西棟の建物であり、柱穴の直接干渉はない。桁行6.6m、梁行2.3m、床面積15.2m²を測り、軸方位はほぼ磁北を指す。柱穴は略楕円形を呈し、径41~65cm、深さ

15~35cmであり、後述のSB-25と同一の建物である可能性も考慮したが、主軸方位が若干ことなることからここでは別の建物として扱っている。遺物はP-1より1点出土している（第40図149）。

SB-25（第25図）

SB-24の南方2.8mに位置し、やはりSB-23と重複する3×3間南北棟の総柱建物であり、西面に庇を持つが北西角の柱を欠いている。桁行7.6m、梁行7.6m（底部2.0m）、床面積身舎で57.8m²を測り、軸方位はN3°Eを指す。柱穴は略楕円形を呈し、径41~73cm、深さ18~32cmである。遺物は出土していない。

SB-26（第26図）

SB-25の北東角に重複する3×2間南北棟の総柱建物であり、北西角の柱穴をSB-27と共に有する。桁行7.1m、梁行5.0m、床面積35.5m²を測り、軸方位はほぼ磁北を指す。柱穴は略楕円形を呈し、径29~56cm、深さ9~24cmである。遺物は出土していない。

SB-27（第22図）

4区南端に位置する3×2間南北棟の総柱建物である。桁行7.0m、梁行3.4m、床面積23.8m²を測り、軸方位N8°Eを指す。通有のものに比べ梁の柱間距離が狭く、SB-19と同程度であるが本例の方が柱間距離は長い。柱穴は略楕円形若しくは不定形であり、径38~57cm、深さ10~20cmである。遺物は出土していない。

SB-28（第26図）

5区北東端に位置する3×1間南北棟の側柱建物であり、南西部分で西に1間四方張り出す。桁行6.2m、梁行北側で3.5m、南側で6.0m、床面積27.0m²を測り、軸方位はN1°Wを指す。柱穴は略楕円形若しくは方形を呈し、径28~52cm、深さ11~27cmである。遺物は出土していない。

SB-29（第26図）

SB-28の南方2.7mに位置する3×2間南北棟の総柱建物であり、南東側は一部調査区外へ伸びる。桁行推定6.6m、梁行4.6m、床面積30.4m²を測り、軸方位はほぼ磁北を指す。柱穴は略円形を呈し、径37~51cm、深さ12~32cmであり南端桁の柱間距離が若干短い。遺物はP-1より1点出土している（第41図150）。

SB-30（第27図）

5区ほぼ中央に位置する6×3間南北棟の総柱建物であり、西面に庇を持つが南西角の柱穴を欠いている。桁行12.0m、梁行6.4m（底部1.1m）、床面積身舎で76.8m²を測り、軸方位はほぼ磁北を指す。柱穴は略楕円形を呈し、径35~64cm、深さ11~50cmである。数多く重複する堅穴状遺構や土坑との先後関係はまったく検証できていない。遺物はP-1・2より各1点ずつ図化している（第41図151・152）。

SB-31（第28図）

5区西半中央に位置する5×4間南北棟の総柱建物であり、後述のSB-32と完全に重複する。本遺跡中最も遺構密度の高い区域であり、錯綜した状況から抽出に窮したが、西面を除く三面庇の建物になる可能性もある。桁行11.8m、梁行9.0m、床面積106.2m²を測り、軸方位はN4°Eを指す。柱穴は略楕円形を呈し、径30~56cm、深さ11~63cmである。遺物はP-1~3より各1点ずつ図化しているが、検出状況より混入品がかなり含まれていた（第41図153~155）。

SB-32（第29図）

SB-31を覆うようにして5区西半のほとんどを占める本遺跡で最大の建物である。身舎6×4間南北棟の総柱建物であり、四面に庇を持つ。桁行19.0m（身舎14.2m）、梁行14.4m（身舎9.2m）、床面積273.6m²（身舎130.6m²）を測り、軸方位はN2°Eを指す。柱穴は略楕円形若しくは円形を呈しており、径37~74cm、深さ28~43cmである。柱穴の切り合いでSB-31に先行することは確実である。

る。遺物はP-1~10で15点図化している（第41図156~170）。

3 棚列

中世に属するものとして5基の棚列を抽出したが、SB-03を中心段階の建物と見た場合付属するSA-02も中世のものとするのが妥当であろう。

SA-03（第23図）

3区北端に位置し、SB-08の東面及び北面を囲むようにL字形を呈する。南北柵は長さ9.8mを測り、柱数は6本と思われるが北から2本目にあたる柱が欠落している。東西柵は長さ8.2mを測り、柱数はコーナー部の共有柱を含めて5本である。東西柵は柱間距離が一定しない。遺物は出土していないが、配置状況よりSB-08に付随するものであろう。

SA-04（第30図）

3区中央に東西に延びる棚列である。SD-09に沿うようにして設けられており、長さ14.8m、柱数6本を数える。遺物は出土していないが、SB-09・10あたりに付隨するものであろう。

SA-05（第23図）

4区中央に位置するSB-22に並行して延びる南北柵である。長さ9.2m、柱数5本を数え、SB-22と並存する可能性が高い。遺物は出土していない。

SA-06（第30図）

5区北東端に位置する東西柵である。調査区外へ延びるため全容は不明であるが、現状で長さ6m、柱数5本を検出している。SD-11との先後関係は定かでない。遺物は出土していない。

SA-07（第23図）

3区南半中央、道状遺構の東側に沿うように延びる南北柵であり、長さ10.4m、柱数5本を数える。SB-15あたりに付属するものであろうか。遺物は出土していない。

4 土坑（遺物 第41図171~第45図271）

中世段階のものとして47基の土坑を検出している。これらは形態により大まかに4種類に分類できる可能性を持っている。すなわち、

- ① 平面プラン円形若しくはやや崩れた楕円形を呈し、深さ10~60cm前後のものがある。
 - ② 平面プランは比較的コーナー部の明瞭な略方形を呈し、深さ10~80cm前後のものがある。底面にテラス及び段差を有するものがある。いわゆる堅穴状遺構に似るが規模は総じて小さい。
 - ③ やや大型の長方形を呈するもの。コーナー部の意匠は比較的明瞭であり深さは総じて浅い。
 - ④ 上記以外のもの。大型で深いものや略円形を呈するもの、不定形なもの等がある。
- となる。ここでは、紙幅の関係もあり表-3で一括することでご容赦願いたい。なお、遺物については出土した遺稿No.を遺物観察表に明記している。

遺跡内でのこれらの配置を見る限り、中央に位置するSD-09を境としてその北方道状遺構の東側に沿う部分と、5区の2箇所に分布の中心があることが読み取れる。この内前者は更に南北に分割される可能性を持つ。その他の部分では非常に散発的な状況であり、4区と古代の遺構が中心となる1区東半には存在しない。また、③タイプの5区への集中も指摘される。

表-3 中世土坑一覧表（単位：cm）

No.	長軸	短軸	深さ	タイプ	No.	長軸	短軸	深さ	タイプ
02	113	106	15	①	27	115	107	13	①
03	112	110	23	①	28	117	86	36	①
04	104	96	28	①	29	123	102	14	①
05	104	(98)	8	①	30	145	103	13	②
06	220	125	10	②	31	147	117	8	②
07	165	122	59	④	32	110	86	12	②
08	90	52	59	④	33	166	128	64	①
09	102	59	48	④	34	190	182	26	②
10	(104)	-	29	④	35	161	128	78	②
11	94	90	63	①	36	270	146	16	③
12	238	144	14	③	37	275	216	61	②
13	262	145	16	③	38	264	202	40	②
14	163	93	15	④	39	243	143	36	③
15	184	184	44	②	40	393	152	11	③
16	110	90	17	①	41	393	221	12	③
17	140	98	25	①	42	214	133	30	③
18	186	154	33	②	43	(250)	167	15	③
19	134	126	12	②	44	-	-	57	④
20	147	120	26	②	45	363	-	105	④
21	143	143	12	①	46	128	116	12	①
22	120	99	52	①	47	206	171	58	②
23	(183)	143	44	②	48	148	100	34	②
24	180	153	44	①	49	229	70	40	④
25	130	99	16	①	50	128	-	18	②
26	112	109	26	①					

この他、ピット・SXについては造構に対する細かな説明は割愛させていただくことでご了承願いたい。SXについてはほとんどが掘り方の把握もままならない緩い落ち込み状の造構を一括したものであるが、3区中央北側に位置するSX-04（長径200cm、深さ現状で85cm）は地山を掘り抜いて礫層にまで達しており、完掘していないものの井戸の可能性も捨てきれない。

5 溝（造構全体図参照）

本遺跡から出土した遺物総量の半数近くが溝出土品であり、その内SD-01・09・11からのものが大半を占める。これらは集落を区画する基幹となる溝であり、重要な役割を担っていたことがわかる。その他、3区南東隅から2区を経て1区で放射状に展開するSD-05・06・07・08・12は前述のとおり古代のものであり、5区南隅の直交する畝間溝状の造構は近世以降のものであろう。

S D - 0 1 (遺物 第48図361~428)

1区中央から3区北東角を経てSD-09に交差する南北溝である。検出長約34mを測り、幅1m程度、深さは北端で42cm、南端で20cm程度である。標高差でも約20cm北端が低くなっている。南側に

位置する S D - 1 1 とは流路がずれており、約14° 西に振れる。

S D - 0 2

1 区中央南側に位置する東西溝であり、S D - 0 9 との距離は23mである。S D - 0 1 を挟んで1 度途切れしており、検出長は東側3.5m、西側7.0mを測る。幅約45cm、深さ2 ~ 5 cm程度であり、ほぼ磁北に対して直交する。遺物は出土していない。

S D - 0 3

1 区西側から3 区にかけて道状遺構の東辺に沿って延びる細い溝である。検出長31.2mを測り1 区中程で一旦途切れている。幅は20 ~ 60cm の間で一定せず、深さは4 ~ 7 cm程度のものである。方向はほぼ磁北を向く。遺物は出土していない。

S D - 0 4

1 区中程北半に位置し、S D - 0 1 の東に沿って北へ延びる。検出長約11m、幅40cm前後であり、深さ3 ~ 4 cmと浅くところどころ削平されて振り方を失っている部分がある。遺物は出土していない。

S D - 0 9 (遺物 第51図429~460)

2 ~ 4 区にかけて延びる東西溝であり、本遺跡の区割りの基本となる遺構である。近世以降に流路を再利用されたらしく、上層に明灰色を呈する粘土層が堆積していたが、下層には本来の灰褐色を基調とする土が残されていた。検出長は約81mであり、幅1 ~ 1.8m、深さ東端で22cm、中程で28cm、西端で11cmを測るが底面の標高差はほとんどない。流路はほぼ東西方向であるが、3 区と4 区の間でやや乱れ、若干湾曲するようである。

S D - 1 0

3 区北東端に位置し、S D - 0 9 の至近から北へ向きを変え、更に東へ湾曲して終了する。4 区では確認されておらず S D - 0 9 との関係は不明である。検出長約25m、幅は40cm程度で均一であり、深さ10 ~ 12cm あり、北へ立ち上がった直線部分の方針はほぼ磁北を向く。遺物は出土していない。

S D - 1 1 (遺物 第53図461~495)

3 区東端から5 区北東端にかけて延びる南北溝であり、検出長は旧高橋川の流路部分を含め51mを測る。幅0.6 ~ 1.4m、深さ北端で21cm、南端で36cmであるが底面の標高差では8 cm北端が高い。流路は約9 度東に振れている。

S D - 1 3

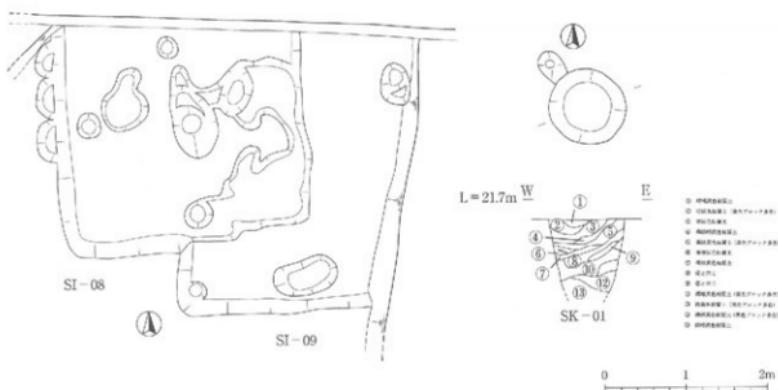
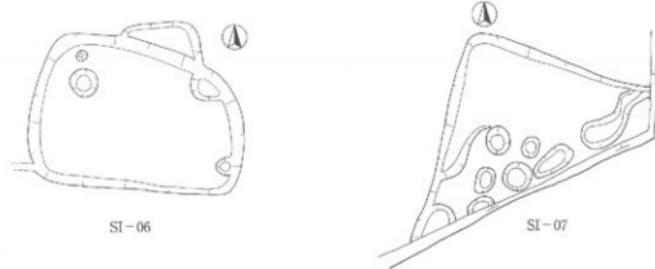
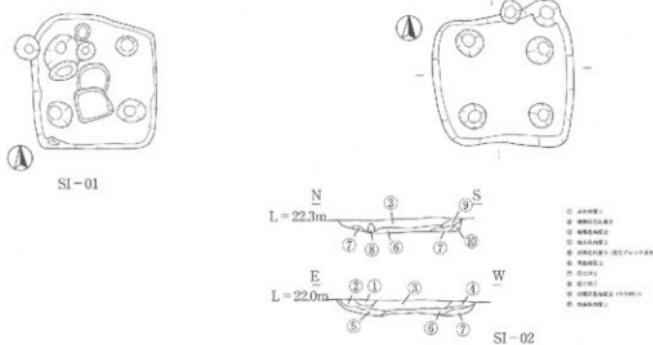
3 区南半に位置する東西溝であり、S D - 0 9 に沿うように延びる。両者の距離は約5 mであり、4 区では確認されていない。検出長38m、幅40 ~ 60cm、深さ東端で20cm、西端で7 cmであるが、底面の標高差はない。東端では他遺構の干渉が激しく判然といかないが、S D - 1 1 とは連絡しないようである。遺物は出土していない。

S D - 1 5 (第37図 遺物 第54・55図496~518)

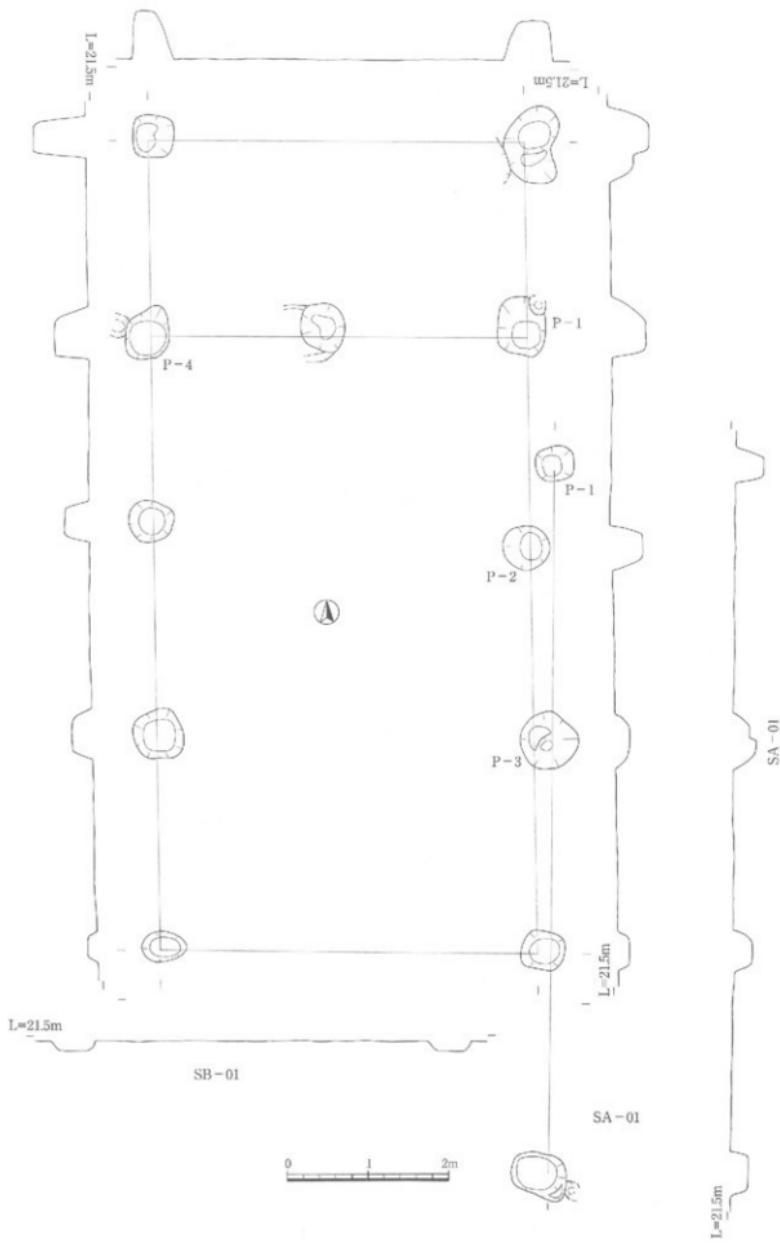
3 区北東側に位置する方形に巡ると思われる溝である。一边の長さは不明であるが、幅北辺で1.8m、西辺で1.3mを測り、深さは10 ~ 20cm である。底面には川原石とともに碎かれたような断面の鋭い礫が多数やや浮いた状態で確認されている。全容は窺い知れないが、墓である可能性が高いと考えている。

S D - 1 6 (遺物 第55図519~521)

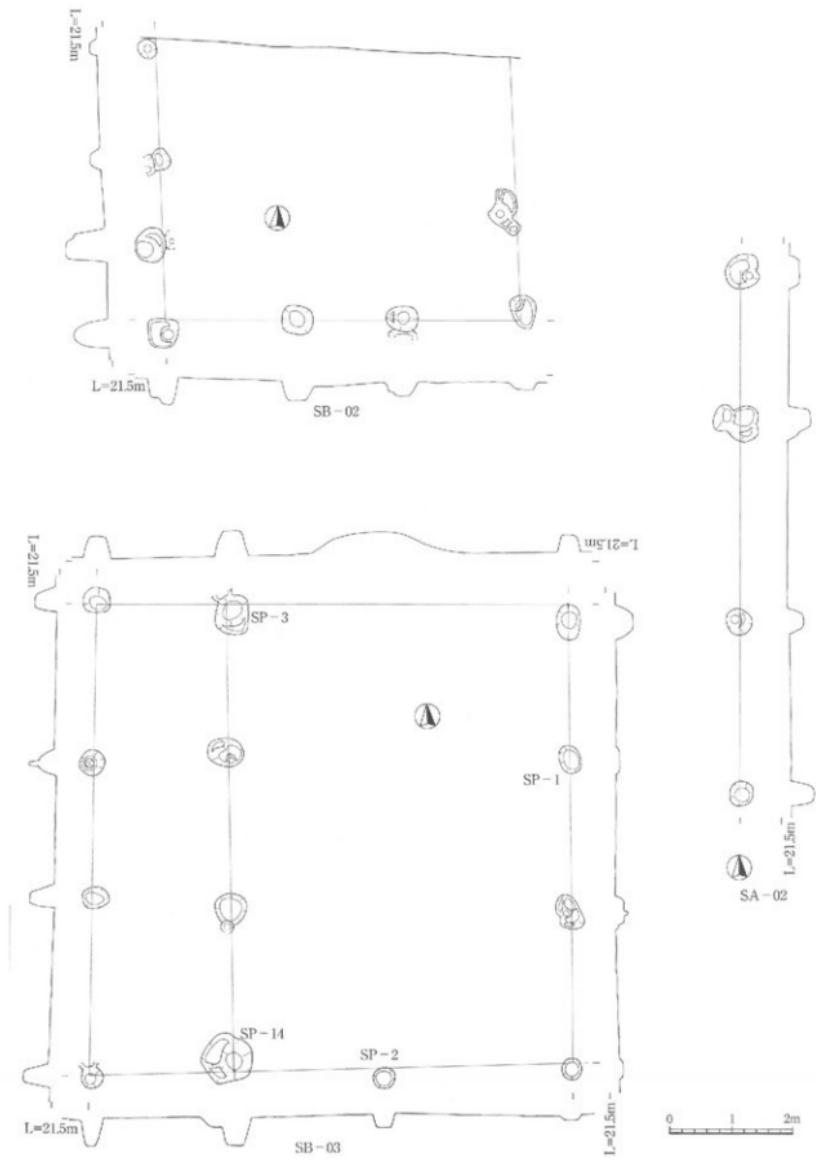
5 区西半に位置する小規模な溝であり、周辺に存在する近世段階の歓問溝のひとつと思われる。長さ3.8m、幅32cm、深さ6 ~ 8 cmを測る。遺物は後の混入であろう。



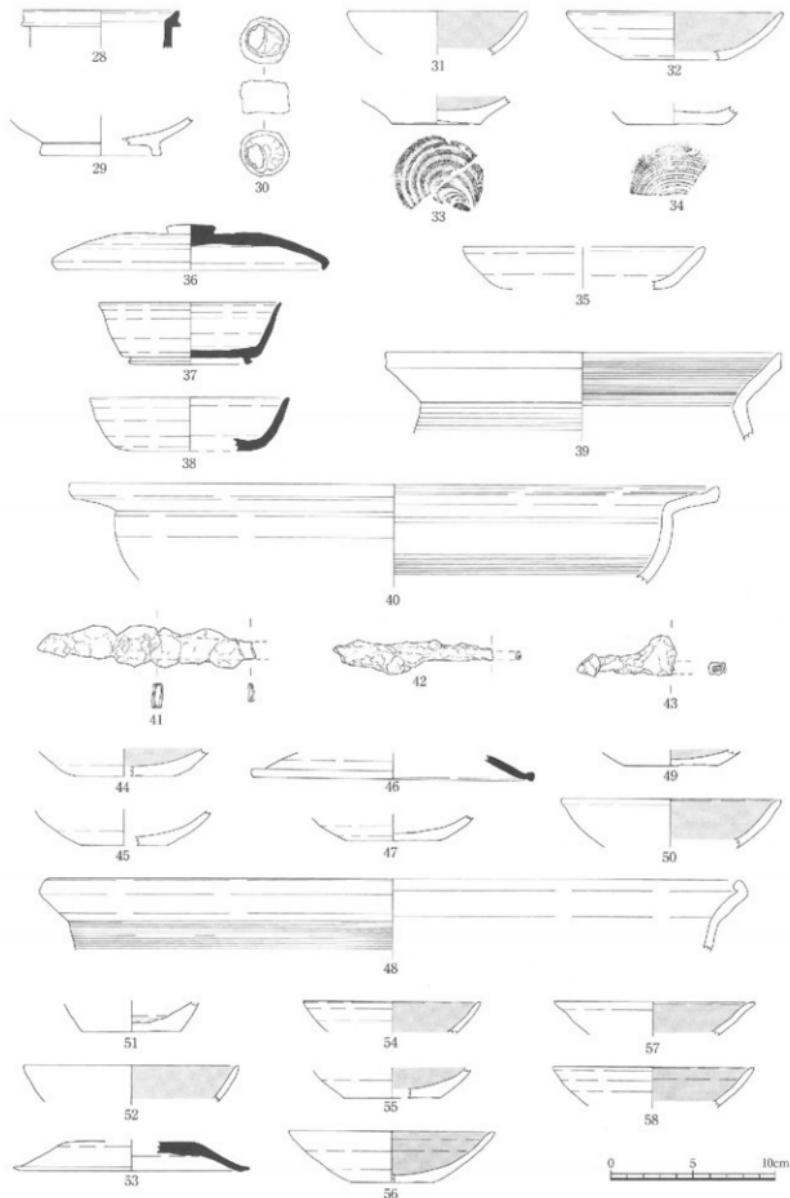
第8図 古代遺構 (SI-SK, S=1/60)



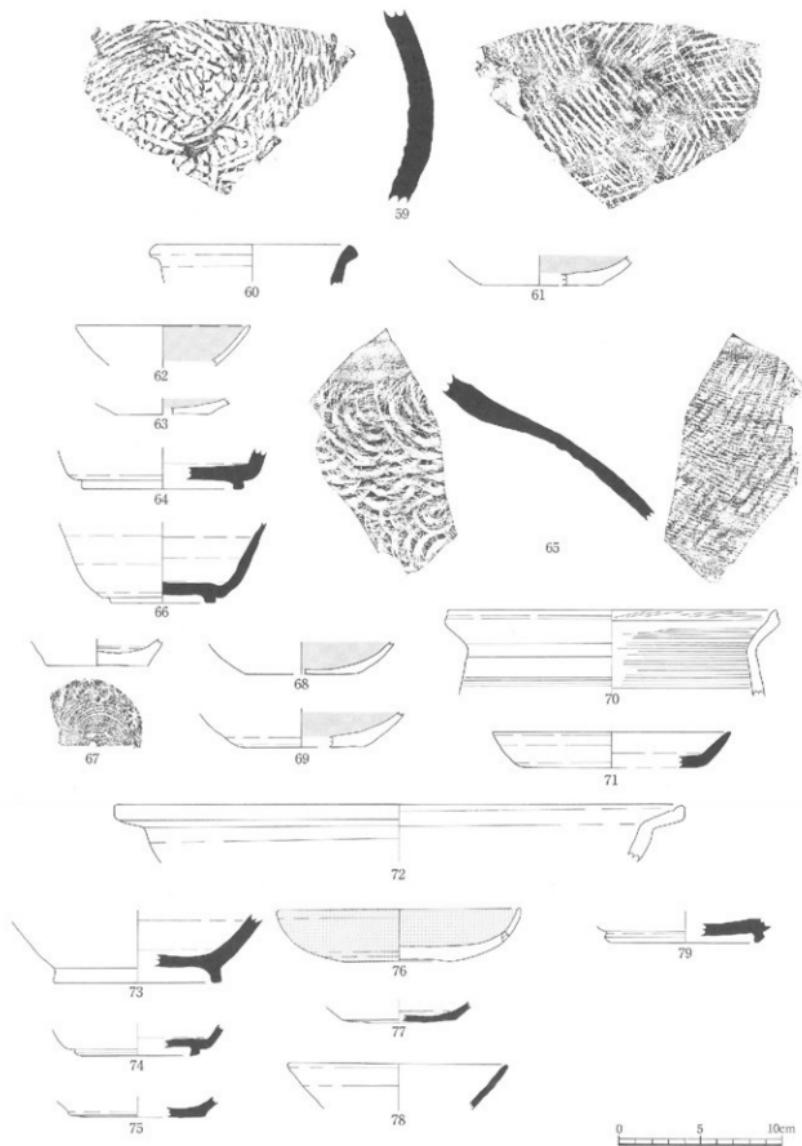
第9図 SB-01・SA-01(S=1/60)



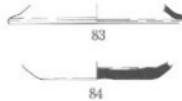
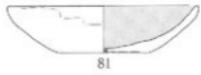
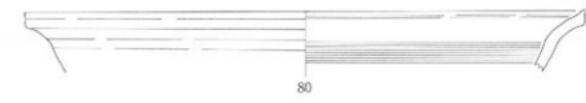
第10図 SB-02・03, SA-02 (S=1.80)



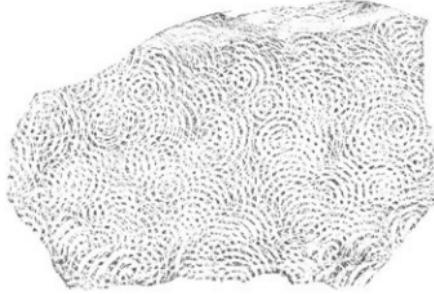
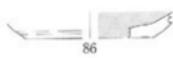
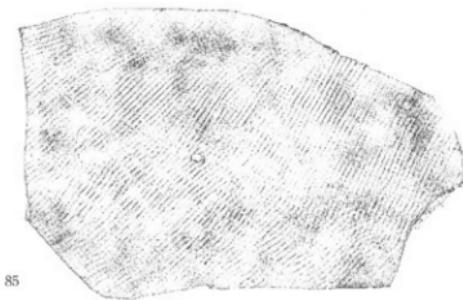
第11図 古代遺物 (S=1/3) 28~30(SI-01), 31·32(SI-02), 33~35(SI-06), 36~43(SI-08), 44~50(SB-21),
51~54(SB-03), 55~58(SA-01)



第12図 古代遺物(S=1/3) 59(SK-49), 62(SP-03), 63(SP-04), 64・65(SP-05), 66(SP-06), 67(SP-07),
68(SP-09), 69・70(SP-10), 71(SP-11), 72(SP-16), 73(SP-17), 74(SP-22),
75(SP-24), 76(SP-26), 77(SP-28), 79(SX-03)

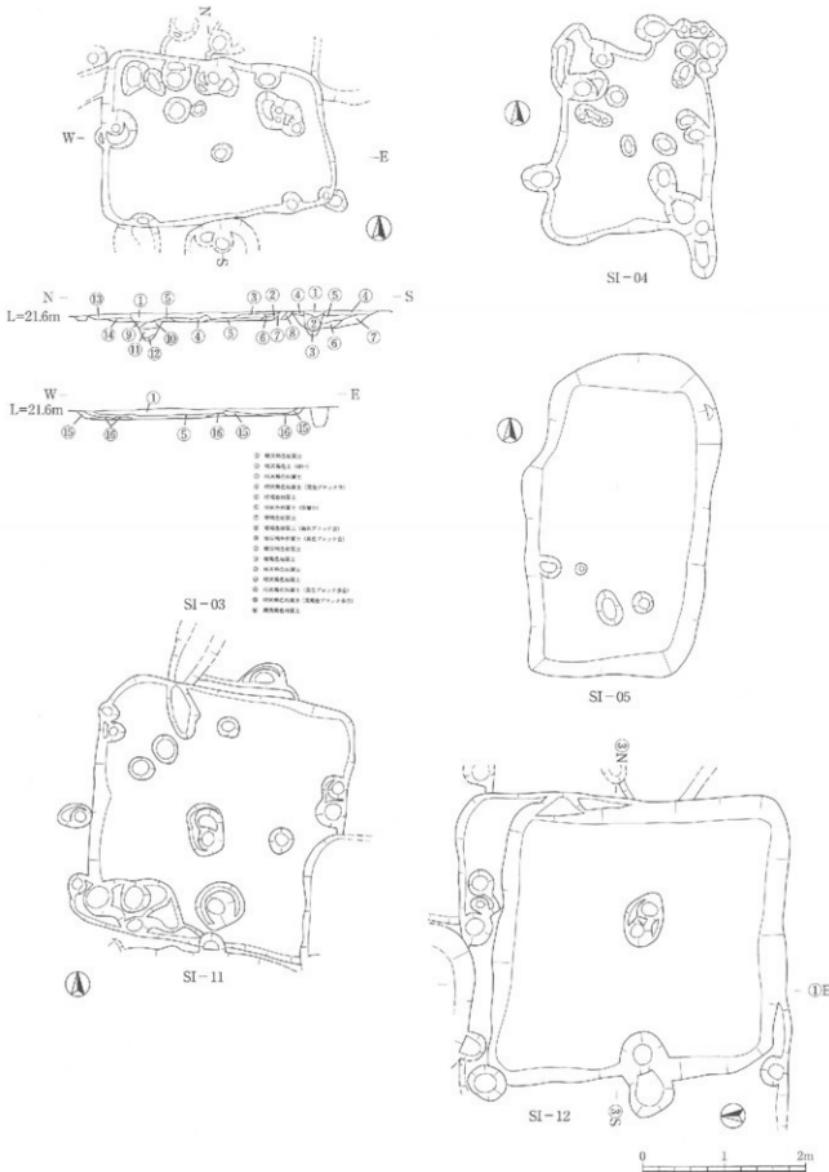


84

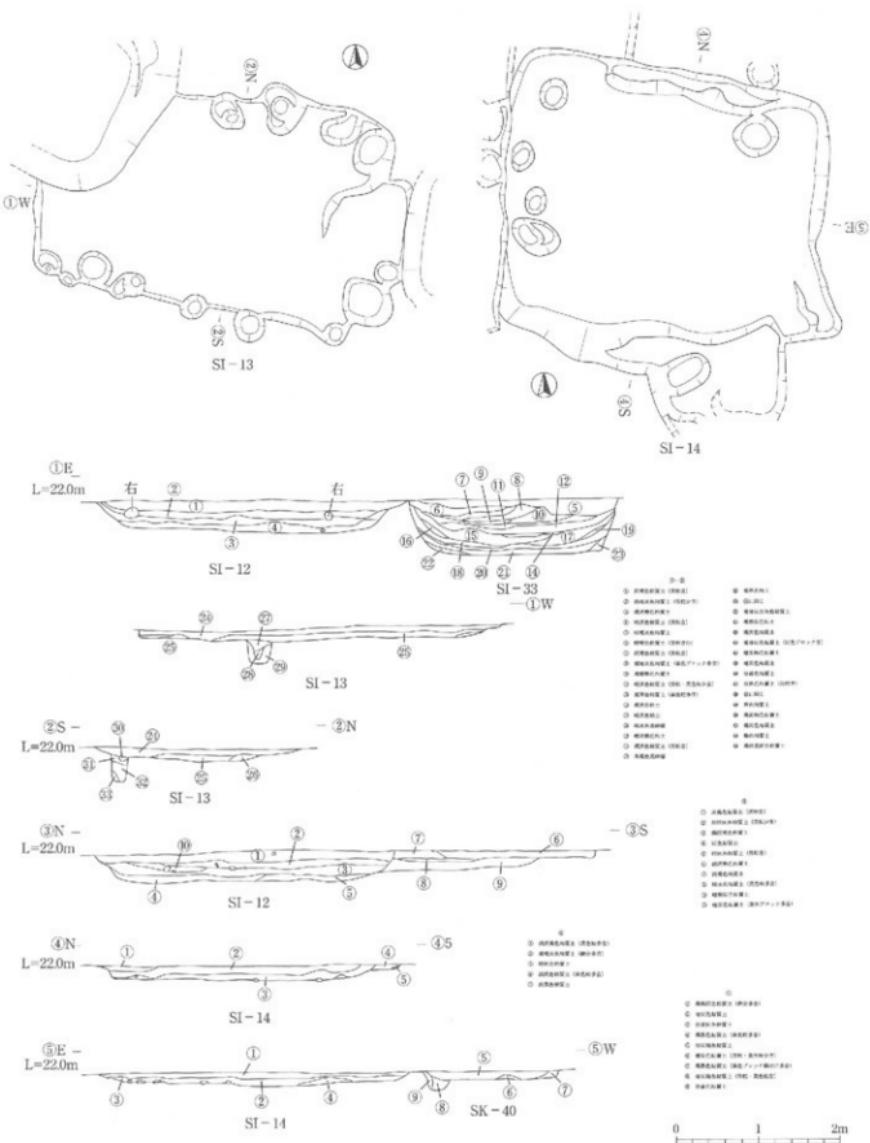


1 5 10cm

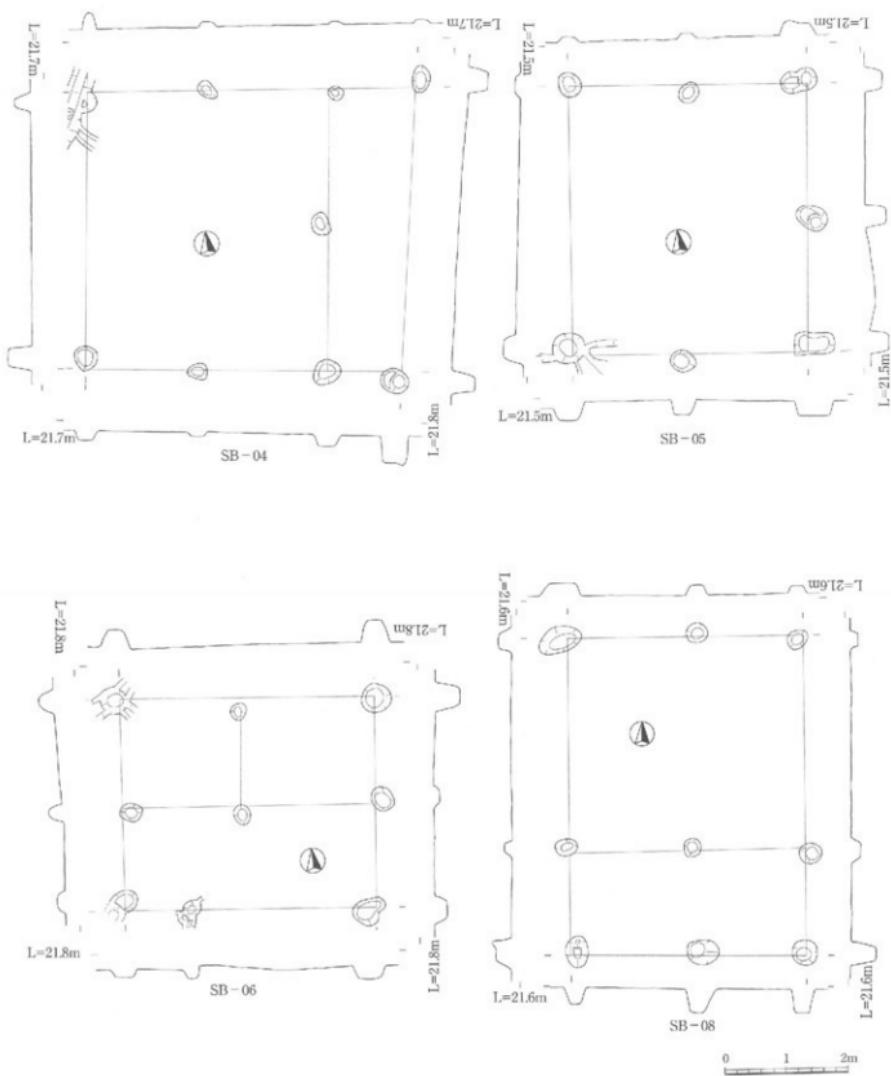
第13圖 古代遺物(S=1/3) 80(SP-04), 81(SP-08), 82~87(包含層)



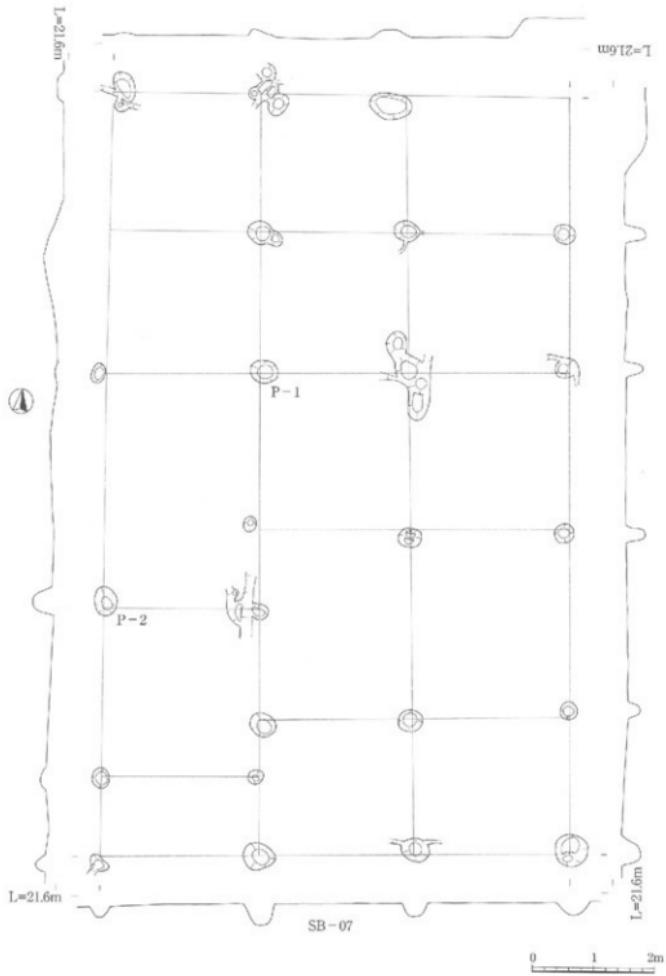
第14図 坚穴状造構 (S=1/60)



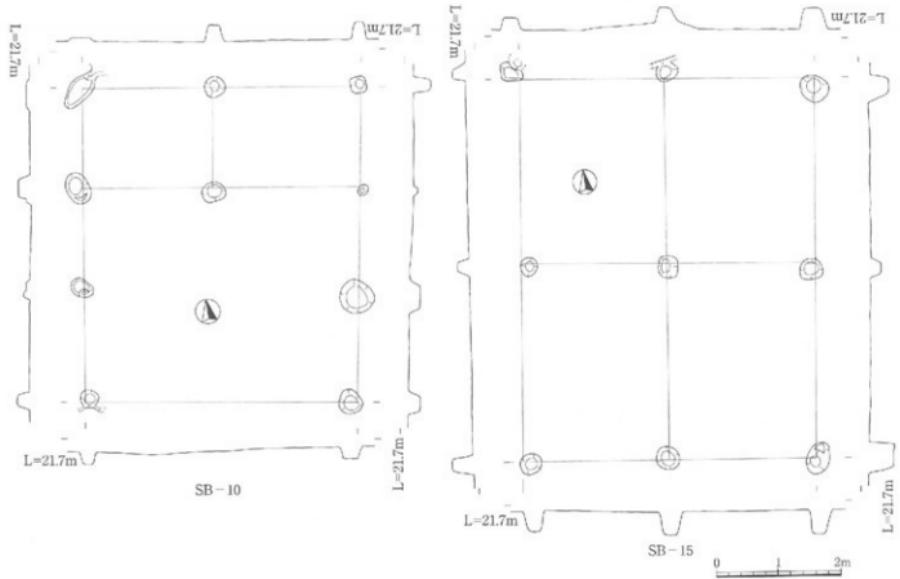
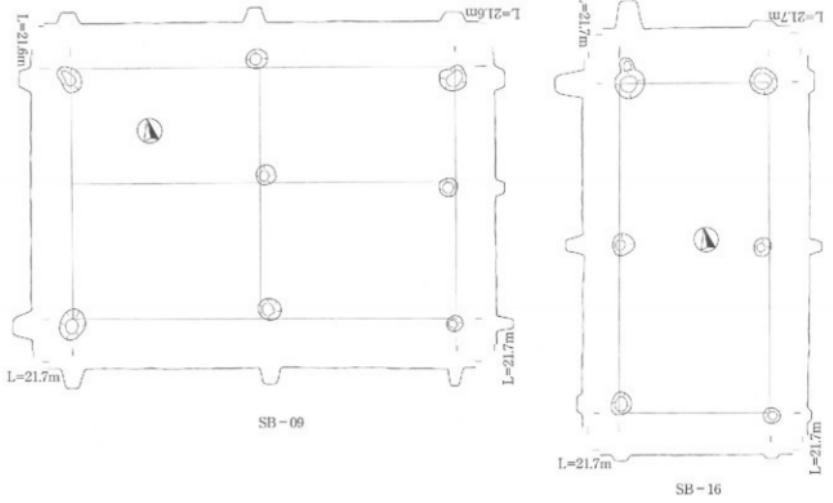
第15図 坂穴状遺構 (S-1/60)



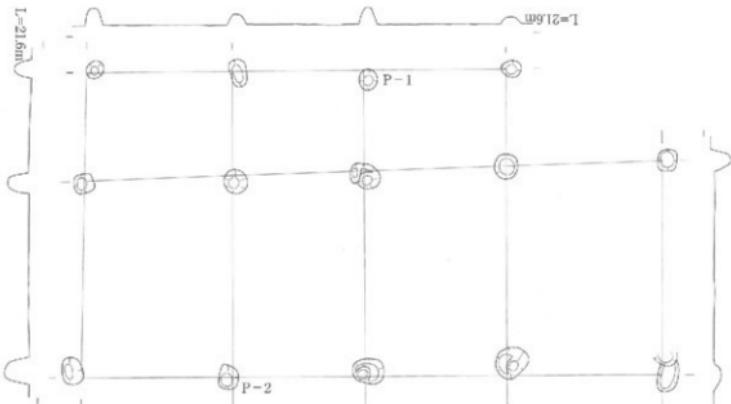
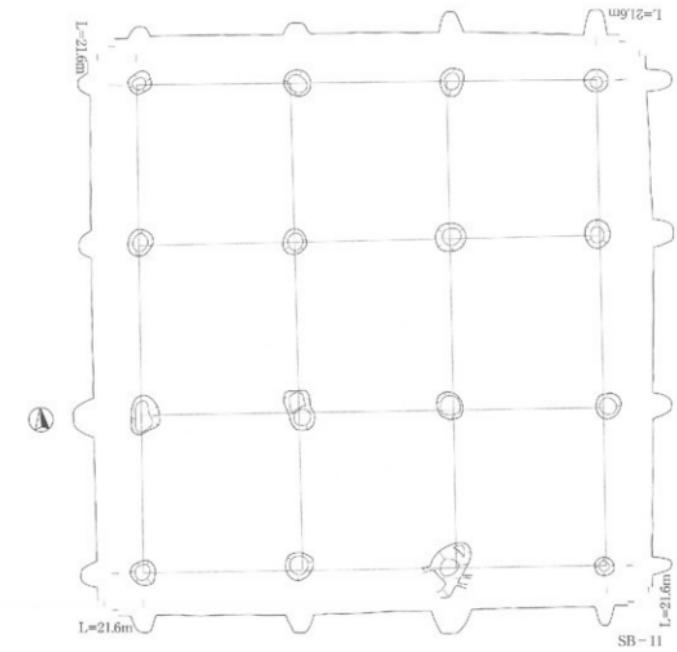
第16図 SB-04~06・08(S=1/80)



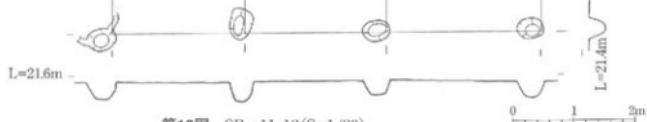
第17図 SB-07 (S=1/80)



第18図 SB-09・10・15・16(S=1/80)

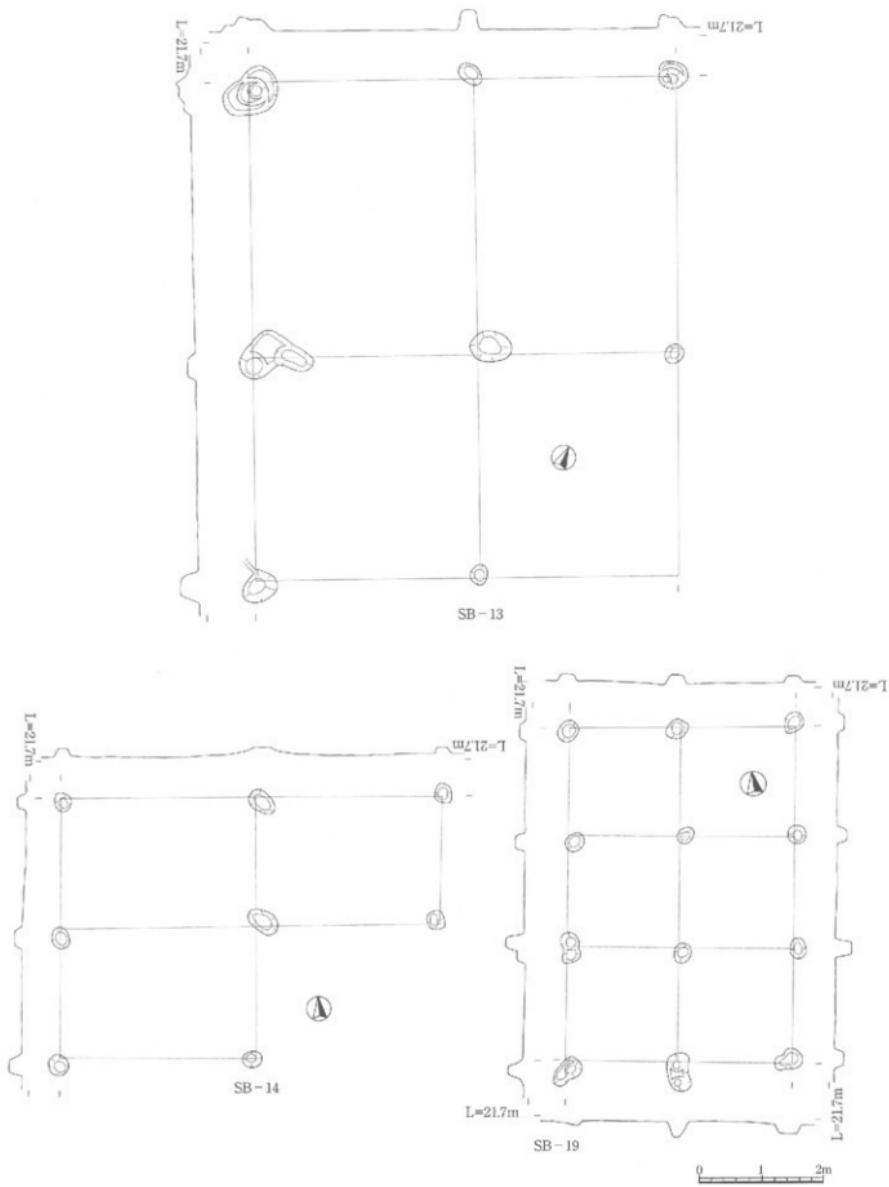


A
SB-12

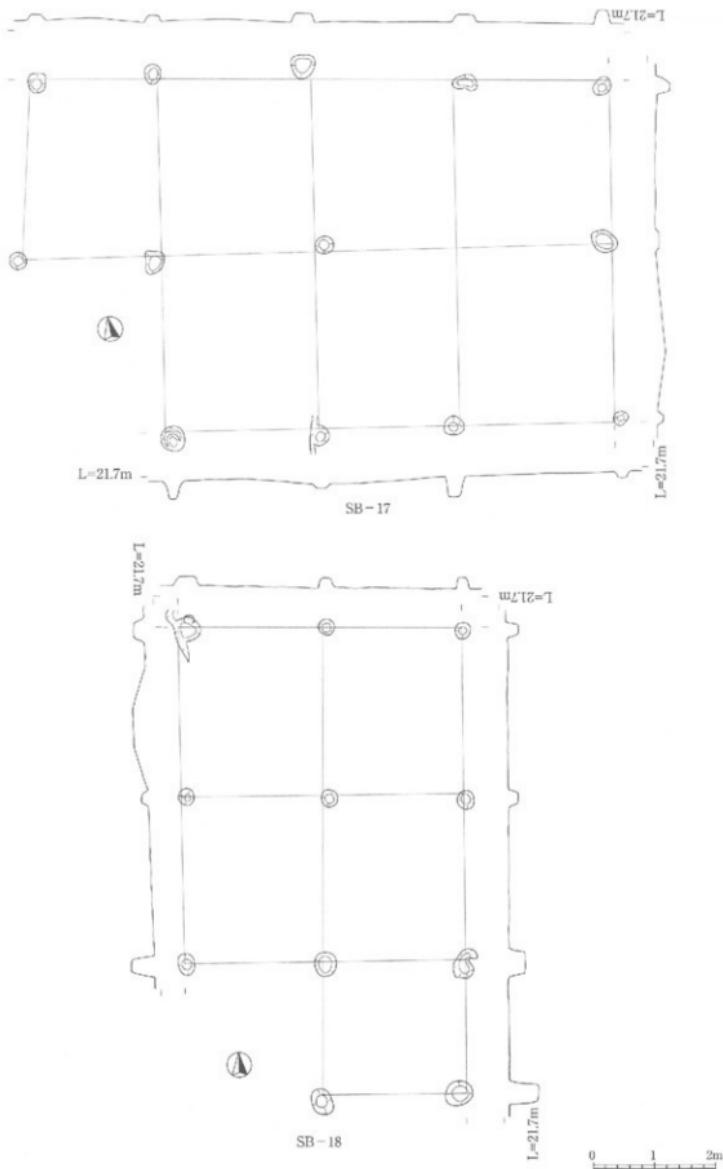


第19図 SB-11・12(S=1/80)

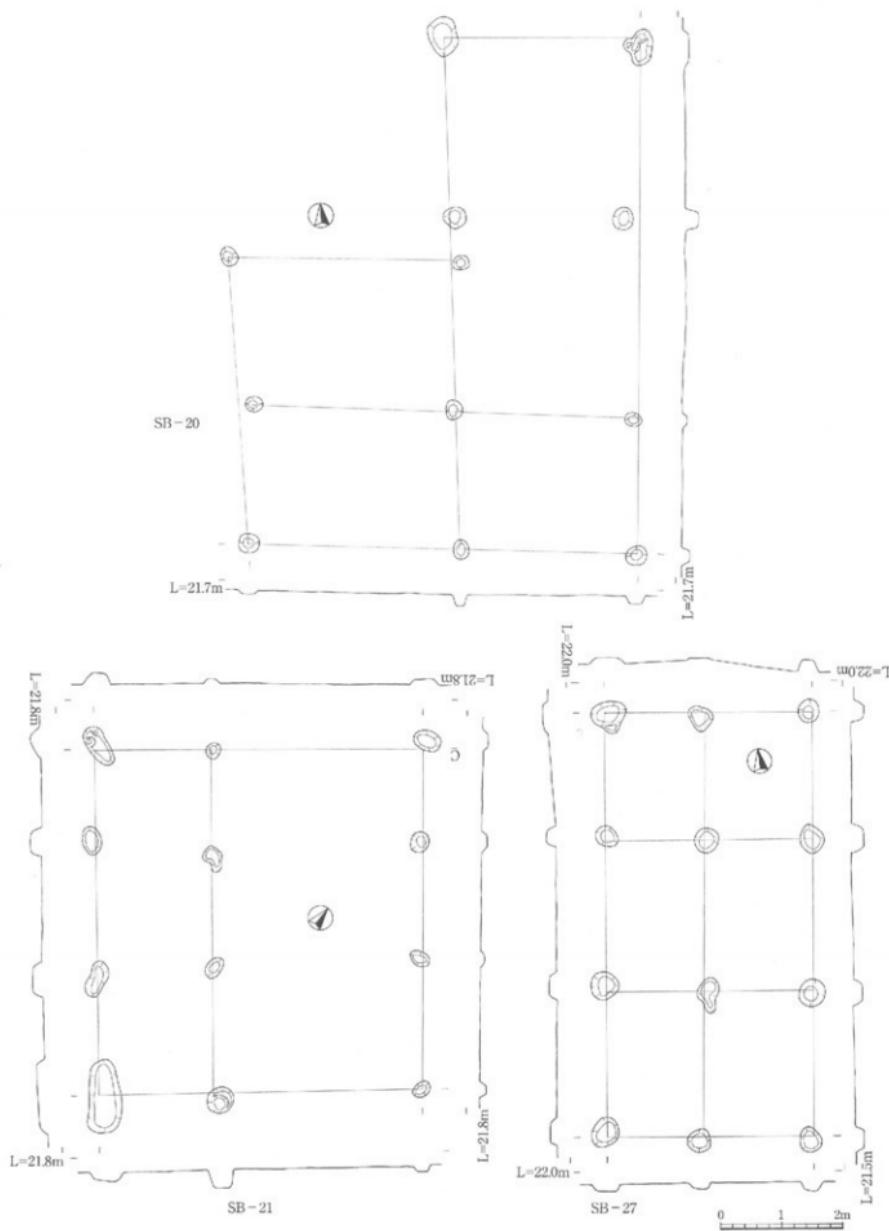
0 1 2m



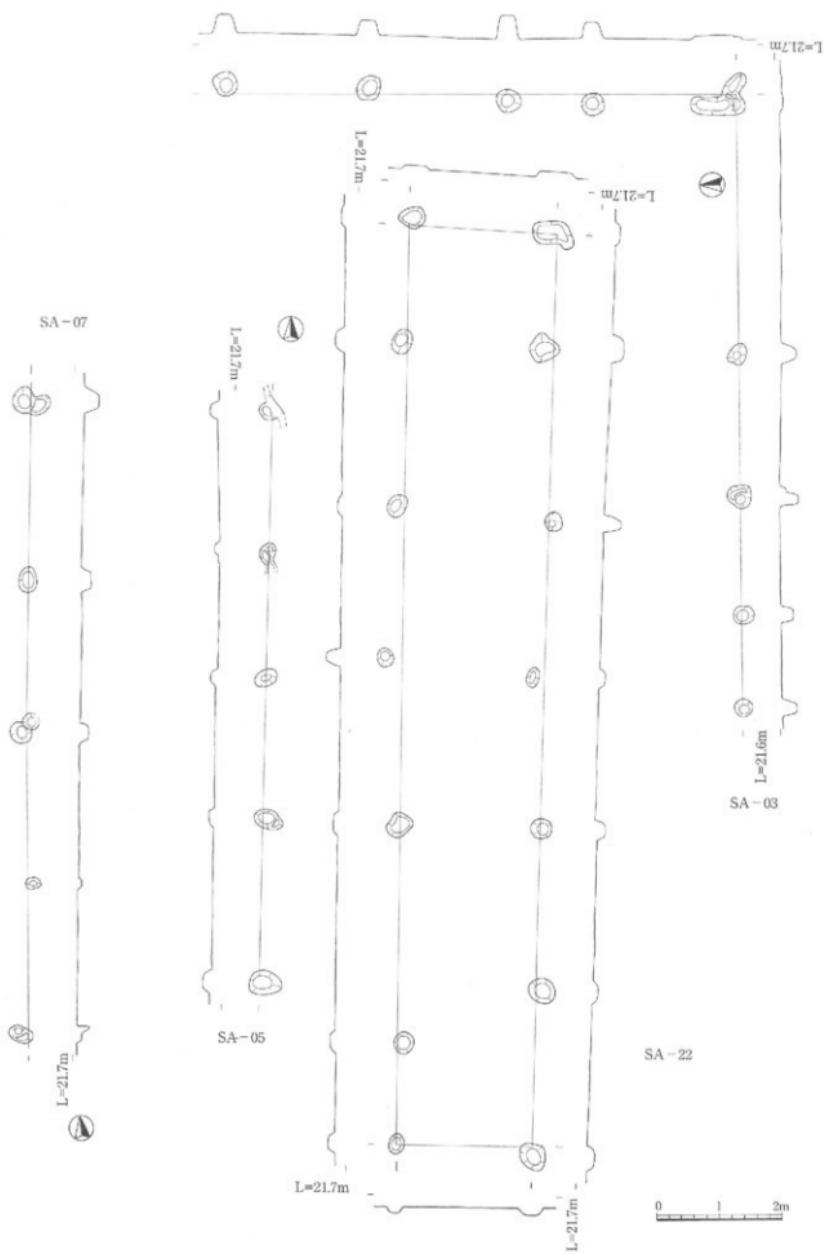
第20図 SB-13・14・19 (S=1/80)



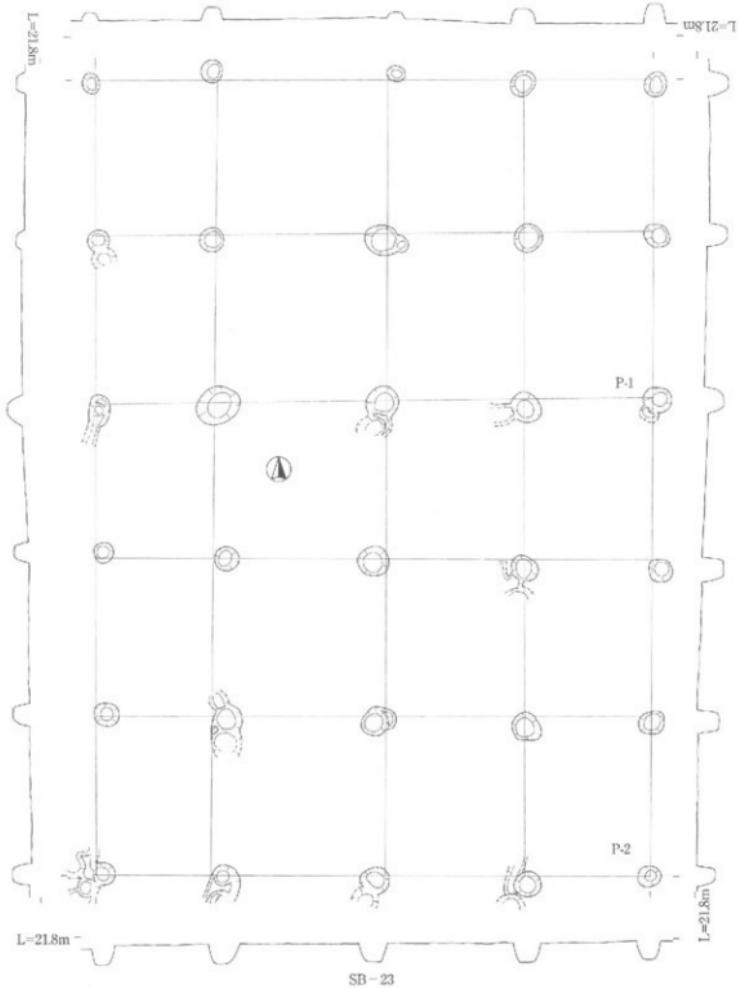
第21図 SB-17・18(S=1/80)



第22図 SB-20・21・27(S=1/80)

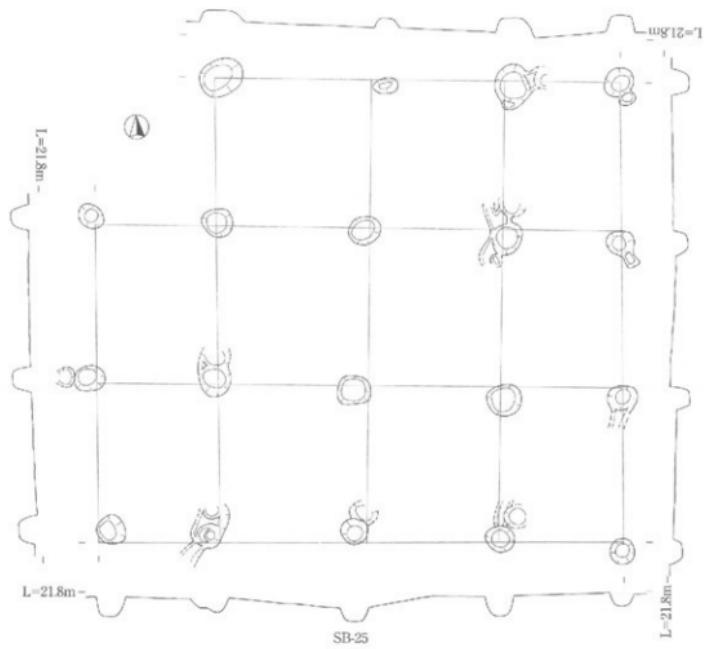
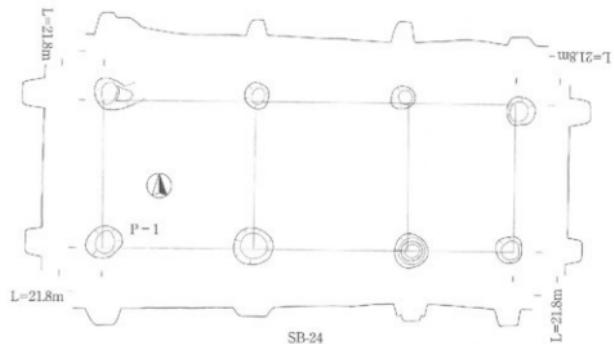


第23図 SB - 22 · SA - 03 · 05 · 07 (S=1/80)



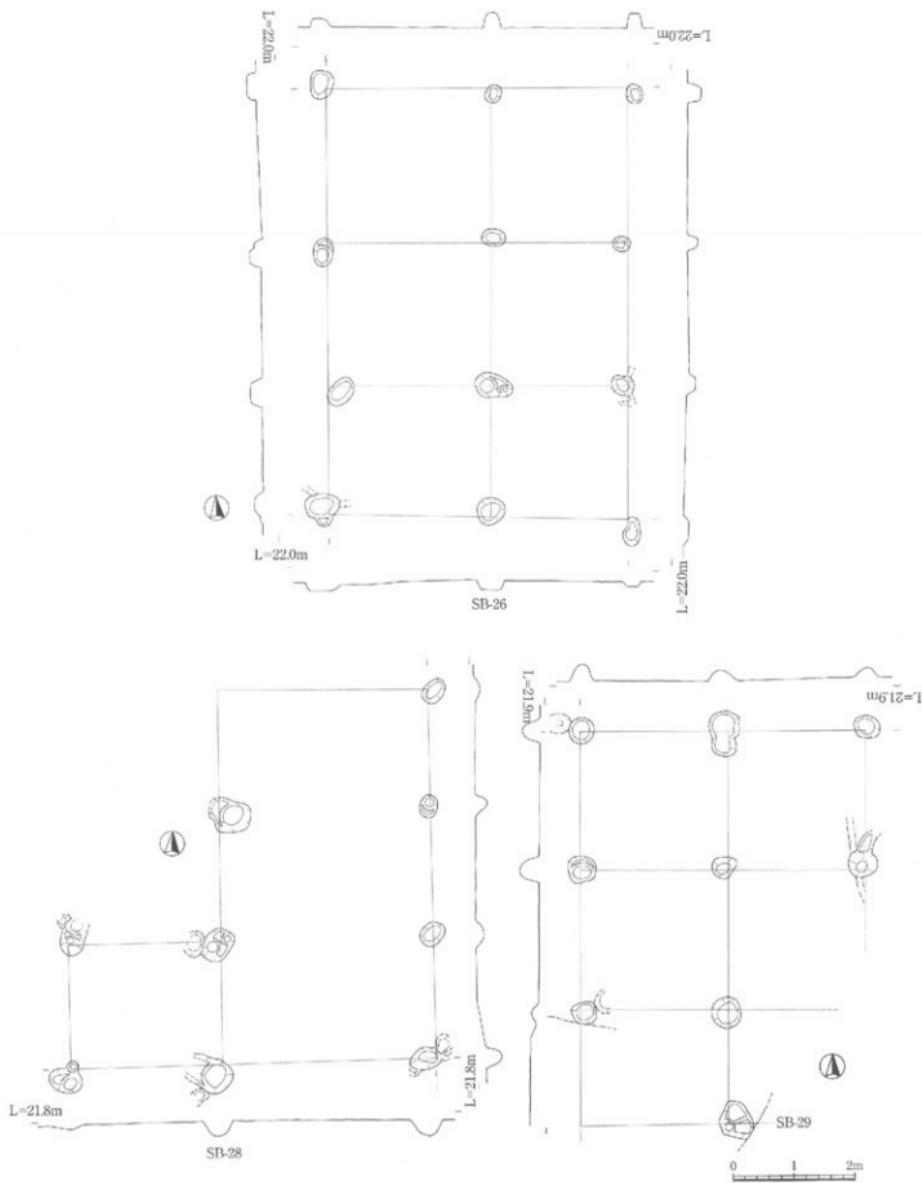
0 1 2m

第24図 SB-23(S=1/80)

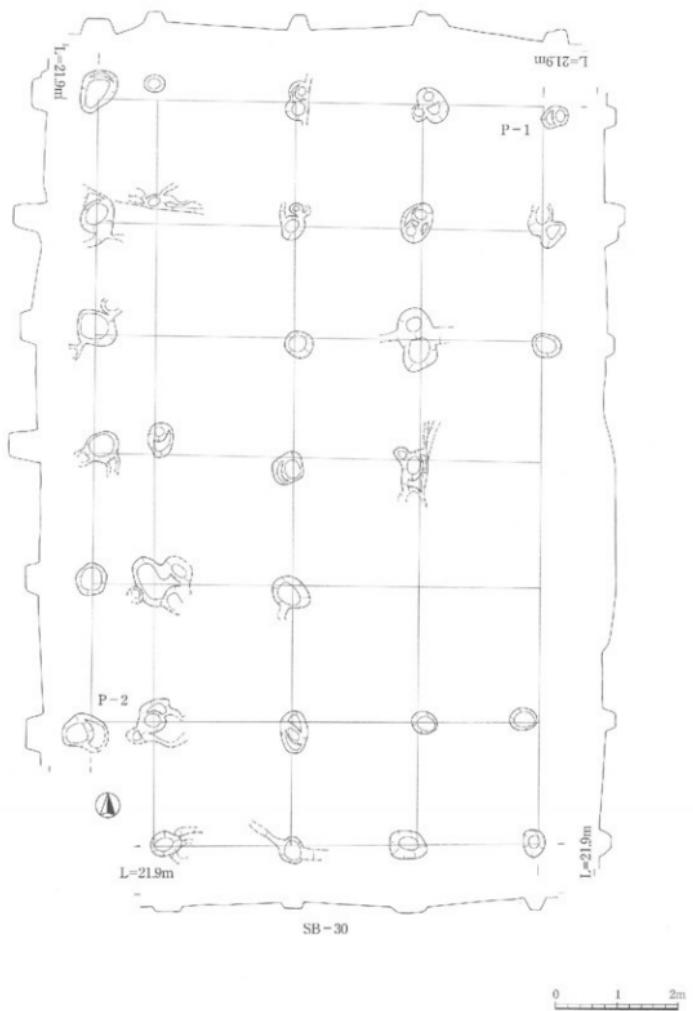


0 1 2m

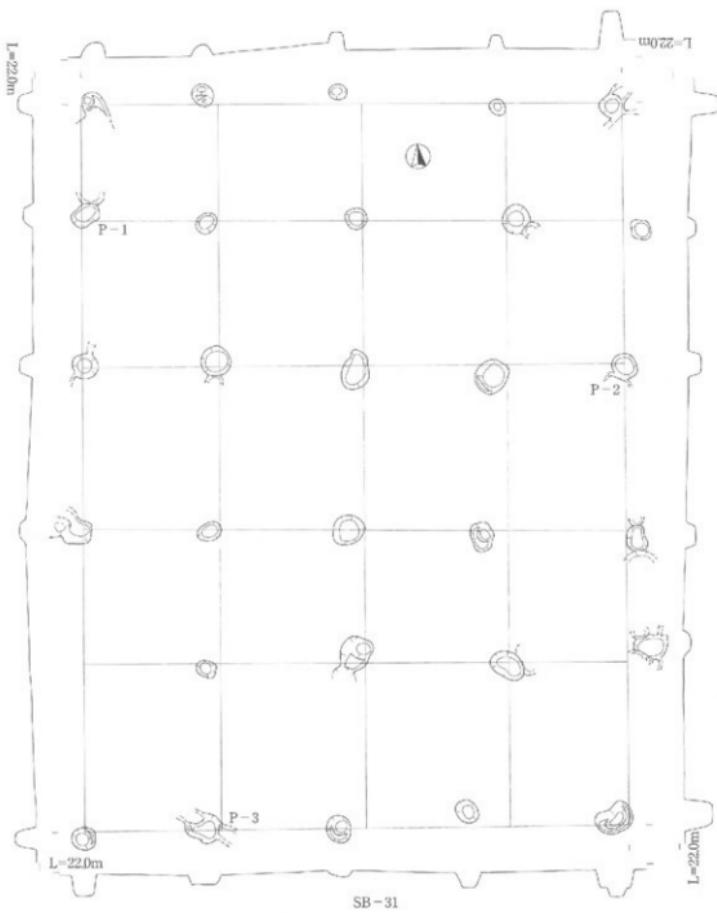
第25図 SB-24・25 ($S=1/80$)



第26図 SB-26・28・29 (S=1/80)

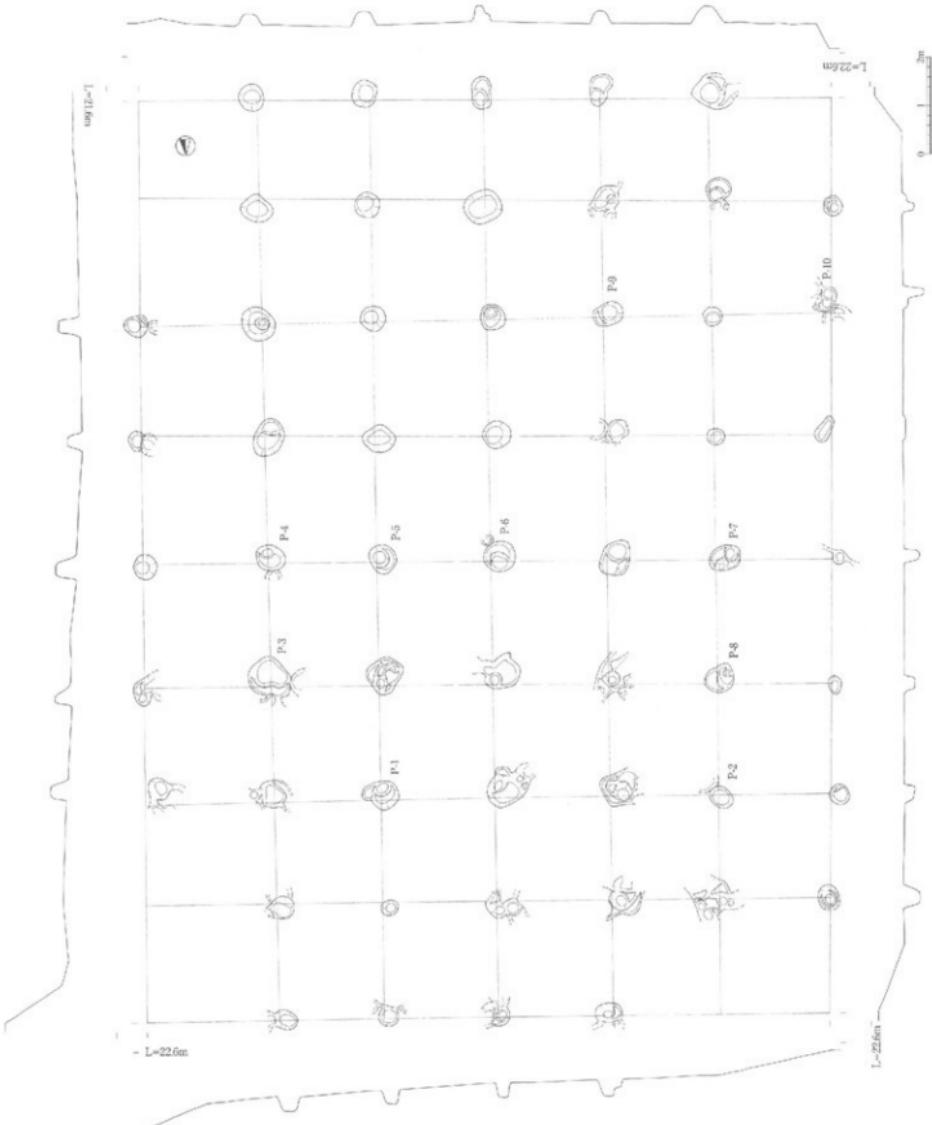


第27図 SB-30(S=1/8)

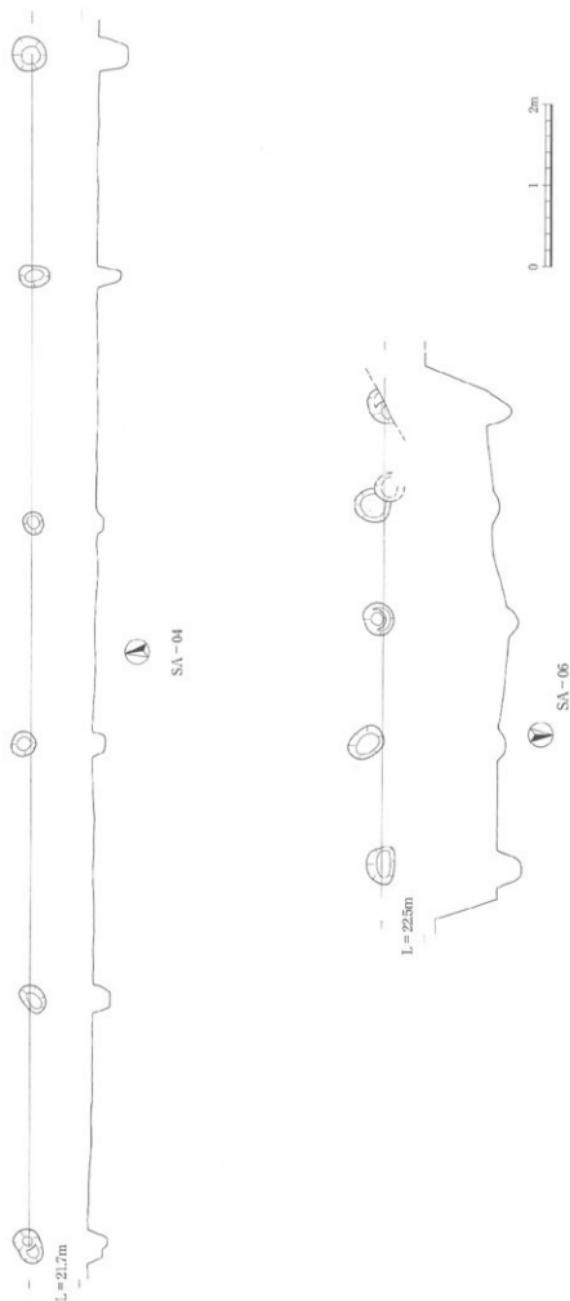


0 1 2m

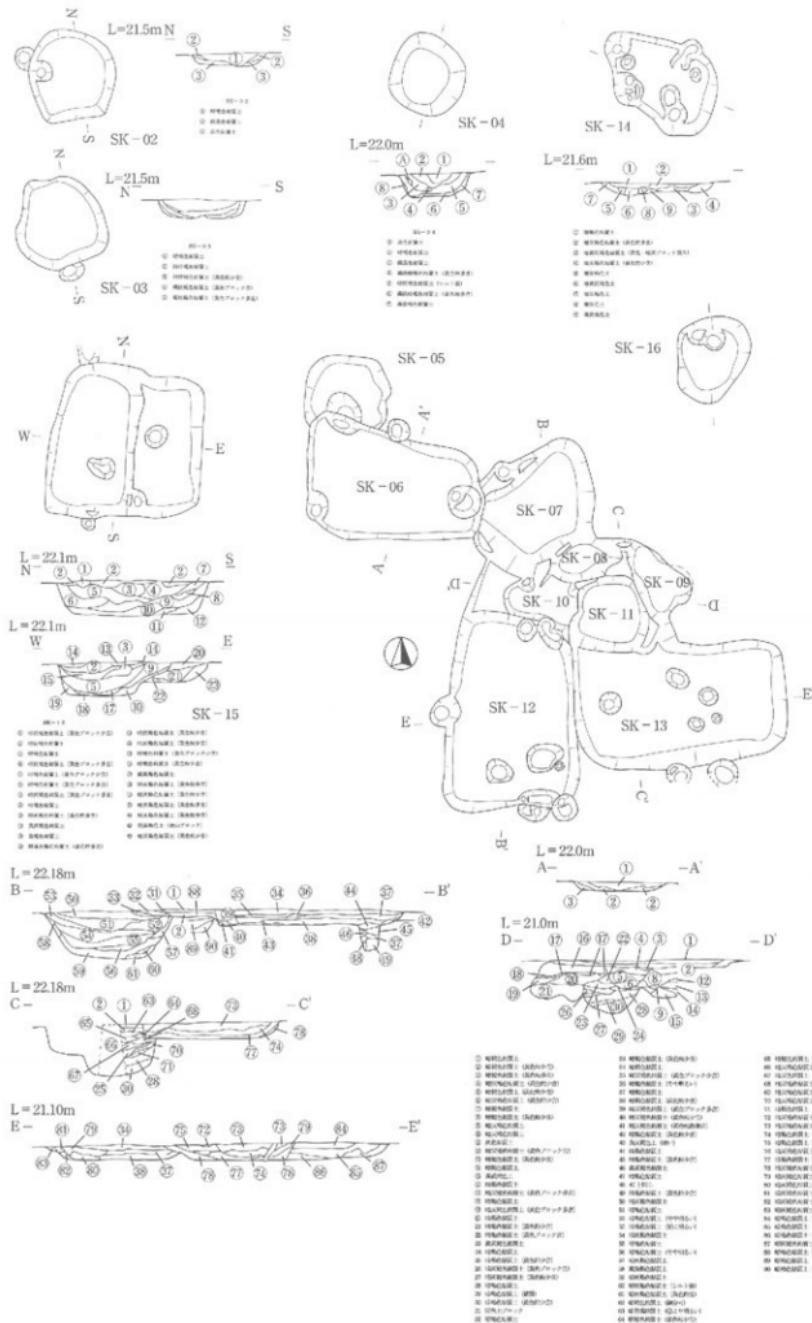
第28图 SB-31(S=1/80)



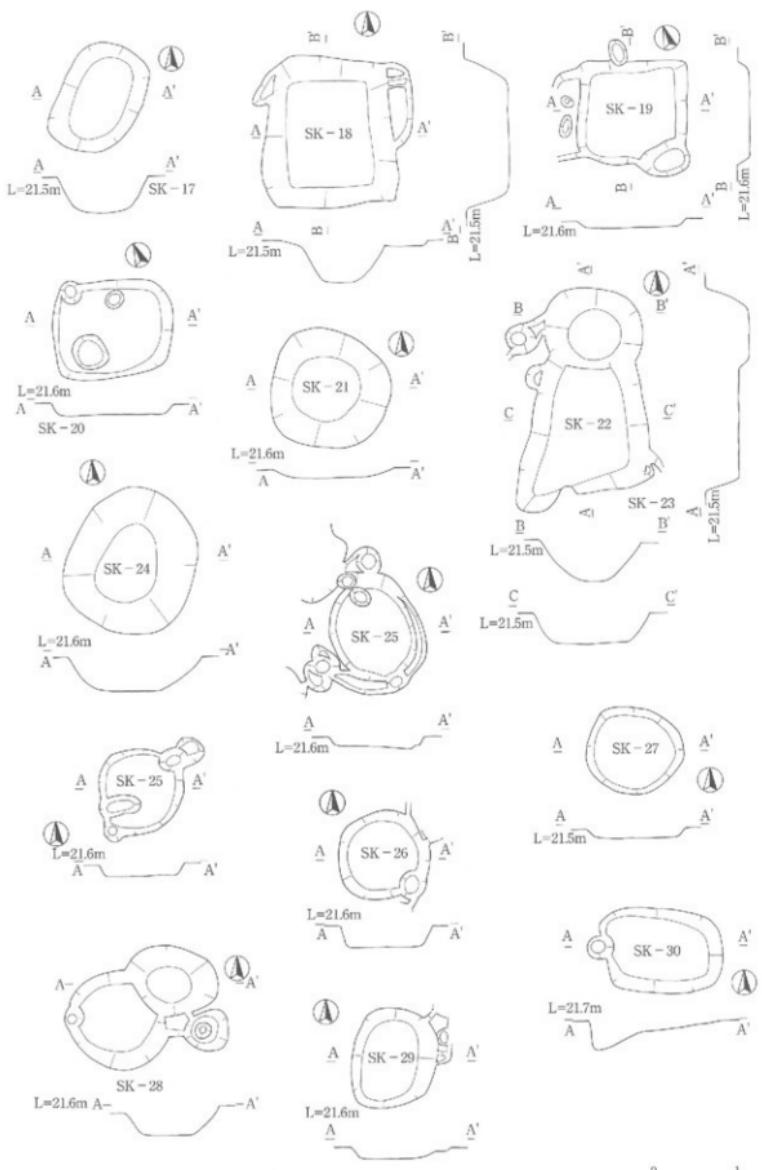
第29図 SB-32(S=1/80)



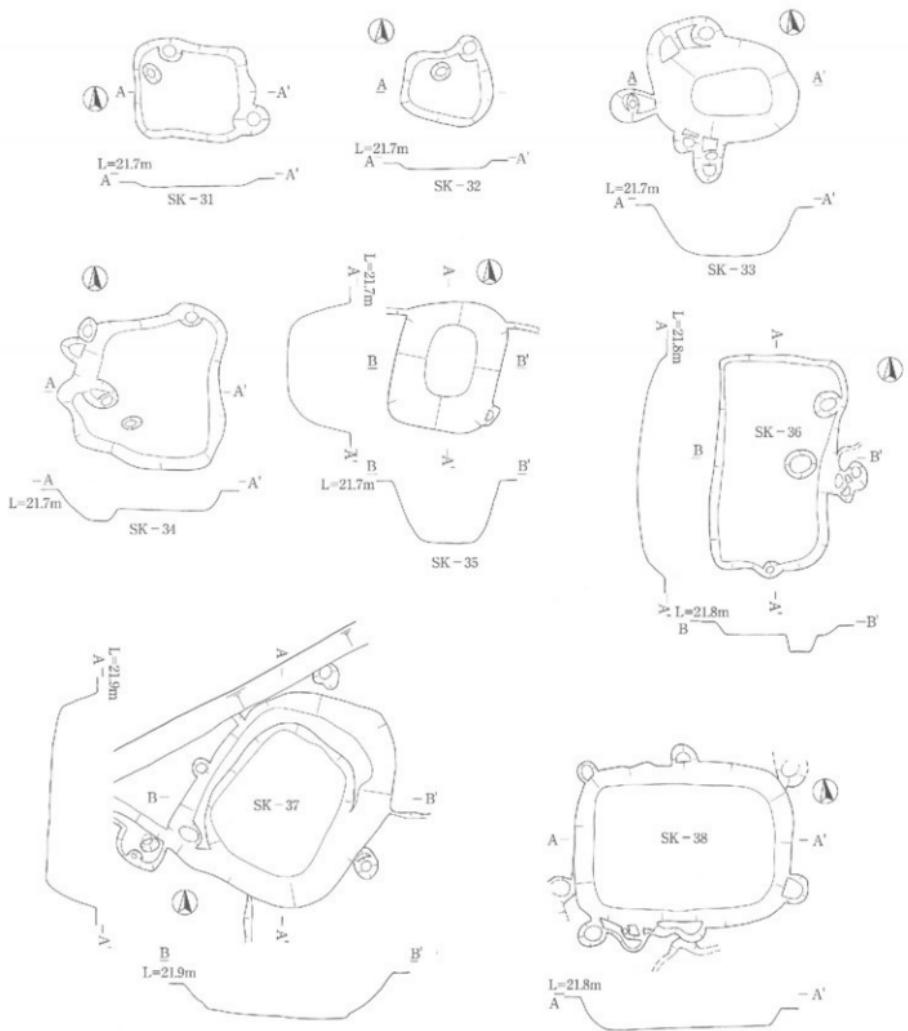
第30圖 SA - 04・06 (S=1/60)



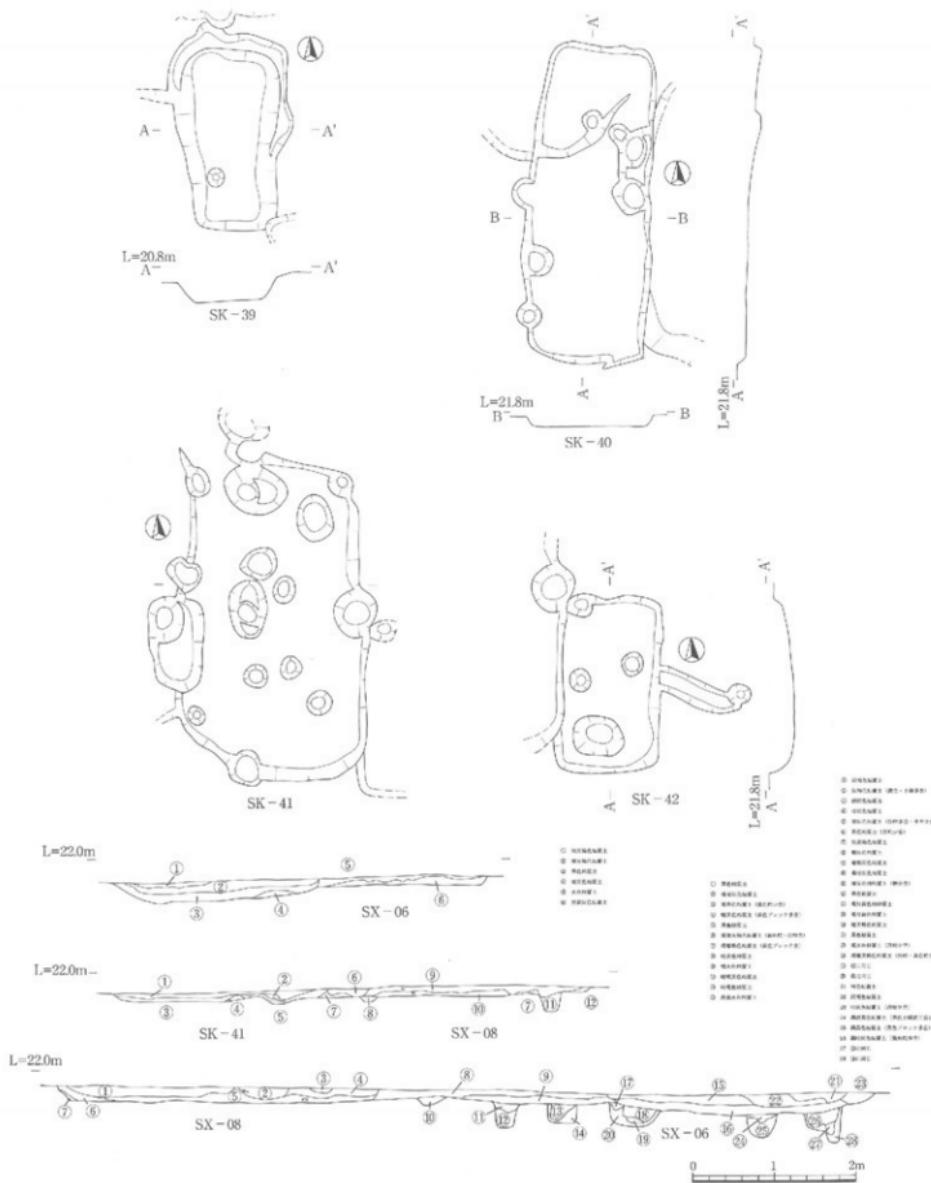
第31図 土壠(S=1/60)



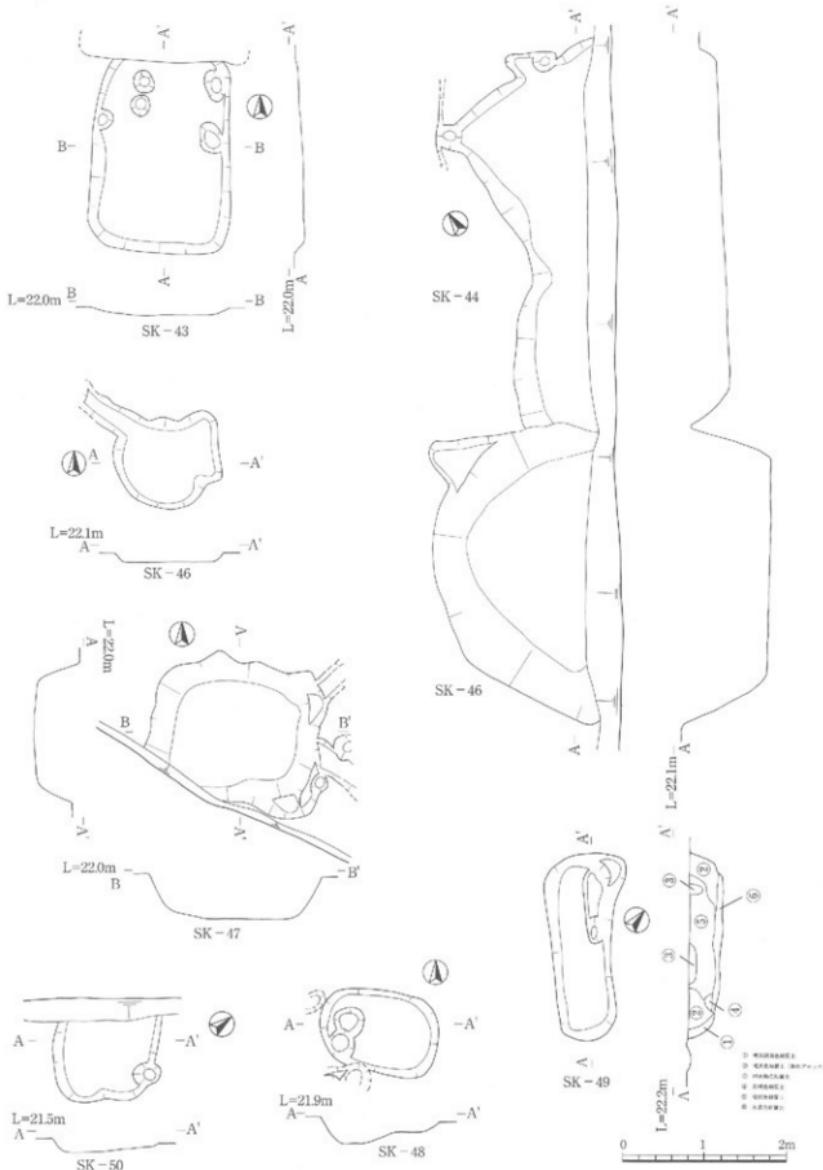
第32図 土括(S=1/60)



第33図 土壠 (S=1/60)

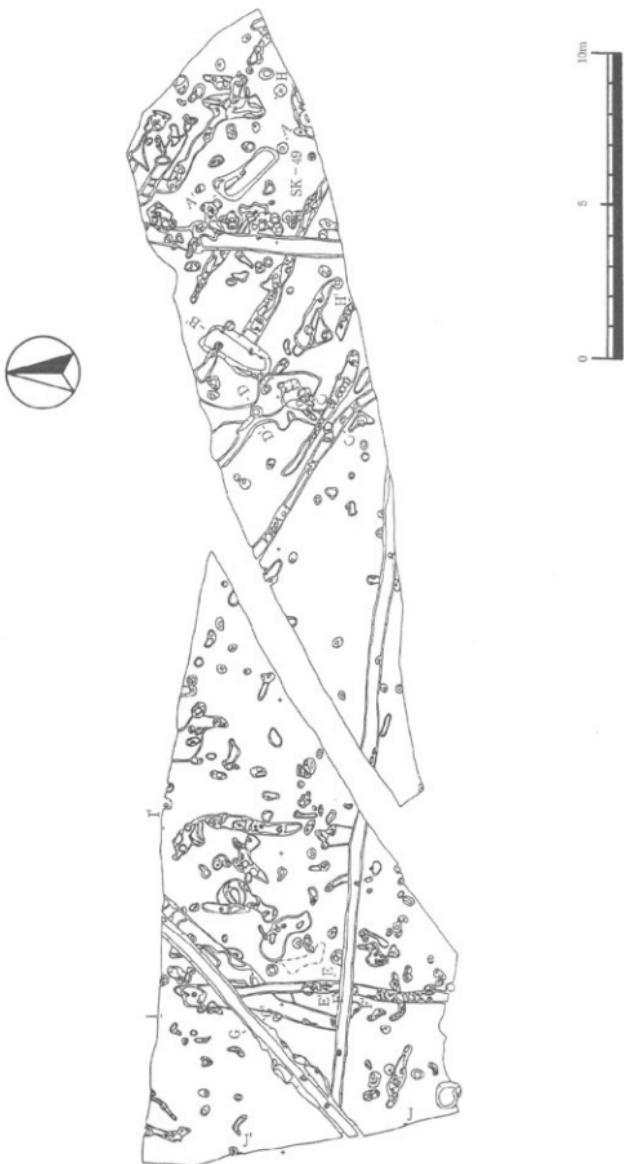


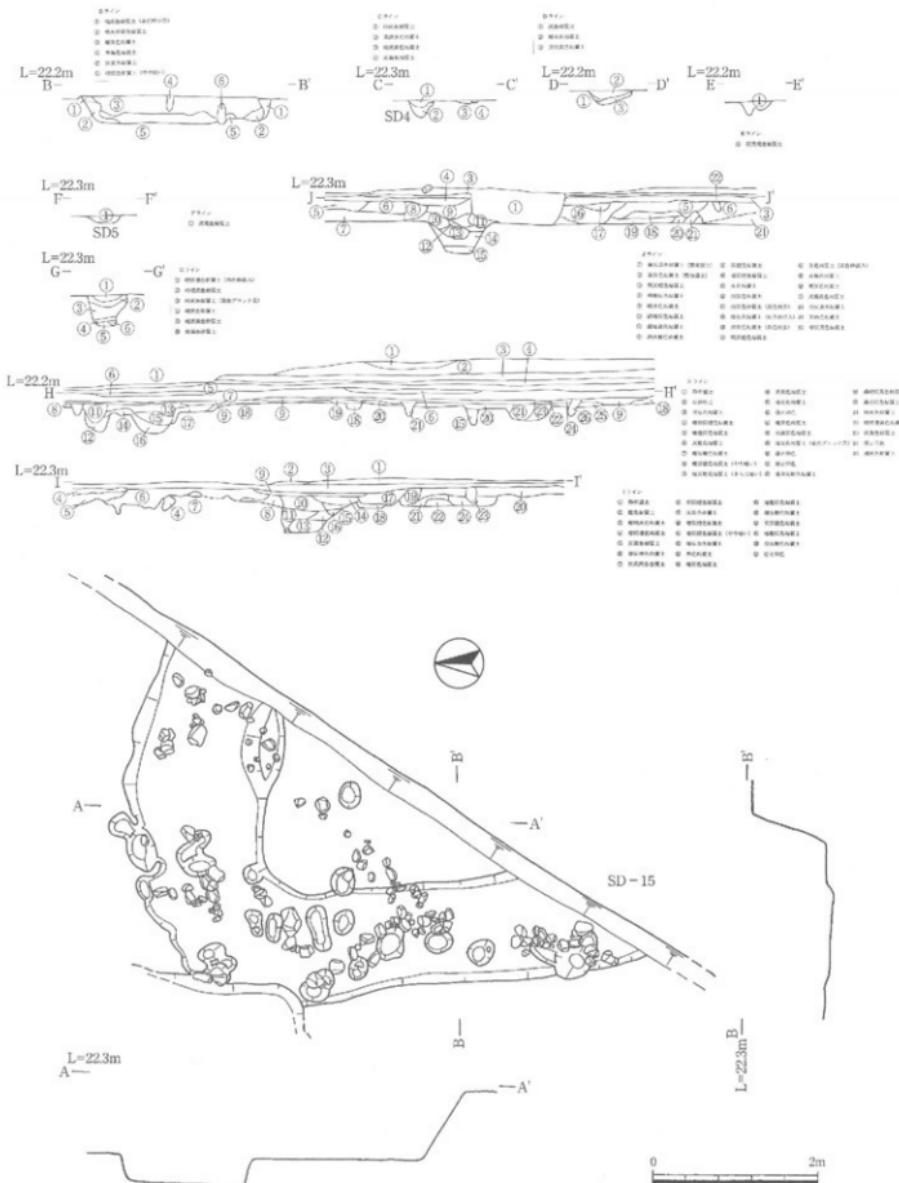
第34図 土抜(S=1/60)



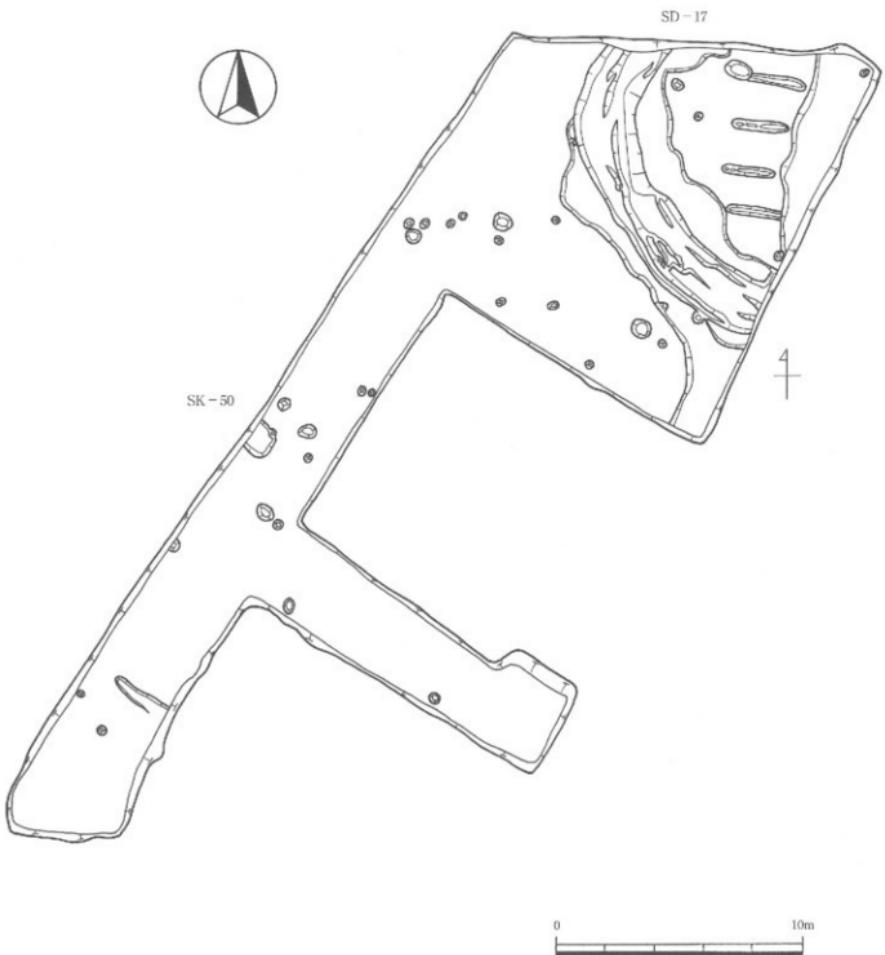
第35図 上層 (S=1/60)

圖36 6區造橋全體圖 ($S=1/160$)

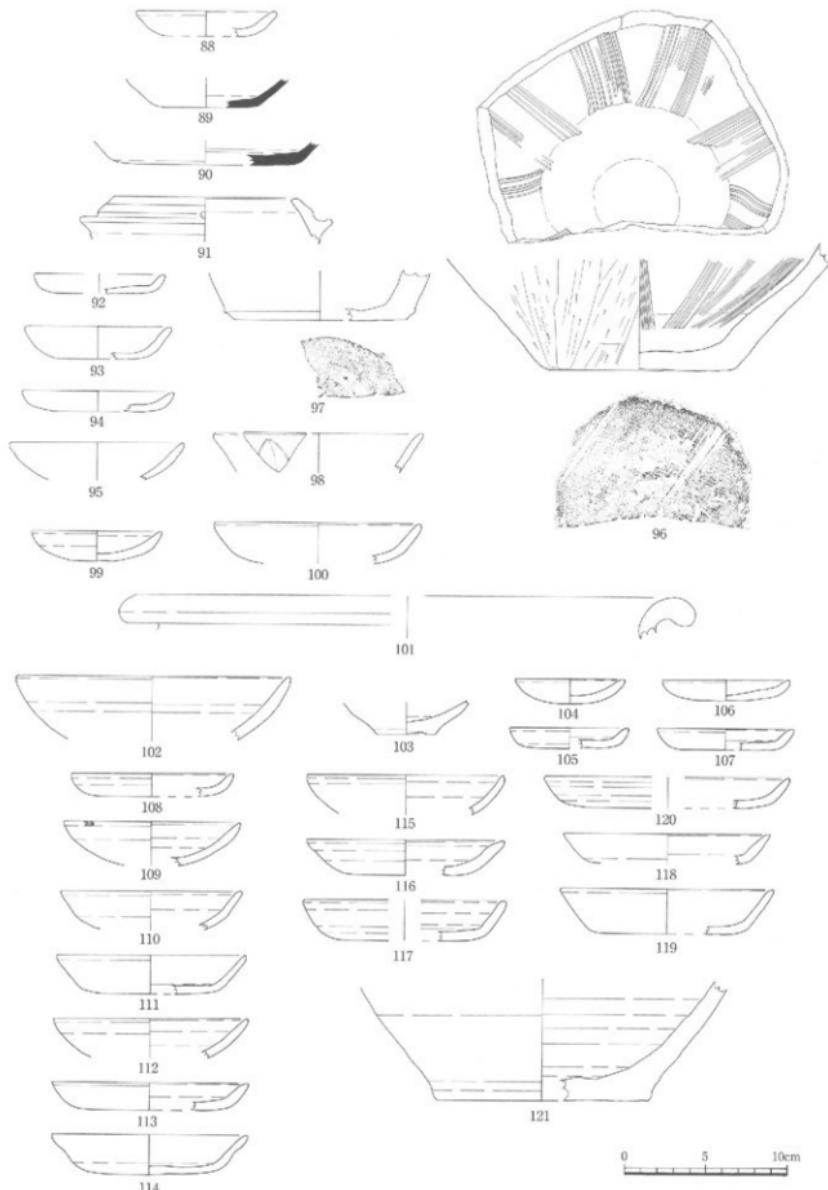




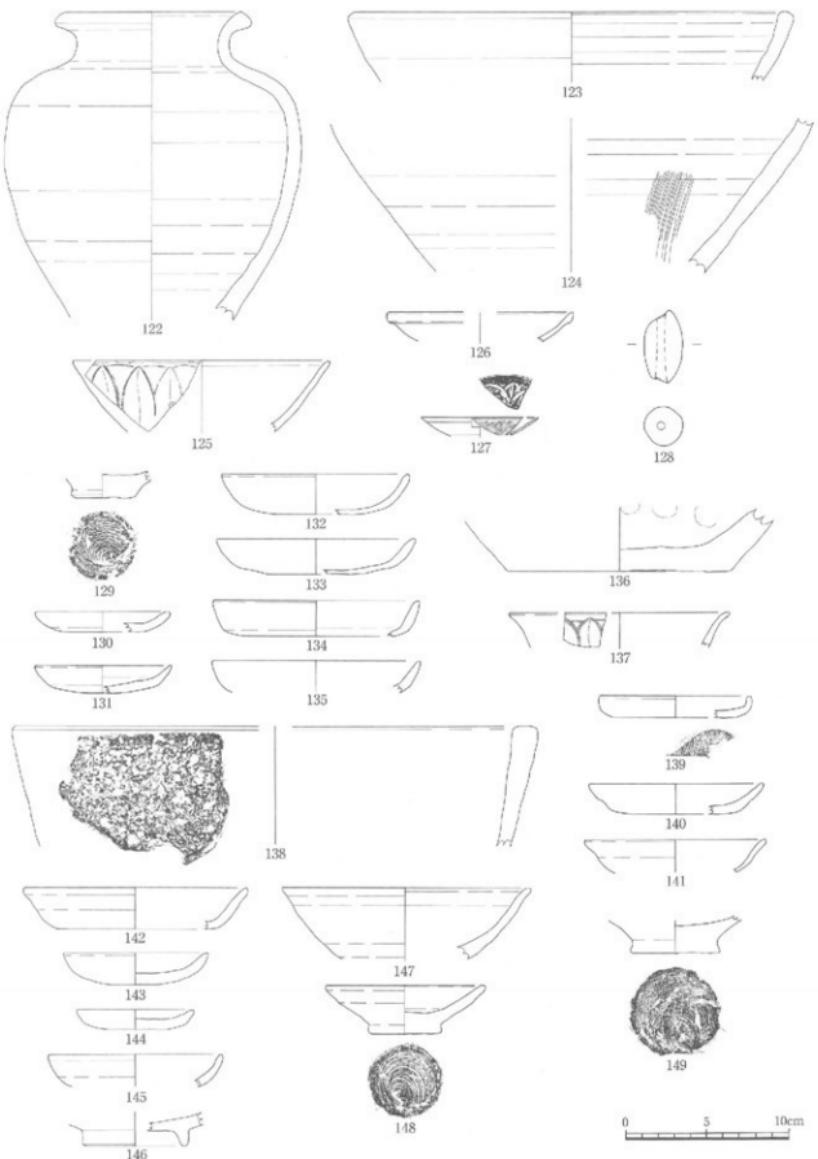
第37図 7区土層図 SD-15 (S=1/60)



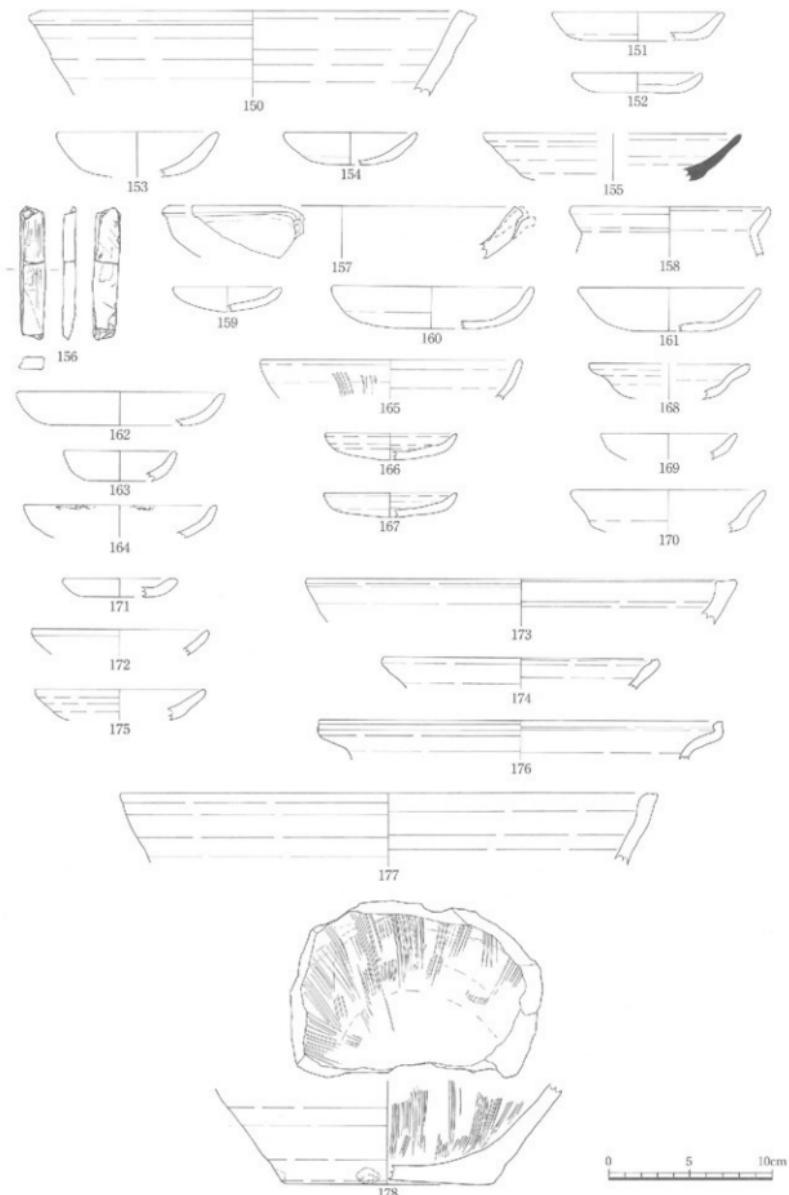
第38図 7区造構全体図 (S=1/200)



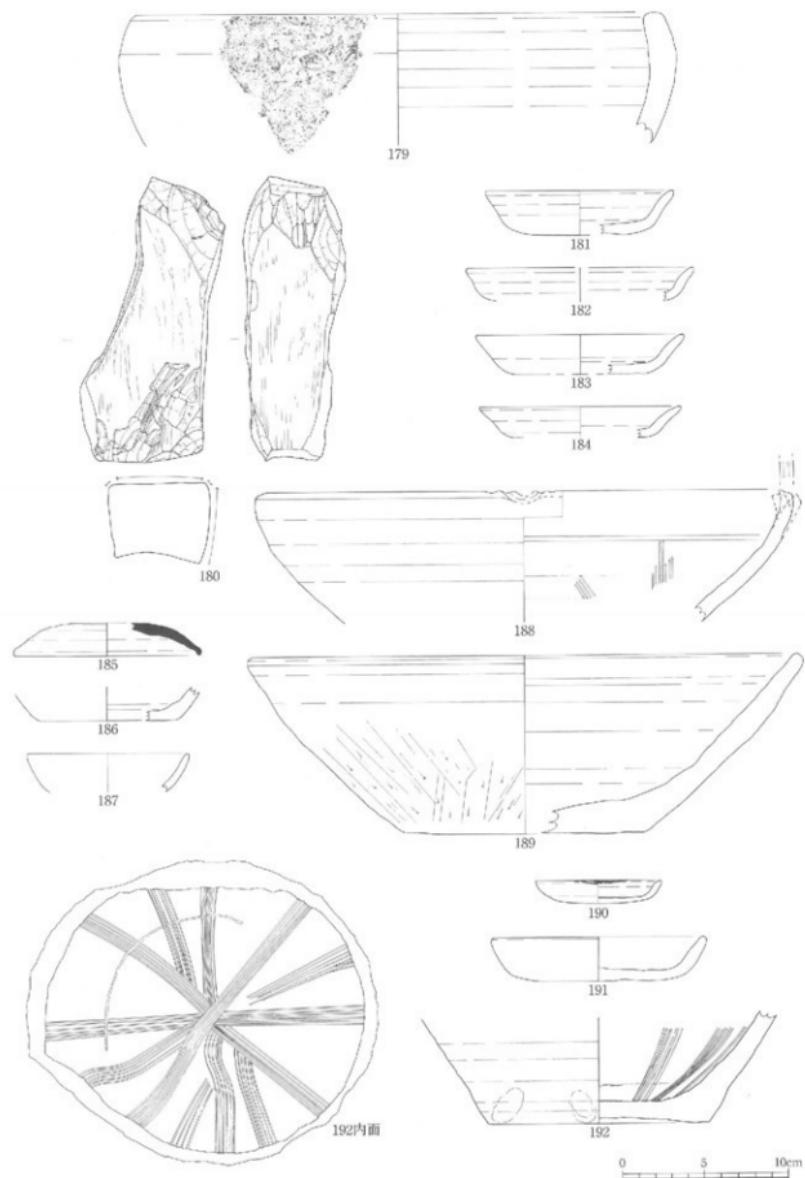
第39図 中世遺物(S=1/3) 88(SI-04), 89~88(SI-05), 99~101(SI-11), 102~121(SI-12)



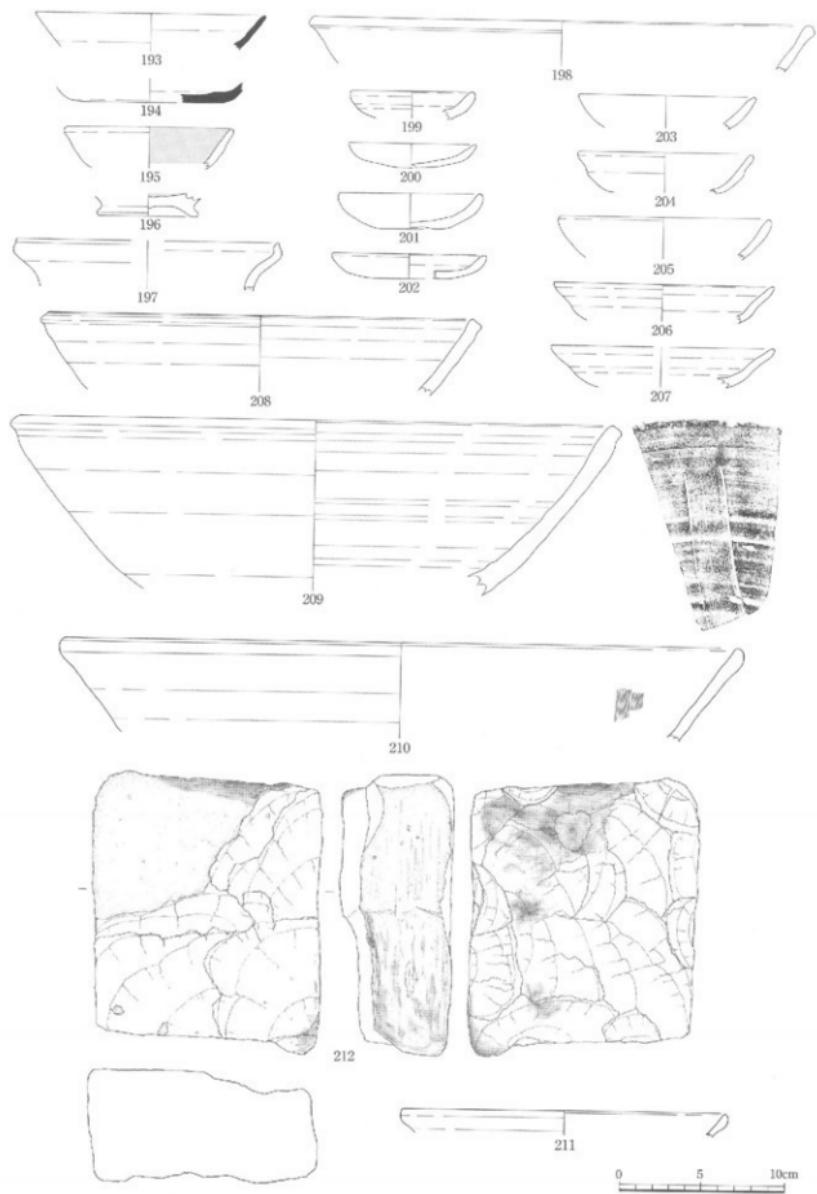
第40図 中世遺物 (S=1/3) 122~128(SI-12), 129~138(SI-13), 139~141(SI-14), 142·143(SB-09),
144~146(SB-24)



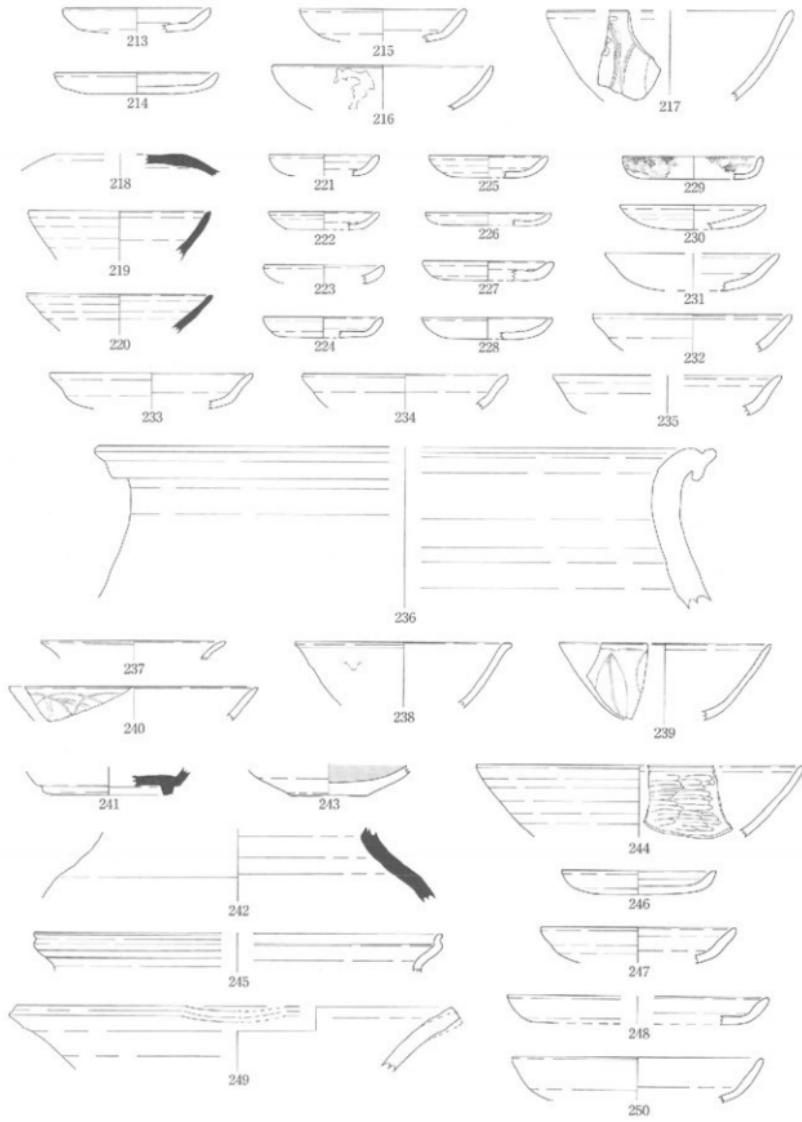
第41図 中世遺物 (S=1/3)
 150(SB-32), 171(SK-16), 172~174(SK-18), 175·176(SK-21),
 177·178(SK-23)



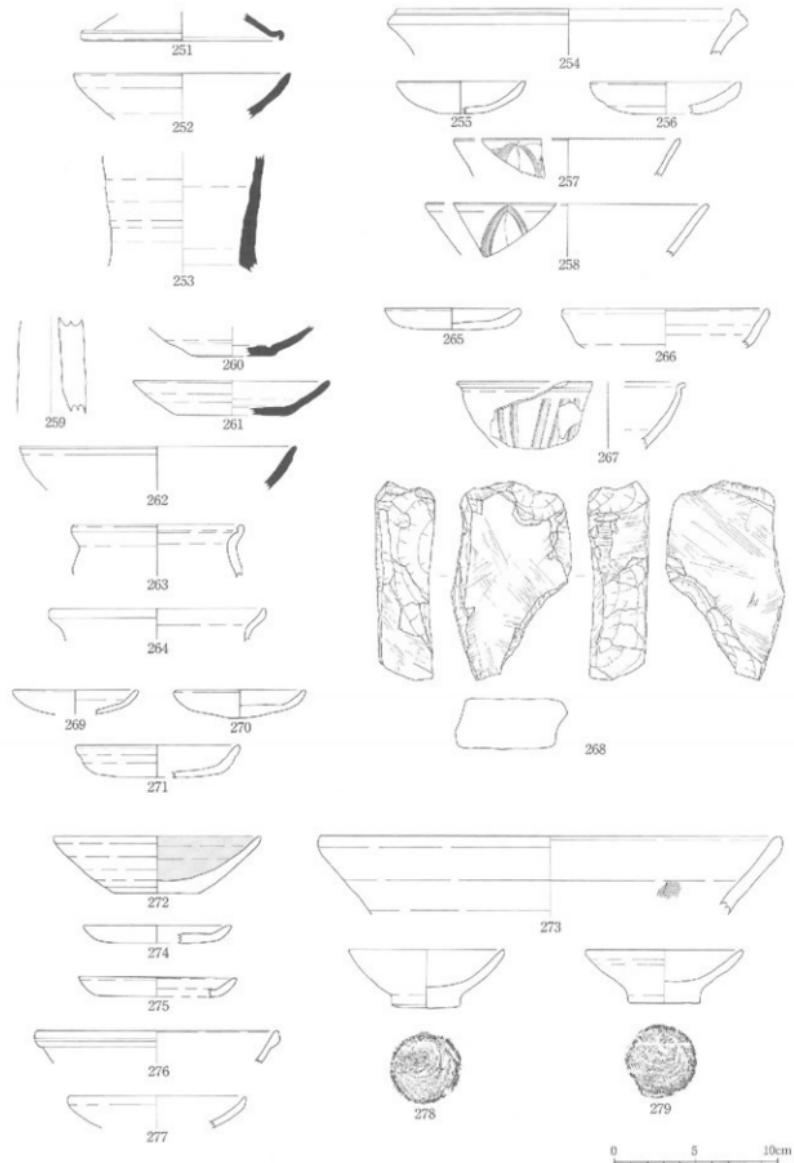
第42図 中世遺物 (S=1/3) 179(SK-23), 180(SK-24), 181・182(SK-31), 193(SK-34), 185~189(SK-36),
190~192(SK-37)



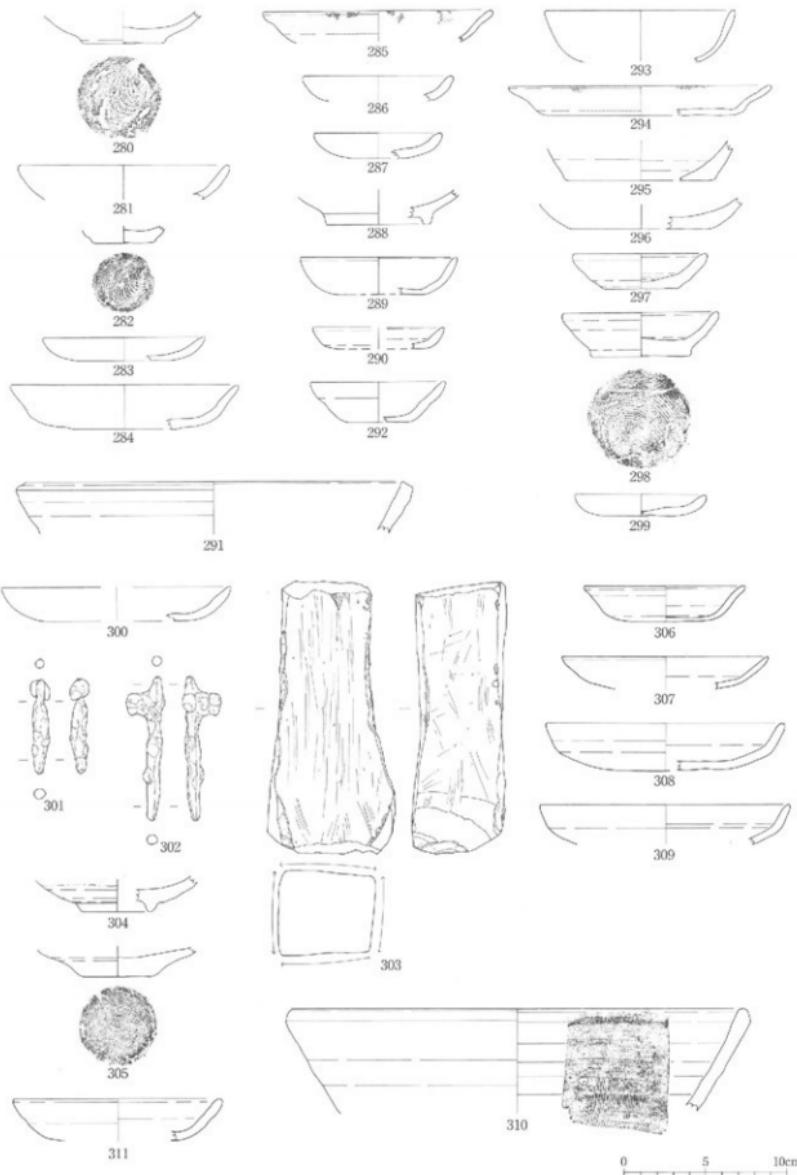
第43図 中世遺物 ($S = 1/3$) 193~212(SK - 38)



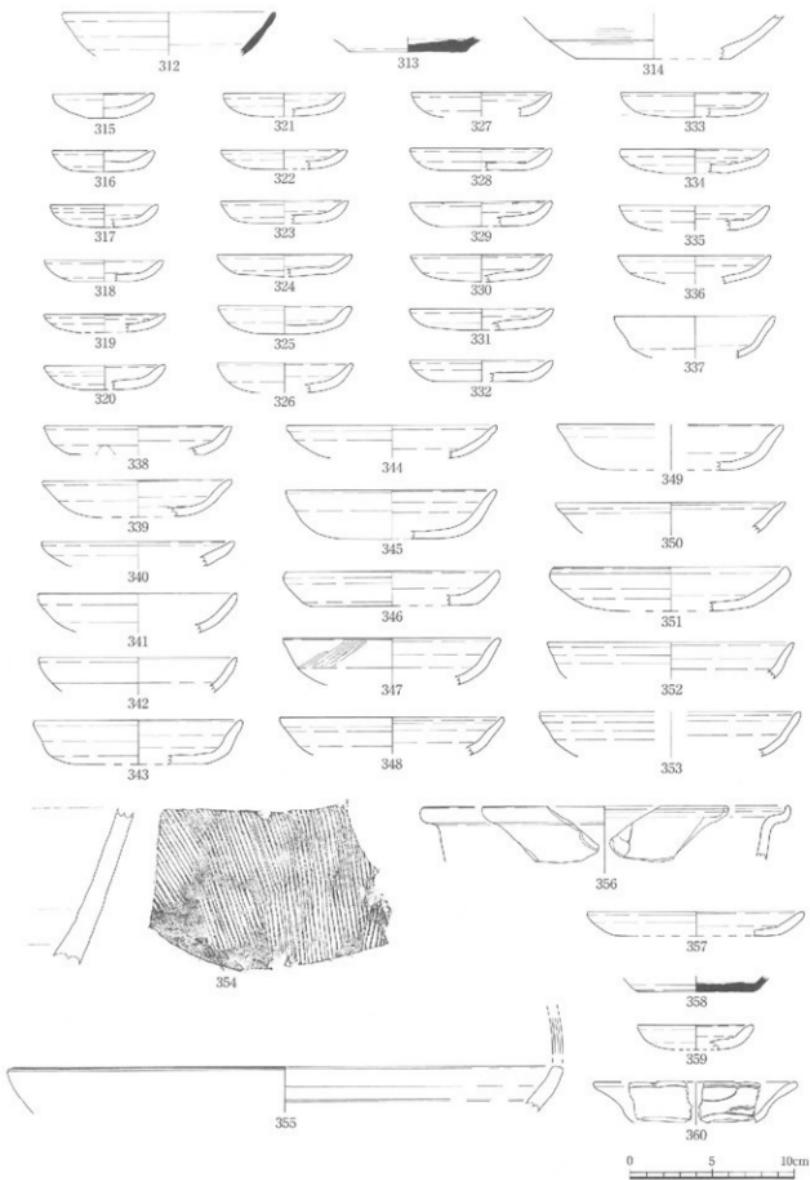
第44図 中世遺物 (S=1/3) 213~217(SK-39), 218~240(SK-40), 241~249(SK-41), 250(SK-43)



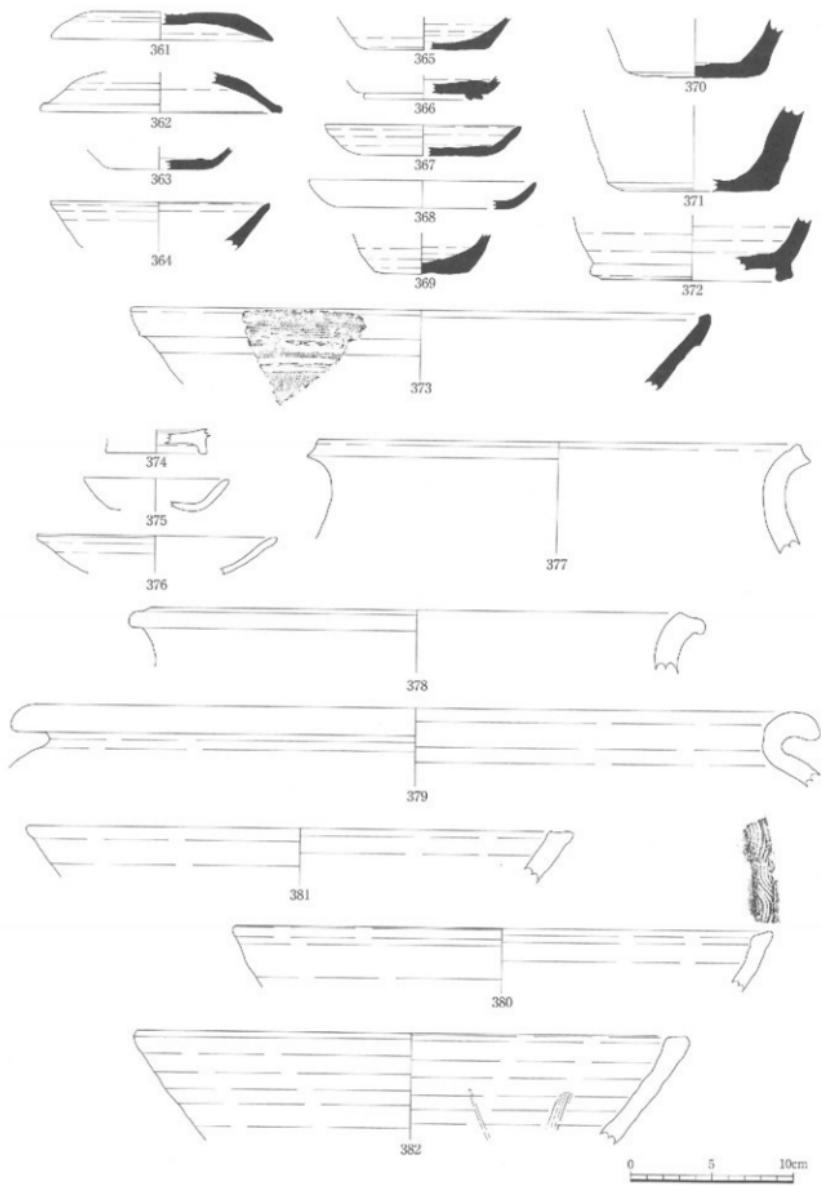
第45図 中世遺物 (S=1/3) 251~258(SK-44), 259~268(SK-45), 269~291(SK-48), 272~273(SP-08),
274(SP-12), 275(SP-13), 276(SP-14), 277(SP-15), 278·279(SP-23)



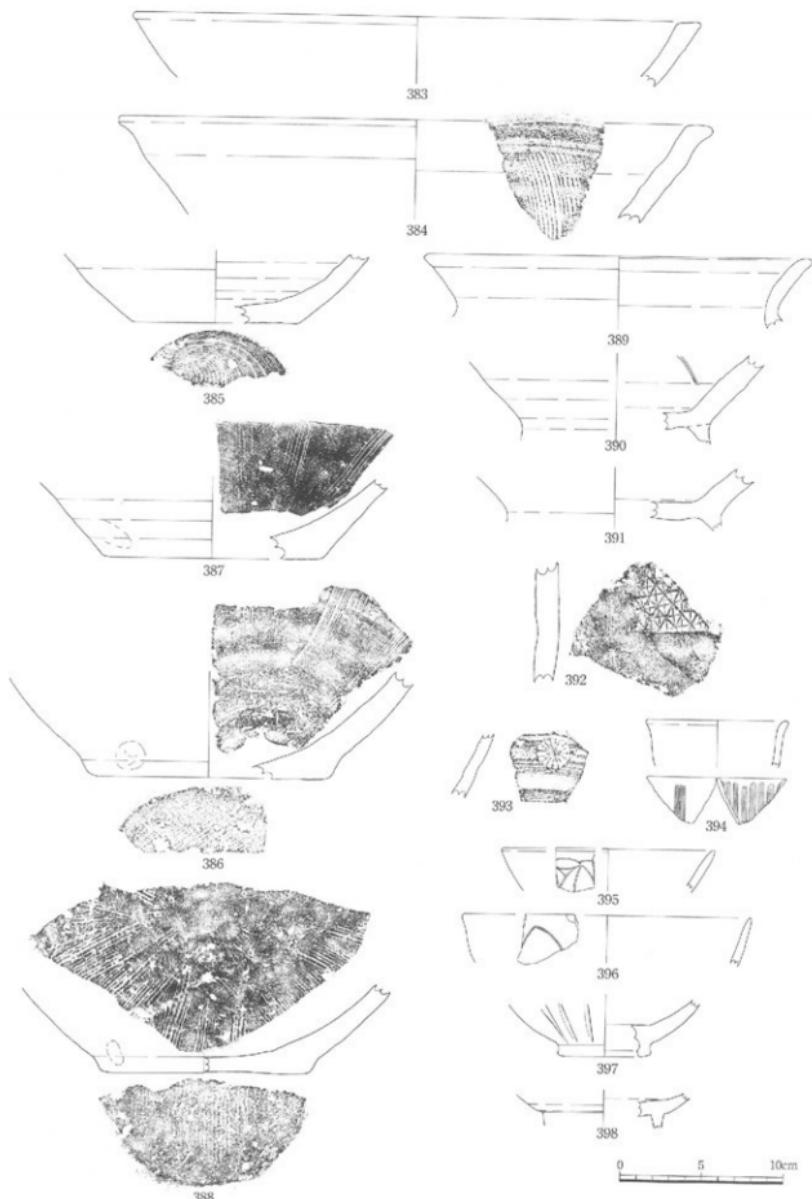
第46図 中世遺物(S=1/3) 280(SP-27), 281(SP-29), 282(SP-31), 283・284(SP-32), 285(SP-34),
286(SP-35), 287(SP-36), 288(SP-39), 289(SP-38), 290(SP-39), 291(SP-40), 292(SP-41),
293(SP-42), 294(SP-43), 295(SP-44), 296(SP-45), 297(SP-46), 298(SP-49), 299(SP-48),
300(SX-01), 301・302(SX-02), 303(SX-04), 304・305(SX-05), 306～310(SX-06), 311(SX-07)



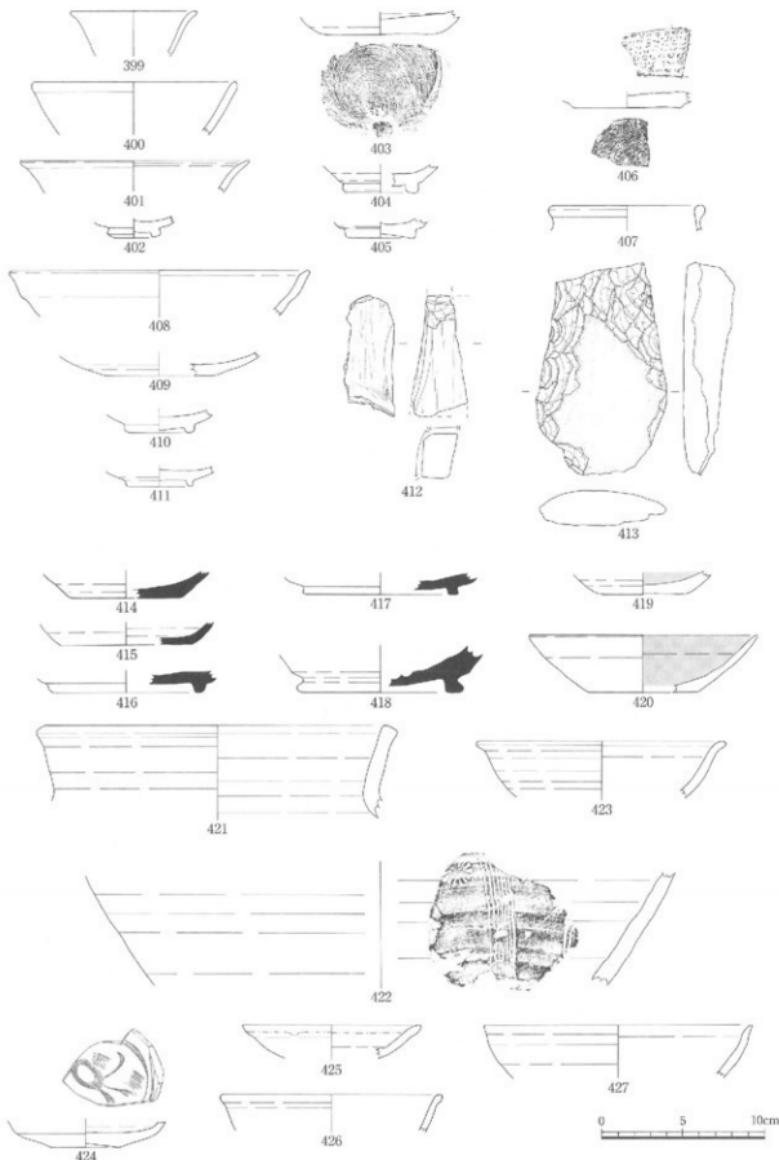
第47図 中世遺物(S=1/3) 312~356(SX-08), 357(SX-09), 358~360(SX-10)



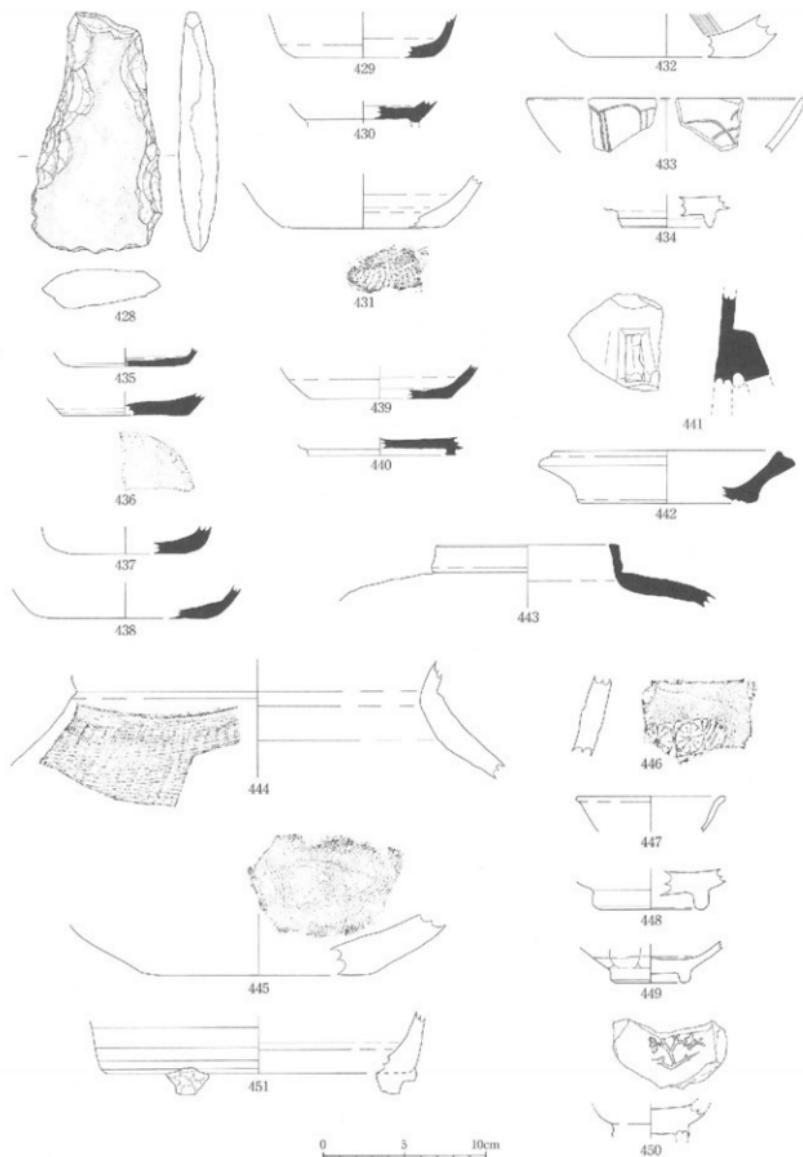
第48図 中世遺物(S=1/3) 361~382 (SD-01-1区)



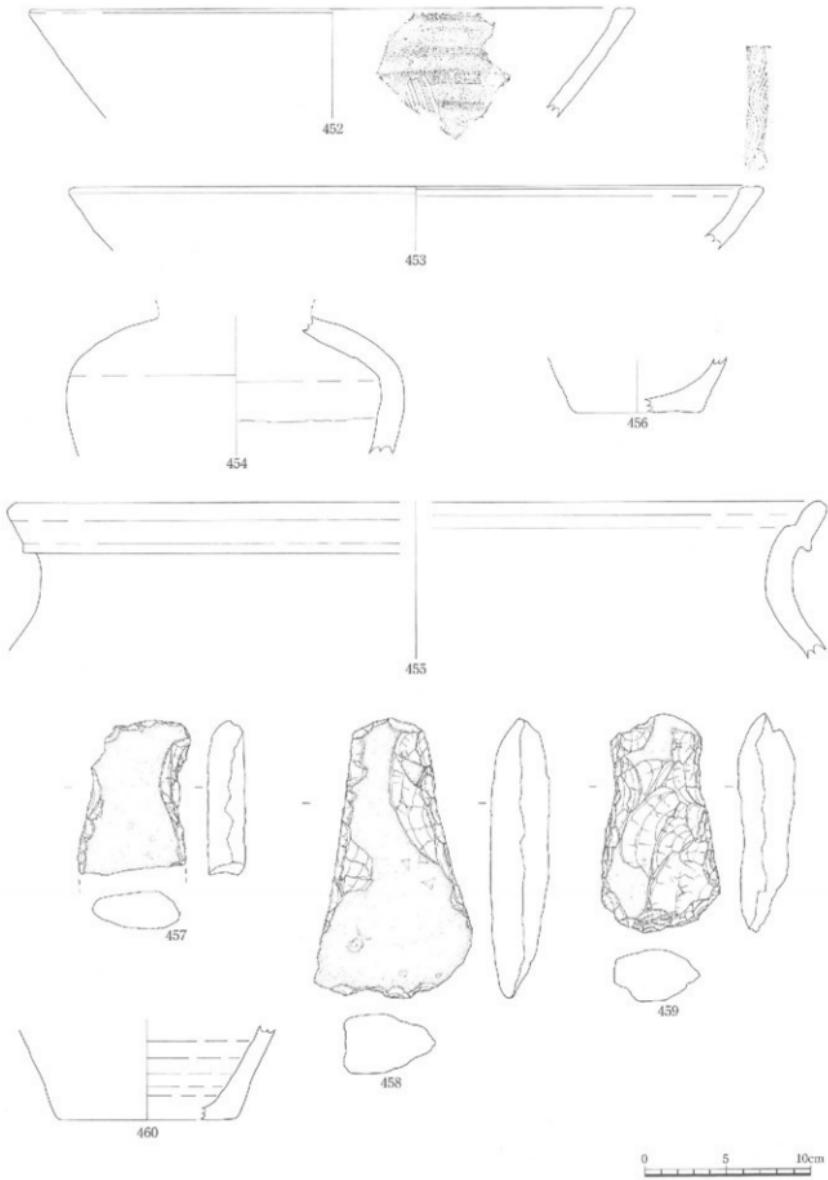
第49図 中世遺物 (S=1/3) 383~398 (SD-01-1区)



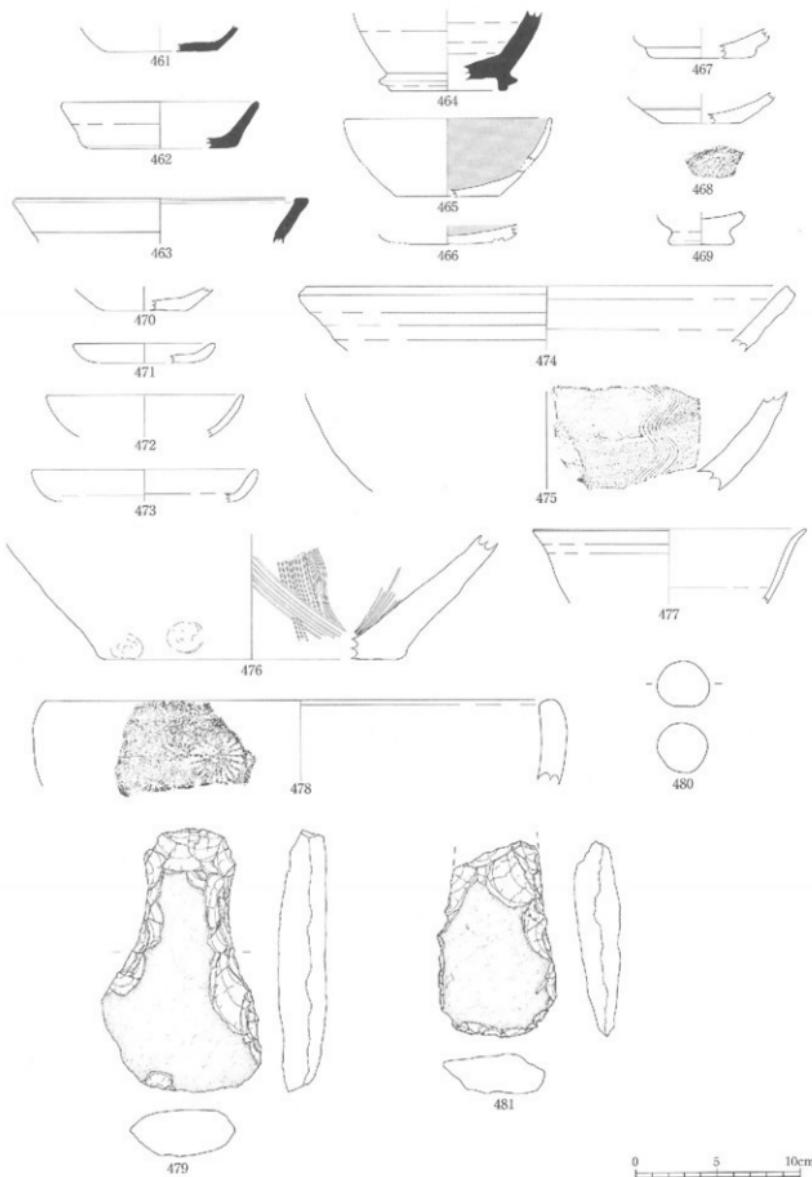
第50図 中世遺物 (S=1/3) 399~412(SD-01・1区), 414~427(SD-01・3区)



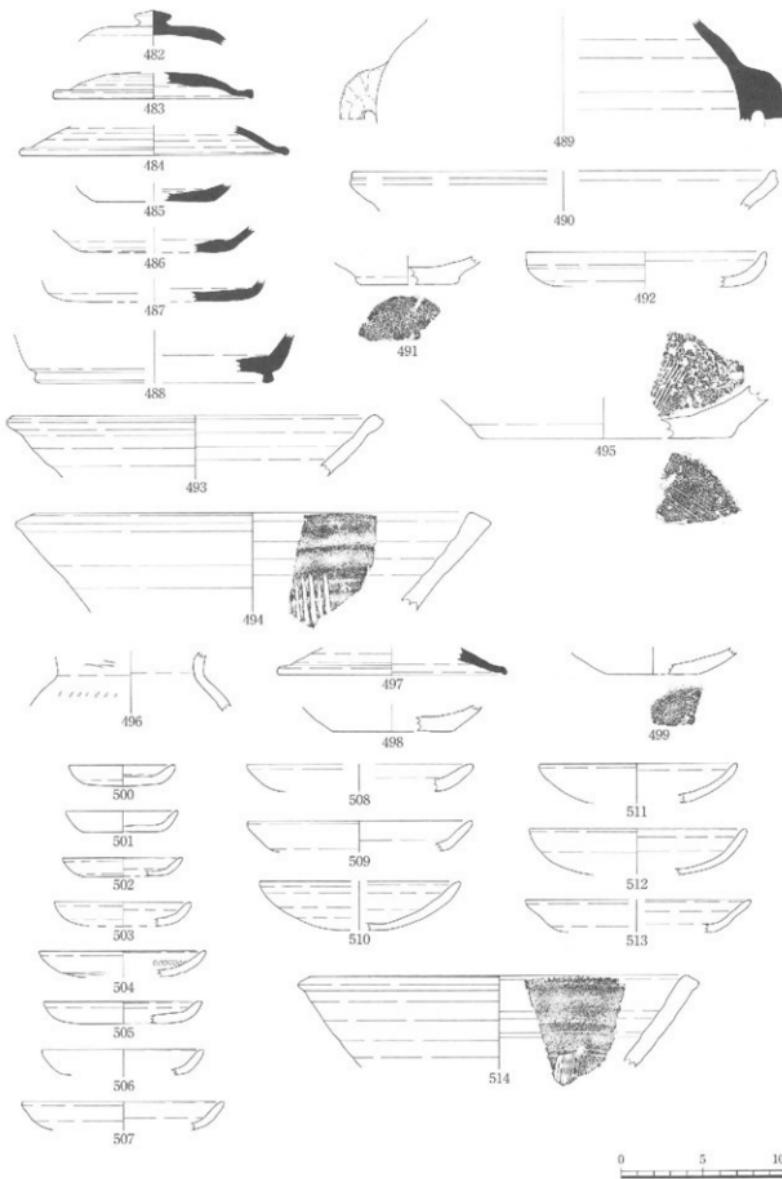
第51図 中世遺物 (S=1/3) 428(SD-01・1区), 429~434(SD-09・1区), 435~451(SD-09・3区)



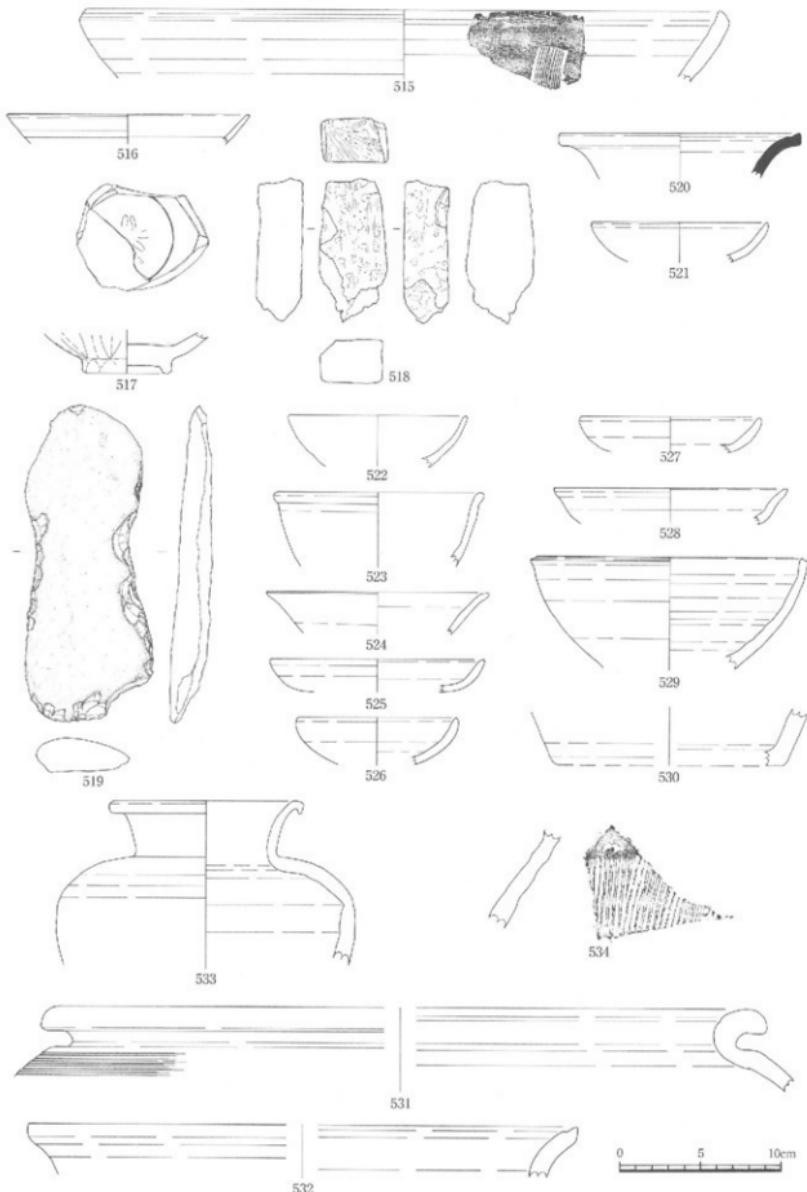
第52図 中世遺物 (S=1/3) 452~459 (SD-09-3区), 460 (SD-09-4区)



第53圖 中世遺物 (S=1/3) 461~480 (SD-11・3区), 481 (SD-11・5区)



第54図 中世遺物 (S=1/3) 482~495 (SD = 11.5区), 496~514 (SD = 11.5区), 496~514 (SD = 15)



第55図 中世遺物(S=1/3) 515~518(SD-15), 519~521(SD-16), 522~524(2区包含層), 525~534(5区包含層)

遺物觀察表（古代～中世 第11～13、39～55図）

番号	属 分	種 類	器 形	直 径	厚 度	足 形	備 考
28	SI-01	鐵器部	刀	口径：91	厚さ：2.8	小片	内面・自然鉛
29	SI-01	土師器	有台器	直径：24	約8mm	1/4	灰芯器
30	SI-01	陶製品	環状瓦器	直径：31	厚さ：15	突	14g
31	SI-02	土師器	瓶	口径：110	底径：100	灰黄色	1/6
32	SI-02	土師器	瓶	口径：122	底径：60	灰黄褐色	1/2 内黑
33	SI-06	土師器	瓶	直径：55	約35mm	灰黃色	5/6 内黑
34	SI-06	土師器	瓶	直径：60	約45mm	灰褐色	1/3 青石・石英
35	SI-06	土師器	瓶	口径：157	底径：110	灰黄褐色	小片
36	SI-08	漆器部	蓋	口径：163	底径：25	浅黄色	1/3 造形不良
37	SI-08	漆器部	有合口	口径：112	底径：76	灰色	1/3
38	SI-08	漆器部	杯	口径：122	底径：50	灰白色	小片
39	SI-08	漆器部	盒	口径：142	底径：90	深灰色	小片
40	SI-08	漆器部	桶	口径：106	底径：50	深灰色	小片
41	SI-08	铁製品	刀子狀 铁製品	長さ：124	幅：26	灰黄色	小片 石灰
42	SI-08	铁製品	剪刀狀 铁製品	長さ：98	厚さ：9	灰	21g
43	SI-08	铁製品	剪刀狀 铁製品	長さ：61	幅：16	灰黄色	小片 石灰
44	SI-01	土師器	瓶	口径：126	底径：62	灰黄色	1/3 P-1 内黑
45	SI-01	土師器	瓶	口径：51	底径：34	灰黄色	1/1 P-2
46	SI-01	土師器	蓋	口径：36	小片	P-3 小片・縮成重複状	
47	SI-01	土師器	瓶	直径：58	約50mm	灰褐色	1/3 P-3 石英
48	SI-01	土師器	瓶	口径：124	底径：52	灰褐色	小片 P-3
49	SI-01	土師器	瓶	口径：54	底径：35	灰黄色	1/1 P-4 内黑
50	SI-01	土師器	瓶	口径：134	底径：65	灰黄色	小片 P-4 内黑
51	SI-03	土師器	瓶	口径：122	底径：61	灰黄色	1/1 P-3 細緻無し
52	SI-03	土師器	瓶	口径：132	底径：65	灰黄色	小片 P-2 細緻
53	SI-03	土師器	瓶	口径：116	底径：55	灰	1/1 P-3
54	SI-03	土師器	瓶	口径：108	底径：50	灰黄色	小片 P-4 内黑
55	SI-04	土師器	瓶	口径：60	底径：50	灰黄色	1/6 P-1 P-2
36	SA-01	土師器	瓶	口径：126	底径：50	灰褐色	1/3 P-1 内黑
57	SA-01	土師器	瓶	口径：122	底径：64	灰黄色	1/2 灰
58	SA-01	土師器	瓶	口径：122	底径：64	灰黄色	1/1 P-1 内黑
59	SA-01	土師器	瓶	口径：64	底径：46	灰褐色	灰成不良
60	SK-49	黑漆器	瓶	口径：126	底径：62	灰	小片 内黑
61	SK-49	黑漆器	瓶	口径：74	底径：45	灰褐色	小片 内黑
62	SP-03	土師器	瓶	口径：106	底径：55	灰黄色	小片 内黑
63	SP-03	土師器	瓶	口径：58	底径：35	灰黄色	1/4 内黑
64	SP-03	土師器	有柄器	口径：100	底径：50	灰	1/4
65	SP-05	黑漆器	瓶	口径：124	底径：64	灰白色	灰
66	SP-06	黑漆器	瓶	口径：64	底径：46	灰黄色	1/2 灰
67	SP-07	土師器	瓶	口径：64	底径：46	灰褐色	1/3 灰
68	SP-09	土師器	瓶	口径：68	底径：48	灰褐色	1/6 内黑
69	SP-10	土師器	瓶	口径：66	底径：48	稍褐色	1/6 級成
70	SP-10	土師器	瓶	口径：200	底径：75	灰褐色	小片 灰
71	SP-11	黑漆器	瓶	口径：145	底径：84	灰	小片
72	SP-16	土師器	瓶	口径：104	底径：50	灰白色	灰
73	SP-17	单耳器	瓶	口径：104	底径：50	灰褐色	1/6 灰
74	SP-22	单耳器	瓶	口径：134	底径：66	稍褐色	1/6 級成
75	SP-24	单耳器	瓶	口径：84	底径：50	灰黄色	小片
76	SP-26	土師器	瓶	口径：150	底径：68	灰褐色	1/2 内外水彩
77	SP-28	铁製品	瓶	口径：20	底径：16	灰	1/6
78	SP-33	铁製品	瓶	口径：134	底径：50	灰褐色	小片
79	SK-03	漆器部	有环器	口径：98	底径：88	灰黄色	1/6 級成
80	SD-04	土師器	瓶	口径：142	底径：70	稍褐色	青石
81	SD-08	土師器	瓶	口径：114	底径：52	灰白色	1/3 内黑 石英
82	SD-11	漆器部	瓶	口径：190	底径：84	灰黄色	4区
83	SD-11	漆器部	瓶	口径：110	底径：55	灰褐色	青石灰 5区
84	SD-11	漆器部	瓶	口径：72	底径：52	灰褐色	1/4 青石灰 3区
85	SD-11	漆器部	瓶	口径：64	底径：50	灰褐色	2区
86	SD-11	漆器部	瓶	口径：69	底径：50	灰褐色	1/3
87	SD-15	金屬部	刀	口径：95	底径：55	古铜色	(5) 内黑・青石少
88	SD-16	土師器	瓶	口径：85	底径：55	灰褐色	小片 壓型斜い
89	SD-15	金屬部	瓶	口径：95	底径：55	灰褐色	小片
90	SD-15	金屬部	瓶	口径：90	底径：55	灰褐色	小片 銅乳・鍍金不良
91	SD-15	金屬部	瓶	口径：110	底径：55	灰褐色	小片
92	SD-15	土師器	瓶	口径：82	底径：55	灰褐色	1/3 青石少
93	SD-15	土師器	瓶	口径：88	底径：55	灰褐色	小片 青石少
94	SD-15	土師器	瓶	口径：90	底径：55	西夏褐色	1/6 青石少・青石青
95	SD-15	土師器	瓶	口径：106	底径：55	灰褐色	1/4
96	SD-15	加那	口鉢	直径：110	底径：55	灰黄色	3/4
97	SD-15	漆器	瓶	口径：104	底径：55	灰褐色	小片 地白
98	SD-15	漆器	瓶	口径：129	底径：80	灰褐色	小片
99	SD-11	土師器	瓶	口径：80	底径：55	灰褐色	1/4
100	SD-11	土師器	瓶	口径：125	底径：80	灰褐色	1/6 青石
101	SD-11	土師器	瓶	口径：125	底径：80	灰褐色	小片 青石
102	SD-12	土師器	瓶	口径：166	底径：80	灰褐色	1/6 青石
103	SD-12	土師器	瓶	口径：36	底径：35	灰白色	2/3
104	SD-12	土師器	瓶	口径：66	底径：60	灰褐色	1/3 青山少・青山少
105	SD-12	土師器	瓶	口径：72	底径：65	灰褐色	1/4 青石少
106	SD-12	土師器	瓶	口径：78	底径：65	橙色	壳青
107	SD-12	土師器	瓶	口径：84	底径：65	橙色	小片 壳青
108	SD-12	土師器	瓶	口径：100	底径：80	橙褐色	1/5 青石
109	SD-12	土師器	瓶	口径：106	底径：80	灰褐色	小片 青石少
110	SD-12	土師器	瓶	口径：112	底径：80	橙色	小片 青石少・青石少
111	SD-12	土師器	瓶	口径：116	底径：80	灰褐色	1/7 椿成らしい
112	SD-12	土師器	瓶	口径：119	底径：80	灰褐色	小片 海竹・石英
113	SD-12	土師器	瓶	口径：120	底径：80	灰褐色	小片 壳青
114	SD-12	土師器	瓶	口径：120	底径：80	灰褐色	1/6 青石少
115	SD-12	土師器	瓶	口径：120	底径：80	灰褐色	1/7
116	SD-12	土師器	瓶	口径：122	底径：80	灰褐色	小片 青石少
117	SD-12	土師器	瓶	口径：124	底径：80	灰褐色	小片 青石少
118	SD-12	土師器	瓶	口径：126	底径：80	橙色	小片 青石少・青石少
119	SD-12	土師器	瓶	口径：130	底径：80	灰褐色	1/6 椿成らしい
120	SD-12	土師器	瓶	口径：150	底径：80	灰褐色	小片 青石少
121	SD-12	土師器	瓶	口径：150	底径：80	灰褐色	1/3 青石少
122	SD-12	陶器	瓶	口径：107	底径：80	灰褐色	壳青少?
123	SD-12	陶器	瓶	口径：121	底径：80	灰褐色	小片 石英
124	SD-12	陶器	瓶	口径：121	底径：80	灰褐色	小片 石英少・青石少
125	SD-12	陶器	瓶	口径：156	底径：80	灰褐色	1/7
126	SD-12	陶器	瓶	口径：160	底径：80	灰褐色	小片 青石少・青石少
127	SD-12	白陶器	瓶	口径：71	底径：55	灰白色	1/6 青石少
128	SD-12	土師器	瓶	口径：107	底径：80	灰褐色	壳青少?
129	SD-13	土師器	瓶	口径：35	底径：25	褐色	壳青
130	SD-13	土師器	瓶	口径：82	底径：70	黄褐色	1/6
131	SD-13	土師器	瓶	口径：84	底径：70	黄褐色	2/3
132	SD-13	土師器	瓶	口径：114	底径：80	灰褐色	壳青少
133	SD-13	土師器	瓶	口径：120	底径：80	灰褐色	小片 壳青少・青石少
134	SD-13	土師器	瓶	口径：124	底径：80	灰褐色	小片 壳青少
135	SD-13	土師器	瓶	口径：126	底径：80	灰褐色	1/4 海青少
136	SD-13	土師器	瓶	口径：136	底径：80	褐色	1/6
137	SD-13	青瓷	小鉢	口径：130	底径：80	青色	1/1 -P-1 -P-2
138	SD-13	青瓷	石碗	口径：320	底径：250	青色	小片 青底瓦・青碗
139	SD-14	土師器	瓶	口径：94	底径：70	褐色	1/4
140	SD-14	土師器	瓶	口径：106	底径：80	褐色	1/6 椿成らしい
141	SD-14	土師器	瓶	口径：112	底径：80	褐色	小片 壳青少・青石少
142	SD-07	土師器	瓶	口径：126	底径：80	灰褐色	1/3 青石・壳青
143	SD-07	土師器	瓶	口径：88	底径：65	灰褐色	1/4 青石・壳青・青石少
144	SD-12	土師器	瓶	口径：68	底径：55	灰褐色	1/2 P-1
145	SD-12	土師器	瓶	口径：104	底径：80	灰褐色	小片 P-2 壳青
146	SD-12	瓶	瓶	口径：64	底径：55	白	1/3 P-2
147	SD-21	土師器	瓶	口径：150	底径：80	灰褐色	1/7 P-1 壳青
148	SD-23	土師器	瓶	口径：98	底径：75	灰褐色	小片 P-2 壳青少
149	SD-24	土師器	瓶	口径：58	底径：55	灰褐色	1/6 壳青少
150	SD-29	陶器	片口	口径：272	底径：250	灰褐色	小片 P-1 灰
151	SD-30	土師器	瓶	口径：106	底径：80	灰褐色	小片 P-1 灰
152	SD-30	土師器	瓶	口径：80	底径：65	灰褐色	小片 P-1 灰
153	SD-31	土師器	瓶	口径：96	底径：70	灰褐色	小片 P-1 灰
154	SD-31	土師器	瓶	口径：82	底径：65	灰褐色	1/3 P-2 灰
155	SD-31	土師器	瓶	口径：157	底径：130	灰褐色	小片 P-1 灰
156	SD-32	石器品	碗	口径：177	底径：155	灰褐色	小片 P-1 灰
157	SD-32	陶器	片口	口径：222	底径：200	灰褐色	小片 P-1 灰

學名	英 標	種 級	分 帶	形 型	直徑	材 質
156 SD-32	上輪莎	樹	口徑：120	圓彎曲	小片	P-3, 木利
156 SD-32	上輪莎	樹	口徑：64	黃變彎曲	1/4	P-3, 海香
160 SD-32	上輪莎	樹	口徑：124	淡紫彎曲	1/6	P-3, 海香, 石青
161 SD-32	上輪莎	樹	口徑：108	褐色	小片	P-4, 海香
162 SD-32	土輪莎	樹	口徑：126	淡紫褐色	小片	P-6
163 SD-32	土輪莎	樹	口徑：68	黃褐色	1/4	P-6, 白灰
164 SD-32	土輪莎	樹	口徑：118	湖白色	小片	P-7, 海香, 石青
165 SD-32	雪鶴	鶴	口徑：180	2#~7#長腿	小片	3#~5#短腿
166 SD-32	土輪莎	樹	口徑：90	淡紫褐色	1/2	P-6, 灰火
167 SD-32	土輪莎	樹	口徑：80	淡紫褐色	1/2	P-6
168 SD-32	土輪莎	樹	口徑：89	黃變褐色	1/7	P-8, 安慶
169 SD-32	土輪莎	樹	口徑：84	黃變褐色	小片	P-9, 灰火
170 SD-32	土輪莎	樹	口徑：118	黃變褐色	小片	P-10, 海香
171 SK-16	土輪莎	樹	口徑：70	黃變褐色	1/4	
172 SK-16	土輪莎	樹	口徑：108	淡紫褐色	小片	朱紅, 石青
173 SK-18	土輪莎	樹	口徑：170	2#~7#長腿	小片	石青
174 SK-18	鶴	鶴	口徑：170	2#~7#長腿	小片	石青
175 SK-21	土輪莎	樹	口徑：104	黃變褐色	小片	
176 SK-21	土輪莎	樹	口徑：246	黃變褐色	小片	石青
177 SK-23	鶴	鶴	口徑：328	淡紫褐色	小片	石青
178 SK-23	鶴	鶴	口徑：132	淡紫褐色	1/2,	黃
179 SK-23	五鳳松	松	口徑：320	淺黃色	小片	
180 SK-24	石輪葉	硯石	高さ：3	深藍	定	朱紅, 淡紫褐色, 1000g
181 SK-31	上輪莎	樹	口徑：115	黃變褐色	1/2	海香, 銀
182 SK-31	上輪莎	樹	口徑：140	黃變褐色	1/5	海香
183 SK-34	上輪莎	樹	口徑：128	褐色	1/5	海香, 琥珀
184 SK-35	上輪莎	樹	口徑：124	褐色	小片	海香, 石青
185 SK-36	上輪莎	樹	口徑：114	淡紫褐色	1/1	
186 SK-36	上輪莎	樹	口徑：84	淡紫褐色	1/7	白灰, 海香
187 SK-36	上輪莎	樹	口徑：98	淡紫褐色	1/9	白灰
188 SK-36	上輪莎	樹	口徑：108	淡紫褐色	1/9	白灰
189 SK-36	上輪莎	樹	口徑：328	淡紫褐色	1/9	白灰~黑灰
190 SK-37	上輪莎	樹	口徑：78	淡紫褐色	1/2	淡紫, 朱紅, 金合歡
191 SK-37	上輪莎	樹	口徑：132	黃變褐色	3/4	3#~6#淡紫, 海香, 絲竹
192 SK-47	鶴	鶴	口徑：116	天藍色	1/5	白灰
193 SK-48	頭參	鶴	口徑：140	天藍色	小片	
194 SK-48	雙喜	鶴	口徑：94	天藍色	1/6	
195 SK-48	上輪莎	樹	口徑：100	淡紫褐色	小片	內黑, 石青
196 SK-48	上輪莎	樹	口徑：60	褐色	1/6	內黑, 白灰
197 SK-48	上輪莎	樹	口徑：108	淡紫褐色	小片	朱紅
198 SK-48	上輪莎	樹	口徑：300	雲霧褐色	小片	朱紅, 銀
199 SK-48	上輪莎	樹	口徑：74	淡紫褐色	1/5	朱紅, 白灰
200 SK-48	上輪莎	樹	口徑：76	黃變褐色	1/6	海香, 白灰
201 SK-48	上輪莎	樹	口徑：88	黃變褐色	1/6	海香, 白灰
202 SK-48	上輪莎	樹	口徑：94	黃變褐色	1/6	海香
203 SK-48	上輪莎	樹	口徑：106	褐色	1/6	海香, 石青
204 SK-48	上輪莎	樹	口徑：106	天藍色	1/6	1#朱紅~13#朱
205 SK-48	上輪莎	樹	口徑：110	褐色	1/6	朱紅
206 SK-48	上輪莎	樹	口徑：134	淡紫褐色	小片	海香
207 SK-48	上輪莎	樹	口徑：100	淡紫褐色	1/6	朱紅
208 SK-48	雙喜	鶴	口徑：268	天藍色	小片	朱紅, 白灰
209 SK-48	雙喜	鶴	口徑：369	天藍色	小片	朱紅
210 SK-48	朱鴻	鶴	口徑：54	天藍色	小片	2#白
211 SK-48	白鶴	鶴	口徑：2008	灰白色	小片	A~E
212 SK-48	石輪葉	硯石	高さ：173 幅：141 厚さ：69	米	褐褐色	
213 SK-49	上輪莎	樹	口徑：90	褐色	1/0	海香少
214 SK-49	上輪莎	樹	口徑：100	黃變褐色	小片	海香少
215 SK-49	上輪莎	樹	口徑：102	黃變褐色	小片	海香少
216 SK-49	上輪莎	樹	口徑：132	黃變褐色	1/6	海香, 絲竹
217 SK-49	青鶴	鶴	口徑：1190	明黃褐色	小片	
218 SK-49	銀毫草	草	口徑：15	褐色	1/6	
219 SK-49	銀毫草	草	口徑：112	黃褐色	小片	
220 SK-49	銀毫草	草	口徑：114	褐色	小片	
221 SK-49	銀毫草	草	口徑：116	黃變褐色	1/6	
222 SK-49	上輪莎	樹	口徑：67	黃變褐色	1/5	海香, 白灰
223 SK-49	上輪莎	樹	口徑：72	褐褐色	1/4	朱紅
224 SK-49	上輪莎	樹	口徑：72	淡紫褐色	1/4	朱紅
225 SK-49	上輪莎	樹	口徑：73	黃變褐色	1/6	朱紅
226 SK-49	上輪莎	樹	口徑：77	褐色	小片	海香
227 SK-49	上輪莎	樹	口徑：80	黃變褐色	1/3	海香
228 SK-49	上輪莎	樹	口徑：82	明黃褐色	1/5	朱紅, 海香
229 SK-49	上輪莎	樹	口徑：84	黃變褐色	1/5	朱紅, 海香
230 SK-49	上輪莎	樹	口徑：120	黃變褐色	1/6	朱紅, 海香
231 SK-49	土輪莎	樹	口徑：89	黃變褐色	1/6	朱紅, 海香
232 SK-49	土輪莎	樹	口徑：120	黃變褐色	1/6	朱紅, 海香
233 SK-49	土輪莎	樹	口徑：124	黃變褐色	1/6	朱紅, 海香
234 SK-49	土輪莎	樹	口徑：125	黃變褐色	1/6	朱紅, 海香
235 SK-49	土輪莎	樹	口徑：140	黃變褐色	1/6	朱紅, 海香
236 SK-49	加葉	葉	口徑：174	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
237 SK-49	白鶴	鶴	口徑：112	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
238 SK-49	白鶴	鶴	口徑：112	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
239 SK-49	白鶴	鶴	口徑：112	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
240 SK-49	白鶴	鶴	口徑：112	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
241 SK-49	白鶴	鶴	口徑：112	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
242 SK-49	白鶴	鶴	口徑：112	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
243 SK-49	白鶴	鶴	口徑：112	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
244 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
245 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
246 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
247 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
248 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
249 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
250 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
251 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
252 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
253 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
254 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
255 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
256 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
257 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
258 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
259 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
260 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
261 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
262 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
263 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
264 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
265 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
266 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
267 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
268 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
269 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
270 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
271 SK-49	白鶴	鶴	口徑：200	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
272 SP-06	土輪莎	樹	口徑：136	明黃褐色	1/2	內黑
273 SP-08	月上林	林	口徑：280	黃褐色	小片	朱紅, 雞冠
274 SP-12	土輪莎	樹	口徑：90	黃變褐色	1/6	內黑
275 SP-13	土輪莎	樹	口徑：96	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
276 SP-14	白鶴	鶴	口徑：148	黃變褐色	小片	朱紅
277 SP-15	白鶴	鶴	口徑：108	黃變褐色	小片	朱紅
278 SP-23	上輪莎	樹	口徑：94	黃變褐色	1/2	朱紅, 海香
279 SP-23	上輪莎	樹	口徑：86	黃變褐色	1/3	朱紅, 海香
280 SP-27	上輪莎	樹	口徑：73	黃變褐色	1/3	朱紅, 海香
281 SP-29	上輪莎	樹	口徑：128	黃變褐色	小片	朱紅, 海香
282 SP-31	上輪莎	樹	口徑：38	黃變褐色	1/3	朱紅少
283 SP-32	上輪莎	樹	口徑：160	黃變褐色	小片	朱紅少
284 SP-33	上輪莎	樹	口徑：140	黃變褐色	小片	朱紅少
285 SP-34	上輪莎	樹	口徑：92	黃變褐色	1/3	朱紅少
286 SP-35	上輪莎	樹	口徑：76	黃變褐色	1/4	朱紅少
287 SP-36	上輪莎	樹	口徑：64	黃變褐色	1/4	朱紅少
288 SP-37	白鶴	鶴	口徑：96	黃變褐色	小片	朱紅少
289 SP-38	上輪莎	樹	口徑：96	黃變褐色	小片	朱紅少, 海香
290 SP-39	上輪莎	樹	口徑：86	黃變褐色	小片	朱紅少, 海香
291 SP-40	潔潤	片口鈕	口徑：124	黃變褐色	小片	朱紅少
292 SP-41	白鶴	鶴	口徑：32	黃變褐色	小片	朱紅少, 海香
293 SP-42	上輪莎	樹	口徑：114	黃變褐色	小片	朱紅少
294 SP-43	上輪莎	樹	口徑：160	黃變褐色	小片	朱紅少
295 SP-44	上輪莎	樹	口徑：92	黃變褐色	小片	朱紅少
296 SP-45	上輪莎	樹	口徑：84	黃變褐色	小片	朱紅少, 頭細少
297 SP-46	上輪莎	樹	口徑：81	黃變褐色	小片	朱紅少, 海香
298 SP-47	上輪莎	樹	口徑：94	黃變褐色	小片	朱紅少

番号	基 標	種 别	法 令	色 調	規 定	備 考
299	SP-48	土漆器	基	口絞: 50 漆色: 黒	1/6 黒地	
300	SX-01	土漆器	基	口絞: 0(1)	浅黄褐色 小片	圓孔
301	SX-02	抹瓶油	釉状	具合: 60 輪: 12	完 7g	
302	SX-02	抹瓶油	質状	具合: 80 輪: 24 厚さ: 19	完 16.7g	
303	SX-01	石製品	瓦	具合: 168 輪: 28 厚さ: 58	完 100.0g	
304	SX-05	漆器	碗	具合: 43 底: 98	オリーブ色 小片	漆油(15%)
305	SG-05	漆器	底	具合: 46	漆褐色 小片	
306	SX-06	土漆器	底	具合: 98	漆青褐色 小片	6.6 黒地
307	SX-06	土漆器	底	具合: 125	漆褐色 小片	
308	SX-06	土漆器	底	具合: 145	漆青褐色 小片	朱漆(15%)
309	SX-06	土漆器	底	具合: 152	漆褐色 小片	青漆+石粉
310	SX-06	漆器	底	具合: 276	漆褐色 小片	
311	SX-07	土漆器	面	具合: 138	浅青褐色 小片	1/7
312	SX-06	漆器	面	具合: 130	灰色 小片	
313	SX-06	漆器	面	具合: 72	灰色 小片	
314	SX-06	土漆器	底	具合: 94	浅青褐色 小片	1/6 石粉
315	SX-06	土漆器	里	具合: 62	浅青褐色 小片	漆油(15%)
316	SX-08	土漆器	底	具合: 65	漆褐色 小片	1/5 6.6 石粉
317	SX-08	土漆器	底	具合: 65	漆褐色 小片	1/5 6.6 石粉
318	SX-08	土漆器	底	具合: 72	漆褐色 小片	1/5 6.6 石粉
319	SX-08	土漆器	底	具合: 74	漆褐色 小片	
320	SX-08	土漆器	底	具合: 74	漆褐色 小片	1/5 6.6
321	SX-08	土漆器	底	具合: 74	漆褐色 小片	6.6
322	SX-08	土漆器	底	具合: 76	漆褐色 小片	
323	SX-08	土漆器	底	具合: 78	漆褐色 小片	
324	SX-08	土漆器	底	具合: 82	漆青褐色 小片	6.6 6.6 石粉
325	SX-08	土漆器	底	具合: 87	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
326	SX-08	土漆器	底	具合: 87	漆褐色 小片	1/4 6.6 石粉
327	SX-08	土漆器	底	具合: 86	漆褐色 小片	1/6 6.6 石粉
328	SX-08	土漆器	底	具合: 91	漆褐色 小片	1/2 6.6 石粉
329	SX-08	土漆器	底	具合: 90	灰色 小片	1/2 6.6 石粉
330	SX-08	土漆器	底	具合: 90	灰色 小片	6.6 6.6 石粉
331	SX-08	土漆器	底	具合: 88	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
332	SX-08	土漆器	底	具合: 88	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
333	SX-08	土漆器	底	具合: 90	灰色 小片	6.6 6.6 石粉
334	SX-08	土漆器	底	具合: 92	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
335	SX-08	土漆器	底	具合: 92	灰色 小片	6.6 6.6 石粉
336	SX-08	土漆器	底	具合: 94	灰色 小片	6.6 6.6 石粉
337	SX-08	土漆器	底	具合: 95	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
338	SX-08	土漆器	底	具合: 114	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
339	SX-08	土漆器	底	具合: 116	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
340	SX-08	土漆器	底	具合: 118	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
341	SX-08	土漆器	底	具合: 122	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
342	SX-08	土漆器	底	具合: 122	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
343	SX-08	土漆器	底	具合: 127	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
344	SX-08	土漆器	底	具合: 128	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
345	SX-08	土漆器	底	具合: 130	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
346	SX-08	土漆器	底	具合: 141	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
347	SX-08	土漆器	底	具合: 144	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
348	SX-08	土漆器	底	具合: 150	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
349	SX-08	土漆器	底	具合: 158	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
350	SX-08	土漆器	底	具合: 166	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
351	SX-08	土漆器	底	具合: 172	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
352	SX-08	土漆器	底	具合: 173	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
353	SX-08	土漆器	底	具合: 175	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
354	SX-08	土漆器	底	具合: 176	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
355	SX-08	土漆器	底	具合: 176	漆褐色 小片	6.6 6.6 石粉
356	SX-08	土漆器	底	具合: 222	オリーブ色 小片	6.6 6.6 石粉
357	SX-09	土漆器	底	具合: 130	漆褐色 小片	漆油(15%)
358	SX-10	土漆器	底	具合: 76	灰色 小片	
359	SX-10	土漆器	底	具合: 76	繪色 小片	
360	SX-10	土漆器	底	具合: 76	漆褐色 小片	
361	SX-01	漆器	底	具合: 126	漆褐色 小片	6.6
362	SX-01	漆器	底	具合: 126	漆褐色 小片	6.6
363	SX-01	漆器	底	具合: 126	漆褐色 小片	6.6
364	SX-01	漆器	底	具合: 126	漆褐色 小片	6.6
365	SX-01	漆器	底	具合: 126	漆褐色 小片	6.6
366	SX-01	漆器	底	具合: 126	漆褐色 小片	6.6
367	SX-01	漆器	底	具合: 126	漆褐色 小片	6.6
368	SX-01	漆器	底	具合: 140	灰色 小片	

番号	基 標	種 別	法 令	色 調	規 定	備 考
369	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 75%	オリーブ色 6.6
370	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 84%	黒色 1/6
371	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 100%	黒色 1/6
372	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 124%	青灰色 1/6
373	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 354%	黒色 小片
374	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 62%	浅灰色 1/4 内底・外底
375	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 88%	暗褐色 1/6
376	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 146%	浅灰色 1/6 内底・外底
377	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 289%	深灰色 小片
378	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 350%	灰地 小片 日付: 一日
379	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 404%	灰白色 小片 日付: 二日
380	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 132%	黄褐色 1/2 1/6
381	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 334%	灰白色 小片
382	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 336%	灰白色 小片 1/6
383	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 341%	灰白色 小片
384	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 360%	灰白色 小片
385	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 399%	米白色 1/4
386	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 119%	黑色 1/4 新規
387	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 137%	褐灰色 小片 備考: (使用に止る)
388	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 125%	灰褐色 小片
389	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 238%	明褐色 小片
390	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 411%	灰褐色 小片 1/6 新規
391	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 56%	青褐色 1/4
392	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 174%	イエロー 1/7 1/6 新規
393	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 76%	灰白色 1/6
394	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 128%	オリーブ色 1/6
395	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 128%	オリーブ色 1/6 新規
396	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 176%	オリーブ色 1/6 新規
397	SD-01	漆器	底	灰地	灰地: 56%	7-7 7-7 6.6 1/6 新規
398	SD-01	白漆	底	灰地	灰地: 174%	イエロー 1/7 1/6 新規
399	SD-01	白漆	底	灰地	灰地: 76%	灰白色 小片
400	SD-01	白漆	底	灰地	灰地: 154%	オリーブ色 1/6 新規
401	SD-01	白漆	底	灰地	灰地: 140%	白色 1/6 新規
402	SD-01	白漆	底	灰地	灰地: 32	灰白色 2
403	SD-01	白漆	底	灰地	灰地: 26	オリーブ色 2/3
404	SD-01	白漆	底	灰地	灰地: 46	白地 1/6 新規
405	SD-01	白漆	底	灰地	灰地: 40%	黒褐色 1/6 人形
406	SD-01	白漆	底	灰地	灰地: 68%	灰白色 1/4
407	SD-01	白漆	底	灰地	灰地: 95%	灰白色 1/6
408	SD-01	白漆	底	灰地	灰地: 182%	オリーブ色 小片 新規
409	SD-01	白漆	底	灰地	灰地: 64%	油地 1/6 新規
410	SD-01	白漆	底	灰地	灰地: 44%	灰白色 1/2 1/6 新規
411	SD-01	白漆	底	灰地	灰地: 38%	青褐色 1/6 新規
412	SD-01	石製品	碗	長さ: 131	長さ: 34	白地 1/6 新規
413	SD-01	石製品	打制土器	幅: 80	幅: 31	白地 1/6 新規
414	SD-01	石製品	底	武井: 68	武井: 68	灰色 1/4
415	SD-01	石製品	底	武井: 80	武井: 80	灰色 1/7
416	SD-01	石製品	有台座	武井: 96	武井: 96	灰色 1/6 黒色
417	SD-01	石製品	有台座	武井: 96	武井: 96	灰白色 小片 外盤灰陶
418	SD-01	石製品	底	武井: 102	武井: 102	单屈足 1/4
419	SD-01	土漆器	底	武井: 56	漆褐色	1/2 内底・石头
420	SD-01	土漆器	底	武井: 129	灰白色 1/6 内底・新規	
421	SD-01	土漆器	底	武井: 229	灰白色	1/7
422	SD-01	土漆器	底	武井: 136	灰白色	小片 新規
423	SD-01	土漆器	底	武井: 152	オリーブ色 小片	1/7 1/6 新規
424	SD-01	土漆器	底	武井: 42	武井: 42	1/7 1/6 新規
425	SD-01	土漆器	底	武井: 119	灰白色	小片 灰白色
426	SD-01	土漆器	底	武井: 136	新灰褐色 小片	1/6 新規
427	SD-01	土漆器	底	武井: 164	新灰褐色 小片	1/7 1/6 新規
428	SD-01	石製品	打制土器	長さ: 149	長さ: 80	新規
429	SD-01	豆漆器	底	武井: 86	武井: 86	灰白色 1/6
430	SD-01	豆漆器	底	武井: 146	豆漆器: 146%	豆灰白 1/6
431	SD-01	豆漆器	底	武井: 96	豆漆器: 96	豆灰白 1/6
432	SD-01	豆漆器	片口盆	武井: 98	豆漆器: 98	豆灰白 1/6 新規
433	SD-01	豆漆器	底	武井: 170	1/1 1/1 豆灰白 1/6 新規	豆灰白 1/6 新規
434	SD-01	豆漆器	底	武井: 54	豆漆器: 54	豆灰白 1/6 新規
435	SD-01	豆漆器	底	武井: 24	豆漆器: 24	灰白色 1/3
436	SD-01	豆漆器	底	武井: 78	豆漆器: 78	豆灰白 1/4 新規
437	SD-01	豆漆器	底	武井: 20	豆漆器: 20	豆灰白 1/4 新規

登 号	通 品	種 别	品 標	法 定	色 調	通号	備 考
438	SD-09	頭蓋骨	片	既作: 100	灰白色	1/6	
439	SD-09	頭蓋骨	部	既作: 84	灰白色	1/6	
440	SD-09	頭蓋骨	有台杯	既作: 86	灰白色	1/4	
441	SD-09	頭蓋骨	皮耳版		褐色	完	
442	SD-09	頭蓋骨	不明	口作: 136	灰白色	1/4	新赤不顯
443	SD-09	頭蓋骨	室	口作: 119	灰白色	小片	
444	SD-09	頭蓋骨	室	部厚脛: 239	褐色	1/6	
445	SD-09	頭蓋骨	片口脣	既作: 140	灰色	1/6	毛孔
446	SD-09	頭蓋骨	片口脣		灰白色	完	薄十重苔
447	SD-09	頭蓋骨	頭及裏	口作: 92	灰白色	小片	既作
448	SD-09	頭蓋骨	頭	既作: 60	オリーブ色	1/3	
449	SD-09	頭蓋骨	頭	既作: 48	オリーブ色	1/6	
450	SD-09	頭蓋骨	頭	既作: 49	オリーブ色	1/2	
451	SD-09	頭蓋骨	頭	既作: 181	浅褐色	小片	14C年草
452	SD-09	頭蓋骨	片口脣	口作: 126	灰白色	小片	
453	SD-09	頭蓋骨	片口脣	口作: 124	褐色	小片	
454	SD-09	頭蓋骨	頭	既作: 192	暗褐色	1/3	13C~14C
455	SD-09	頭蓋骨	頭	既作: 190	暗褐色	小片	
456	SD-09	頭蓋骨	頭	既作: 80	灰黄色	1/3	
457	SD-09	石器品	打制土器類	既作: 69		完	2.0g
458	SD-09	石器品	打制土器類	既作: 92		完	440g
459	SD-09	石器品	打制土器類	既作: 73		完	320g
460	SD-09	頭蓋骨	頭	既作: 110	灰色	小片	
461	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 66	灰色	1/2	内凹面壁付
462	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 120	灰褐色	1/3	
463	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 180	灰褐色	小片	1/4
464	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 70	灰色	1/3	
465	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 124	灰褐色	1/2	内凹
466	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 68	浅褐色	1/3	内凹
467	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 64	黑色	1/4	空壳・肩孔
468	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 50	深褐色	1/3	
469	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 40	褐色	完	
470	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 50	褐色	小片	
471	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 84	深褐色	1/6	
472	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 120	深褐色	1/6	
473	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 130	深褐色	小片	既作
474	SD-11	頭蓋骨	片口脣	口作: 290	灰白色	小片	
475	SD-11	頭蓋骨	片口脣		灰白色	小片	
476	SD-11	頭蓋骨	片口脣	既作: 180	灰白色	1/6	
477	SD-11	頭蓋骨	片口脣	既作: 166	灰白色	小片	
478	SD-11	頭蓋骨	片口脣	既作: 304	深褐色	小片	既作・14C未
479	SD-11	石器品	打制土器類	既作: 98		完	492g
480	SD-11	石器品	端狀土器類	既作: 32	黄青褐色	完	25g
481	SD-11	石器品	打制土器類	既作: 73		完	345g・薄灰岩
482	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 22	灰色	1/3	
483	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 122	灰白色	1/3	
484	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 165	灰白色	小片	
485	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 174	灰白色	1/3	既作不直
486	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 129	灰白色	小片	
487	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 108	灰白色	小片	
488	SD-11	頭蓋骨	有台杯	既作: 141	灰白色	小片	
489	SD-11	頭蓋骨	皮耳版		褐色	小片	
490	SD-11	頭蓋骨	皮耳版		褐色	小片	
491	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 650	灰褐色	小片	不直
492	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 62	灰白色	1/3	直
493	SD-11	頭蓋骨	片	既作: 146	灰褐色	小片	
494	SD-11	頭蓋骨	片口脣	口作: 230	深褐色	小片	
495	SD-11	頭蓋骨	片口脣	口作: 294	灰白色	小片	1/3
496	SD-11	頭蓋骨	片口脣	既作: 154	灰褐色	小片	既作直
497	SD-15	骨片	骨	既作: 90	黄青褐色	1/6	13C未地質突起
498	SD-15	頭蓋骨	片	既作: 74	深褐色	1/6	既作・既作
499	SD-15	頭蓋骨	片	既作: 36	深褐色	1/5	既作
500	SD-15	頭蓋骨	片	既作: 64	深褐色	1/4	既作

番 号	走 構	種 類	器 形	法 定	色 調	通号	備 考
501	SD-15	土器部	直	口作: 68	灰白色	1/4	空壳
502	SD-15	土器部	直	口作: 74	灰白色	1/6	既作・既作直
503	SD-15	土器部	直	口作: 84	黄青褐色	小片	既作
504	SD-15	土器部	直	口作: 102	浅褐色	小片	石器
505	SD-15	土器部	直	口作: 98	黄褐色	小片	既作
506	SD-15	土器部	直	口作: 98	灰褐色	1/3	既作
507	SD-15	土器部	直	口作: 122	黄青褐色	小片	直
508	SD-15	土器部	直	口作: 128	黄褐色	小片	既作
509	SD-15	土器部	直	口作: 136	深褐色	小片	既作
510	SD-15	土器部	直	口作: 152	深褐色	小片	海苔・既作
511	SD-15	土器部	直	口作: 179	深褐色	小片	既作
512	SD-15	土器部	直	口作: 182	深褐色	1/7	海苔・既作
513	SD-15	土器部	直	口作: 190	黄青褐色	小片	既作
514	SD-15	土器部	直	口作: 243	青灰色	小片	
515	SD-15	陶器	片口作	口作: 490	灰白色	小片	既作
516	SD-15	陶器	片口作	口作: 149	オリーブ色	小片	13C~14C未
517	SD-15	陶器	片	既作: 55	オリーブ色	完	剥落文(口部)
518	SD-15	石器品	砾石			完	43g・伴石製
519	SD-16	石器品	打制上臈具		既作: 197	完	43g・伴石器
520	SD-16	石器品	砾石		既作: 79	完	
521	SD-16	石器品	砾石		既作: 108	灰褐色	1/6
522	SD-16	石器品	砾石		既作: 100	灰褐色	1/6
523	SD-16	石器品	砾石		既作: 130	アマモ	小片
524	SD-16	石器品	砾石		既作: 136	灰白色	小片
525	SD-16	石器品	砾石		既作: 132	黄褐色	小片
526	SD-16	石器品	砾石		既作: 98	灰白色	1/3
527	SD-16	石器品	砾石		既作: 110	黄褐色	1/5
528	SD-16	石器品	砾石		既作: 114	黄褐色	小片
529	SD-16	石器品	砾石		既作: 172	所作	1/7
530	SD-16	石器品	砾石		既作: 140	灰白色	小片
531	SD-16	石器品	砾石		既作: 164	灰白色	小片
532	SD-16	石器品	加算		既作: 138	既作	小片
533	SD-16	石器品	加算		既作: 119	灰褐色	1/4
534	SD-16	石器品	砾石		既作: 174	既作	13C未

凡 例

色調

色調の表現については、農林水産省農林水產技術会議事務局及び財團法人日本色彩研究所監修の「新版 級章・色見・色船」(1993年版)によっている。監修は竹田・野村がおこなった。

遺存

遺物の遺存状態については概ね1/8までのものを数値で示し、それ以下のものを「小片」と記している。また、数値は実図面に対してもの遺存状態を表している。したがって、底部のみのものでも全周が存在すれば「完」と記している。

備考

その他特徴的な事項を記載している。この内掘立柱式建物のP-Oは海辺国上のピット番号を示し、海辺は船中に海傍骨が含まれていることを示している。

第4章 まとめ

第1節 はじめに

3次にわたる扇が丘ハイゴク遺跡の発掘調査で出土した中世土器は4,322点に上り、砥石を中心とした石製品は13点である。集落の景観は区画溝SD-01・09・11により大まかに4分割され、細かな移動を繰り返しながら12世紀末から15世紀後半を中心として營まれたものである。しかし、一部これらの中と交錯する建物が存在することも事実であり、「溝によって区画されない時期」のあることも確かである。また、古代とは一線を画した中世的な生活の始まりも、僅かに出土した遺物より11世紀末段階に求められるようである。集落構成の推移は建物群の構成と変遷を検討することが第一であるが、本遺跡の掘立柱建物から出土した遺物は僅かであり、積極的な時期決定をおこなえる資料に乏しいと言わざるを得ない。したがって、ここでは各調査区より出土した遺物の集計結果より、遺跡全体の中での時間的移動と内容の濃淡の把握に努め、特徴的な建物構成の検討を加えながら集落全体の性格の解明を目指す。

第2節 出土遺物の組成

本遺跡の調査区割りは、調査年度の違いや調査地の農道・用水や河川を境に便宜的におこなったものであるが、結果として3区を除きほぼ遺跡の実態を反映したものとなっている。また、基幹になると思われるSD-09・11についても別個に遺物の集計をおこなっている。これらの内、1区についてはほぼ全てがSD-01及びその西側に位置する土坑群よりの出土であり、東半の古代の遺構が広がる区域についてはほとんど見られない状況である。3区については別個に集計した溝遺構出土分を除けばほぼSD-09以北の土坑群周辺を中心に出土したものであるが、南半についても点在する土坑及び若干のピット等一定量の出土が見られる。また、4区については該期の建物群が展開するSD-09以南に限られている。5区は遺構内及びその上面より全体に出土しており、調査面積に対する遺物密度は非常に高い状況を示している。これらを種類・器種ごとに集計したものが表-4及び第57図である。遺跡全体としてみた場合、11世紀末から15世紀後半という長い時間幅があるため単純に他遺跡との比較はできないが、中国製品が4.81%、珠洲・越前・加賀等が11.73%、瀬戸・美濃が2.24%、土師質土器が80.8%という組成は普正寺遺跡・白山町遺跡の折衷型に近く、特に土師質土器の比率の高さが際立っている。もっとも、この点については5区から出土した土師質土器の絶対数が異常に多く、その総量の中でも80%近くを占めていることに起因するものであり、ある時期の特徴を如实地に示すことには間違いないが、これをもってそのまま本遺跡全体の性格を論じることはできない。

第3節 集落の変遷と構造

冒頭でも述べたとおり、本遺跡の中世的な生活の萌芽は11世紀末頃に求められ、それは1区南半及び5区を中心に認められる。もっとも、この段階では明確にその構成を把握できる程の証左はなく、ここでは加賀地方でも最大級と見られる8×6間(身舎6×4間)の大型建物SB-32が建てられる12世紀末から13世紀初頭頃に本格的な開始を求めるところとする。この建物はSD-11及びSA-06によって区画され、東側に3×2間規模の付属屋SB-28・29及び数基の竪穴状遺構や土坑群を備えており、一定の空間を占拠した居館的な建物と見ることができる。特徴的な土器の出土状況

では、土師器が5区全体の総数の92.67%を占めており、次いで陶器類5.29%、中国製品1.77%、瀬戸・美濃0.2%となる。この大型建物SB-32は、その後13世紀後半頃には重複する5×4間のSB-31に縮小して建て替えられており、東側に西面庇の6×3間の別棟SB-30を伴う。これらの建物は、その後14世紀末頃まではかろうじて残るようであり、5区が本遺跡での中核的位置を占めていたことが窺われる。土師器皿の突出した出土量は、この地に暮らした人物がそれらを大量に消費する儀礼や供養を催していたことを示しており、太刀の維持・管理に用いたとされる鳴滝産の砥石も多く所持している事実と併せ、この居館の主は鎌倉時代前期に周辺を支配した開発領主的地位にある有力武士であったものと考えられる。全景を窺うことは適わなかったものの、おそらく中世墓になると思われるSD-15の存在もその傍証となろう。

翻って、旧高橋川北側の調査区に目を移すと、鎌倉時代にまで遡る確実な遺構は稀であり、14世紀以降15世紀後半までが主体となる。全体の構成は、中央を南北に伸びる道造構（牛垣か）とSD-09によりさらに4分割される様相が看取され、南北棟を主体とした中・小建物群で占められている。この内、1区については建物構成は不明であるが、瀬戸・美濃が多いという出土遺物の構成より本期の中心的な区画であったことが窺われる。加賀地方における名主クラスの宅地であろうか。また、3区南半については鎌砥石が多く出土していることから農民階層の居住区であった可能性が高い。4区については、西側に菜園と思われる耕作溝を有しや広い空間を占めていることと併せ、5×4間クラスの建物SB-23や付属屋、作業小屋若しくは納屋と思われるSB-22等の存在からやや富裕なクラスの自作農層の宅地と考えられる。いずれもほぼ同時期に機能した宅地であると思われ、従前の南邊のみに展開した有力武士層の居館期から徐々に町場を整備していく足跡が窺われ、その画期は14世紀初頭頃に求められる。

本遺跡が中世集落として新たに整備されたのは古く見て12世紀末の段階であり、有力武士層の居館の存在は富樫氏による支配段階以前の支配構造を解明する良好な資料を提供したと言える。1335年（建武二）に現在の本町2丁目から住吉町にかけての一帯に守護所を構えたとされる富樫氏は、その後現在の野々市町の中心部分（館の西側）を主体として町場を整備していくとされるが、本遺跡の状況を見る限り14世紀半ばでの大きな構成の変化は見出すことができない。しかし、その後の15世紀後半以降はおそらく町場整備に伴う移動を主因として徐々に衰退していく、1区において僅かに建物が散在するような景観に移り変わっていたのであろう。

再三記していることであるが、本遺跡で検出した建物跡には明確に伴う遺物が非常に少なく、明確な根拠を持つての建物分類は断念したが、常套手段である建物方位軸からの分類ではある程度グレーピングできる見通しを持っている。具体的には以下のとおりである。

類型	軸方位(N E°)	建物Na
I	-1~1	22・23・24・26・28・29・30
II	2~4	(03)・06・08・11・12・14・18・20・25・31・32
III	6~8	04・05・07・19・27
IV	10~12	09・10・15・16・17
その他	27~	13・21

これらにその立地状況を加味して再度グレーピングを施すと、可能性の高いものとして

A : 09・10・15・16・17・19・22・24・25・27

B : 12・14・18・20・26

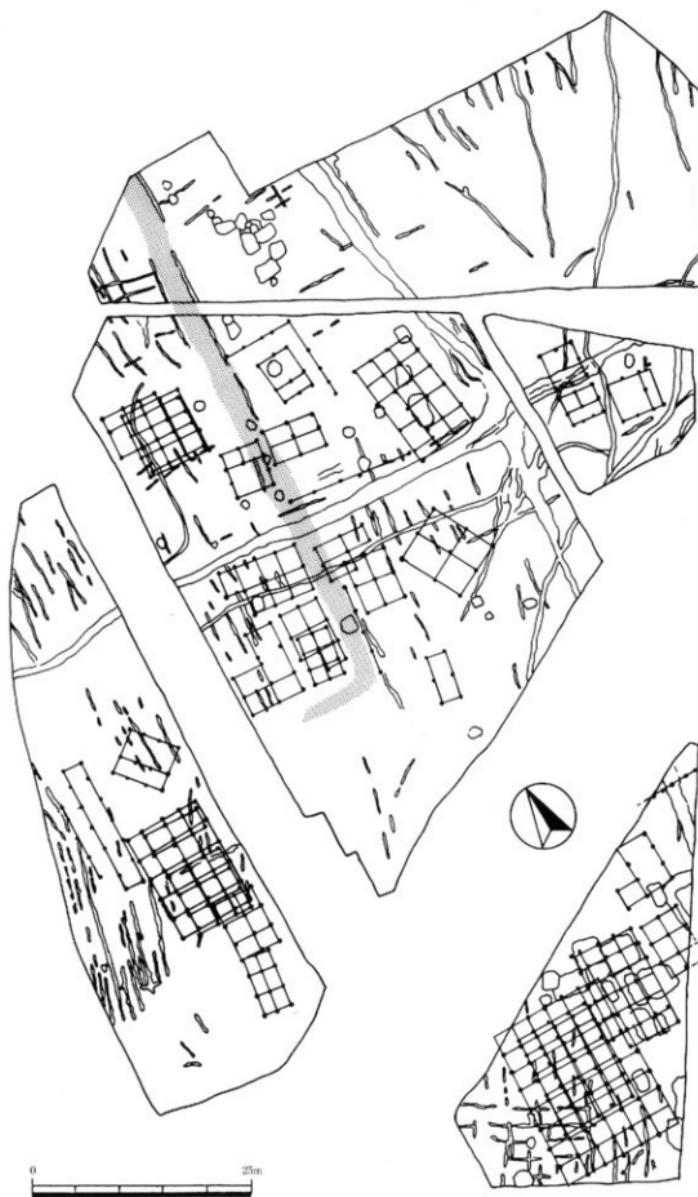
の大きく2つのグループが抽出できる。その他の建物の帰属及び時間列については不明のところが多

いが、ひとつの試案としてご容赦願いたい。

本報告に当たり、国立歴史民俗博物館名誉教授吉岡康暢氏・石川県教育委員会文化財課垣内光次郎氏には多面に亘り貴重なご教示を頂いた。特に、垣内氏には遺物の分類から時期区分に至るまで、中世遺物に不慣れな筆者に対して全般的なご指導を頂いた。氏のご厚情に深い感謝の念を表すとともに、その意を十分生かすことのできなかったことに対するお詫びする次第である。大方の御叱正を乞うものである。

参考文献

- | | |
|--------|---|
| 藤田 邦雄他 | 1988年『辰口西部遺跡群』 石川県立埋蔵文化財センター |
| 吉岡 康暢 | 1989年『日本海域の土器・陶磁』中世編 六興出版 |
| 原田 幹他 | 1992年『金沢市中屋サワ遺跡』 金沢市教育委員会 |
| 吉岡 康暢 | 1994年『中世須恵器の研究』 吉川弘文館 |
| 藤田 邦雄 | 1997年『中世加賀国の土師器様相』『中・近世の北陸』 北陸中世土器研究会 |
| 垣内光次郎 | 1997年『加賀国の陶磁器流通』『中・近世の北陸』 北陸中世土器研究会 |
| 田島 正和 | 1997年『遺構からみた加賀国』『中・近世の北陸』 北陸中世土器研究会 |
| 楠 正勝他 | 1998年『近畿遺跡』 金沢市埋蔵文化財センター |
| 岩瀬 山美他 | 1998年『木越光林寺遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター |
| 吉田 淳 | 2000年『長池キタノハシ遺跡』 野々市町教育委員会 |
| 布尾 幸恵他 | 2002年『藤江C遺跡、・・・』『第3分冊 古代・中世編』 (財)石川県埋蔵文化財センター |



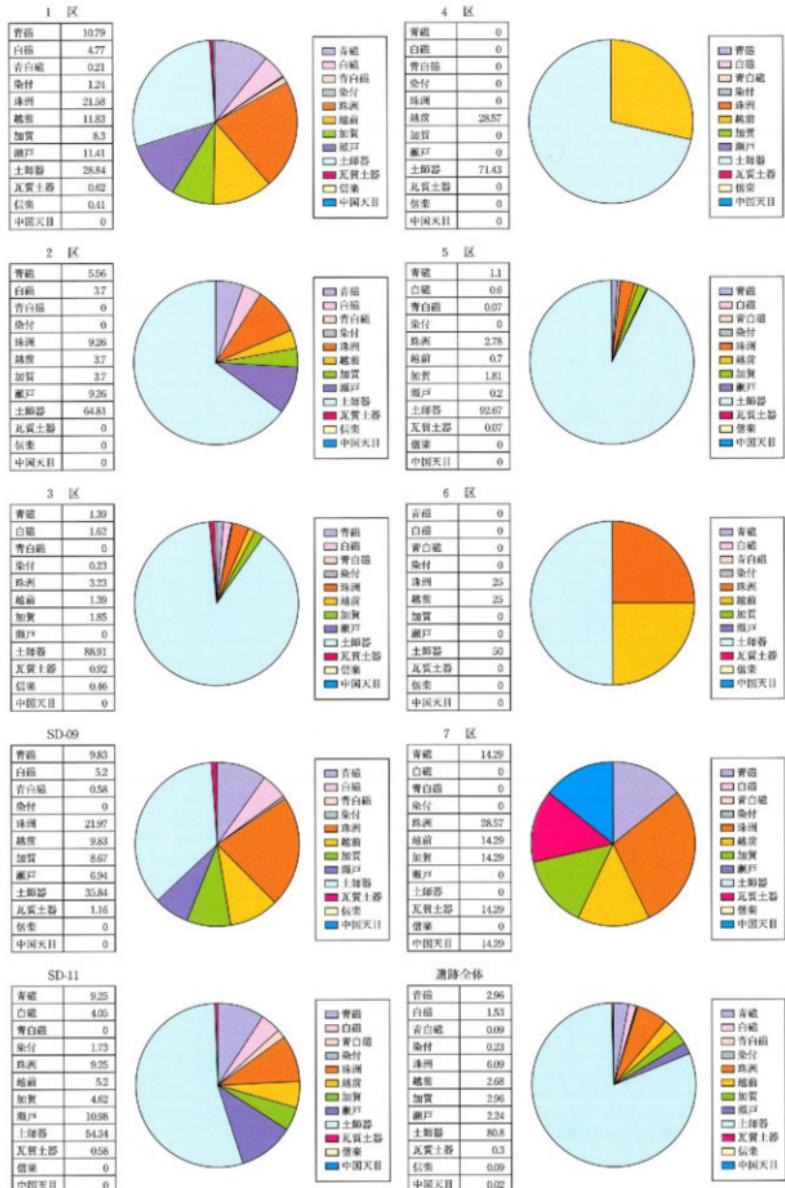
第56図 主要造構配置図 (S=1/500)

表-4 扇が丘ハイゴク遺跡 中世土器 組成

種類	器種	1区	2区	3区	SD-09	SD-11	4区	5区	6区	7区	遺跡全体
青 磁	碗	37	3	6	13	9		23		1	92
	碗(割花文)	1						1			2
	小碗	1						1			2
	皿	1				1		3			5
	穂花皿							1			1
	鉢				1	1					2
	小鉢					2		2			4
	盤	1									1
	壺										0
	小壺(水差)	1									1
	壺	1									1
	その他	9			3	3		2			17
青磁合計		52	3	6	17	16	0	33	0	1	128
組成割合(%)		10.79	5.56	1.39	9.83	9.25	0	11	0	14.29	2.96
白 磁	碗	4	1	2	1	2		13			23
	皿	6		1	2	1		2			12
	口禿	1		2	2	1		2			8
	台付	5	1	2	2	1					11
	端反	3			1						4
	壺										0
	壺	3			1	1					5
	その他	1				1		1			3
白磁合計		23	2	7	9	7	0	18	0	0	66
組成割合(%)		4.77	3.7	1.62	5.2	4.05	0	0.6	0	0	1.53
青白磁	合子	1									1
	壺				1			1			2
	梅瓶か?							1			1
青白磁合計		1	0	0	1	0	0	2	0	0	4
組成割合(%)		0.21	0	0	0.58	0	0	0.07	0	0	0.09
染 付	碗	2		1		1					4
	皿	3				2					5
	壺										0
	その他	1									1
染付合計		6	0	1	0	3	0	0	0	0	10
組成割合(%)		1.24	0	0.23	0	1.73	0	0	0	0	0.23
珠 沢	壺	37	3	4	6	5		21		1	77
	皿	14			4	2		17		1	38
	擂鉢	52	2	9	22	9		41	1		136
	鉢	1						1			2
	鉢皿				2						2
	その他		1	4				3			8
珠沢合計		104	5	14	38	16	0	83	1	2	263
組成割合(%)		21.58	9.26	3.23	21.97	9.25	0	2.78	25	28.57	6.09
越 前	壺	34	1	4	8	8	2	4		1	62
	皿	2	1		5	1		13			22
	擂鉢	7		1				2			10
	その他	14		1	4			2	1		22
越前合計		57	2	6	17	9	2	21	1	1	116
組成割合(%)		11.83	3.7	1.39	9.83	5.2	28.57	0.7	25	14.29	2.68
加 賀	壺	24	1	4	11	2		28			70
	皿	3			2	1		10			16
	小皿	1									1
	擂鉢	7		3				12			22
	その他	5	1	1	2	5		4		1	19
加賀合計		40	2	8	15	8	0	54	0	1	128
組成割合(%)		8.3	3.7	1.85	8.67	4.62	0	1.81	0	14.29	2.96

移類	器種	1区	2区	3区	SD-09	SD-11	4区	5区	6区	7区	道府全体
灰軸	天目茶碗	9			2	4		1			16
	皿	13			1	4		1			18
	鉢皿	2						1			3
	折線小皿					1					1
	碗	10									10
	丸碗		1								1
	半碗				3	5					8
	盤	3	1								4
	小壺				1						1
	花瓶		1					1			2
	香炉										0
	瓶	1									1
	瓶子	1									1
鉄軸	鉢	5	1		3	2					11
	行平	1			1			1			3
	その他	9				3		1			13
	灰釉合計	45	4	0	9	15	0	4	0	0	77
	皿										0
	鉢皿		1		1						2
瓦質	碗										0
	壺										0
	花瓶							1			1
	その他	1									1
	鉄釉合計	1	1	0	1	0	0	1	0	0	4
	瀬戸合計	55	5	0	12	19	0	6	0	0	97
丸質	組成割合 (%)	11.41	9.26	0	694	1098	0	0.2	0	0	224
	土師質	139	35	385	62	94	5	2770	2		3,492
	組成割合 (%)	28.84	64.81	88.91	35.84	54.34	71.43	92.67	50	0	80.8
	火鉢			3	1						4
	奈良座火鉢			1							1
	火桶							1			1
信楽	小壺							1			1
	その他	3			1	1					6
	瓦質合計	3	0	4	2	1	0	2	0	1	13
	組成割合 (%)	0.62	0	0.92	1.16	0.58	0	0.07	0	14.29	0.3
	大壺			2						2	
	信楽合計	2	0	2	0	0	0	0	0	0	4
中四天目	組成割合 (%)	0.41	0	0.46	0	0	0	0	0	0	0.09
	中四天目										1
	組成割合 (%)	0	0	0	0	0	0	0	0	14.29	0.02
	土器類合計	482	54	433	173	173	7	2,989	4	7	4,322
	瓦紙(大村か)			1							1
	縦紙			1							1
氷石	横水(縦紙)			1							1
	中紙(常葉等)			1				2			3
	中紙				1						1
	仕上紙(鳴滝)							5			5
	氷石							1			1
	石製品合計	0	0	4	1	0	0	8	0	0	13

* 5区上部質上器には壺状製品を1点含む



第57図 扇ヶ丘ハワイゴク遺跡土器組成



遺跡鳥瞰（1998年度撮影、西より）



1区西半全景（南西より）



1区 S I - SK群 (北←)



1997年度調査区全景 (西より)



2・3区全景（北より）



2区全景（北←）



3区 北半(北↑)



3区 南半(↑)



4区 全景（北←）



5区 全景（北↓）



5区 S I + SK群（北←）



S B - 32 全景（北←）



7区 全景（北西より）



S D - 17 (北←)



1区東半全景
(南東より)



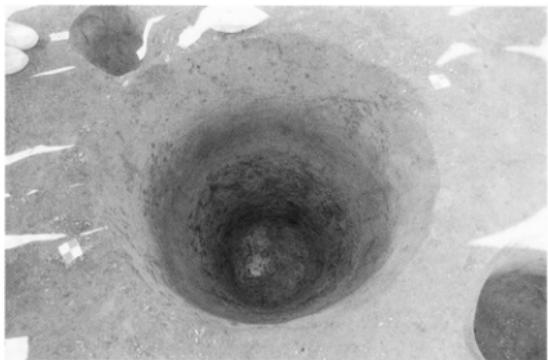
S B - 01
(南より)



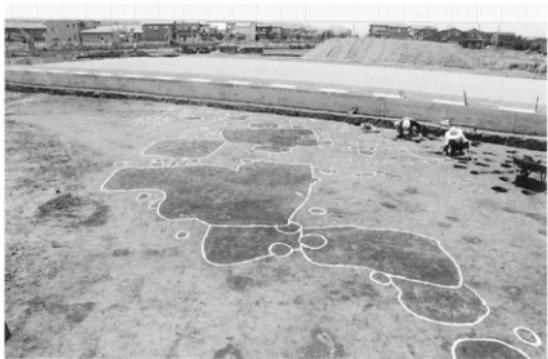
S B - 01・S I - 01
(西より)



S K - 01 土層堆積
状況



S K - 01



1 区西半 上坑群
検出状況 (南より)



1区 土坑群
(東より)



S K -07~11



S I -02
(南より)



S I - 03
(南西より)



S K - 02・03
(東から)



S K - 15
(東から)



SD-01
(南より)



1区道状遺構
(南より)



2区・SD-07・08
(南西より)



S I - 05
(南より)



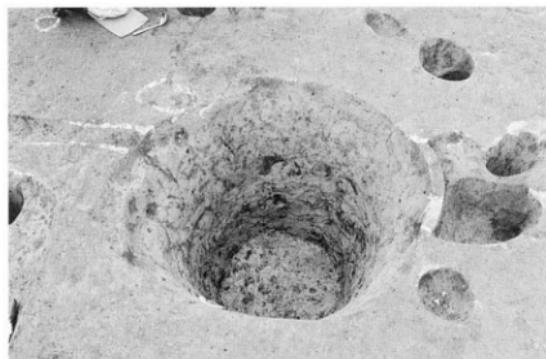
S I - 07
(北より)



S I - 06・SK 20 (手前)
(北より)



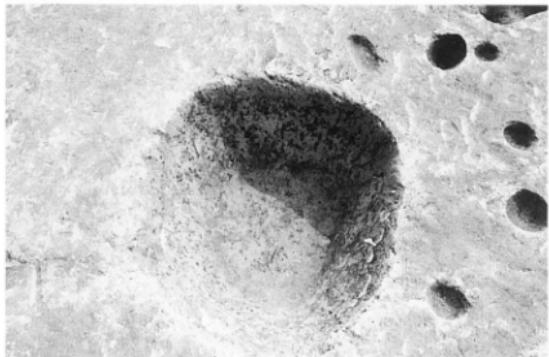
S K - 18
(南より)



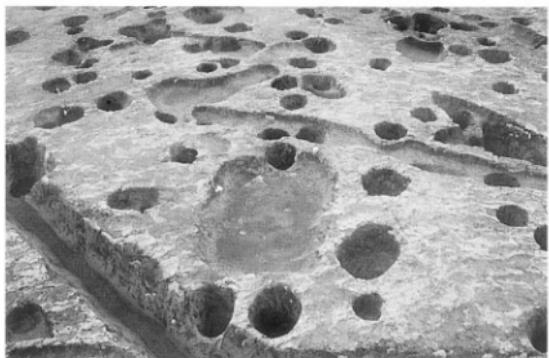
S K - 21
(西より)



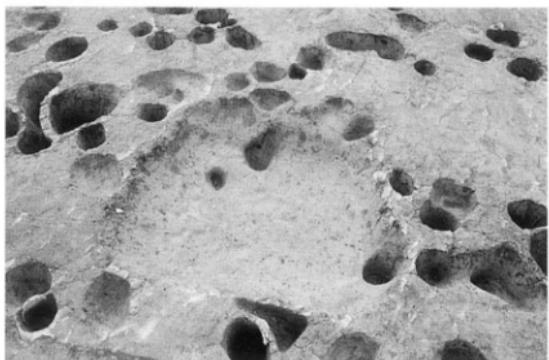
S K - 22・23
(北西より)



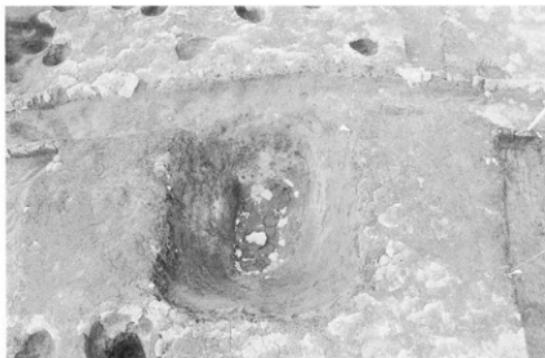
SK-24
(北より)



SK-30
(東より)



SK-34
(東より)



S K - 35
(南より)



S D - 09
(西より)



3区・道状造構
(北より)



S I - 08・09
(東より)



S K - 37
(南東より)



S K - 45
(北西より)



S D - 15
(北東より)



6 区全景
(東より)



S K - 49
(南東より)



SD - 17
(南東より)

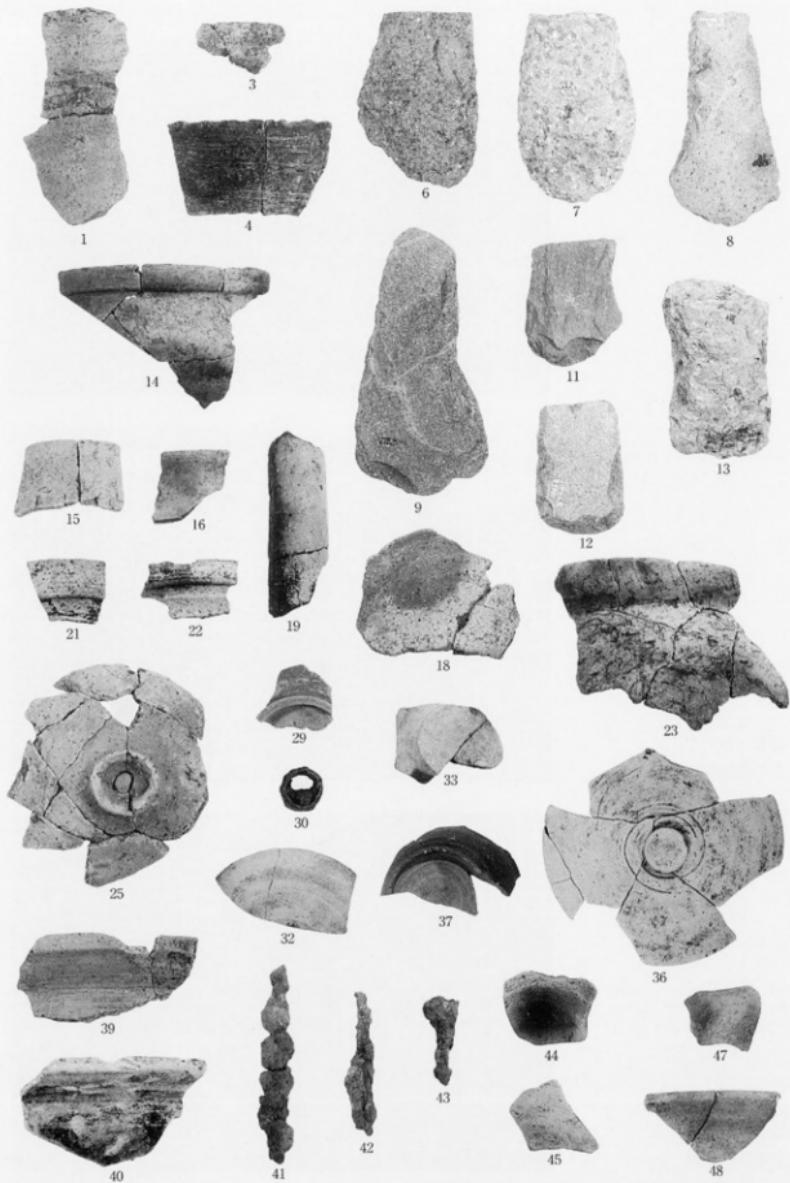


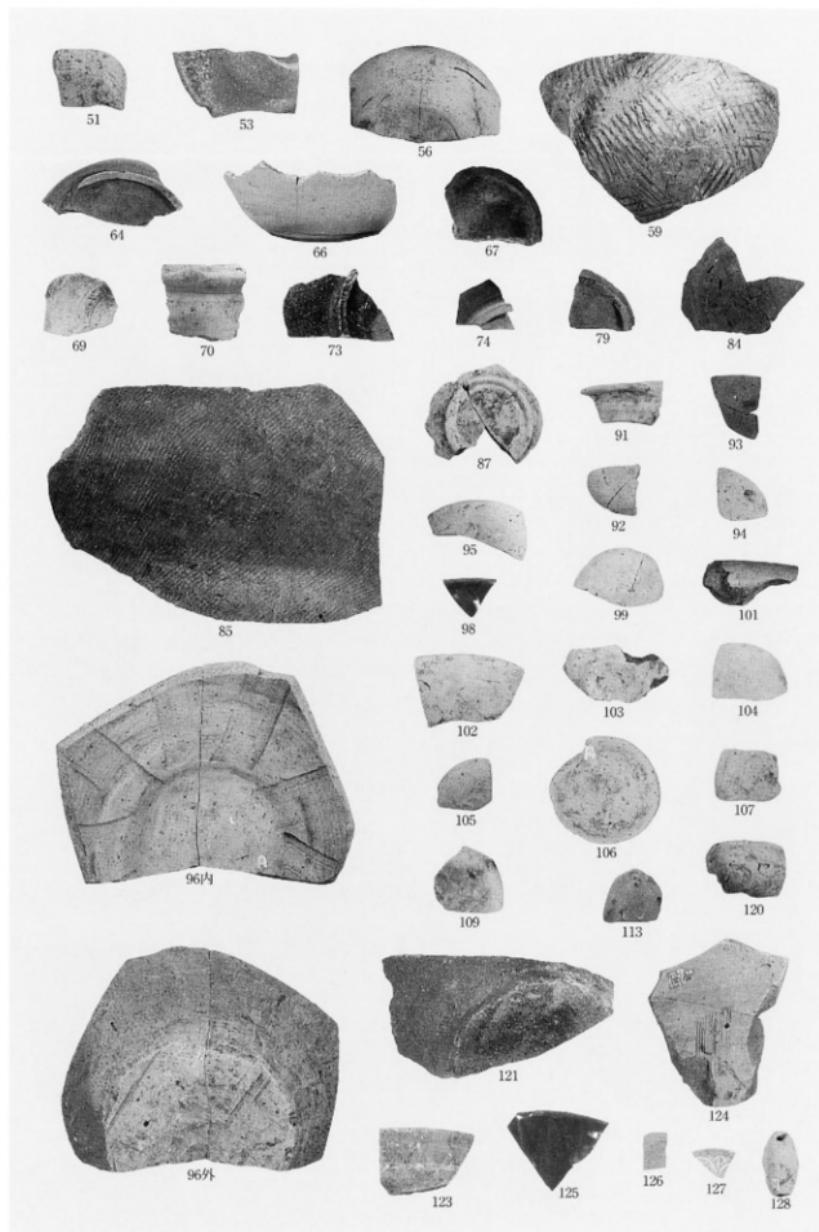
SD - 17
土層堆積状況



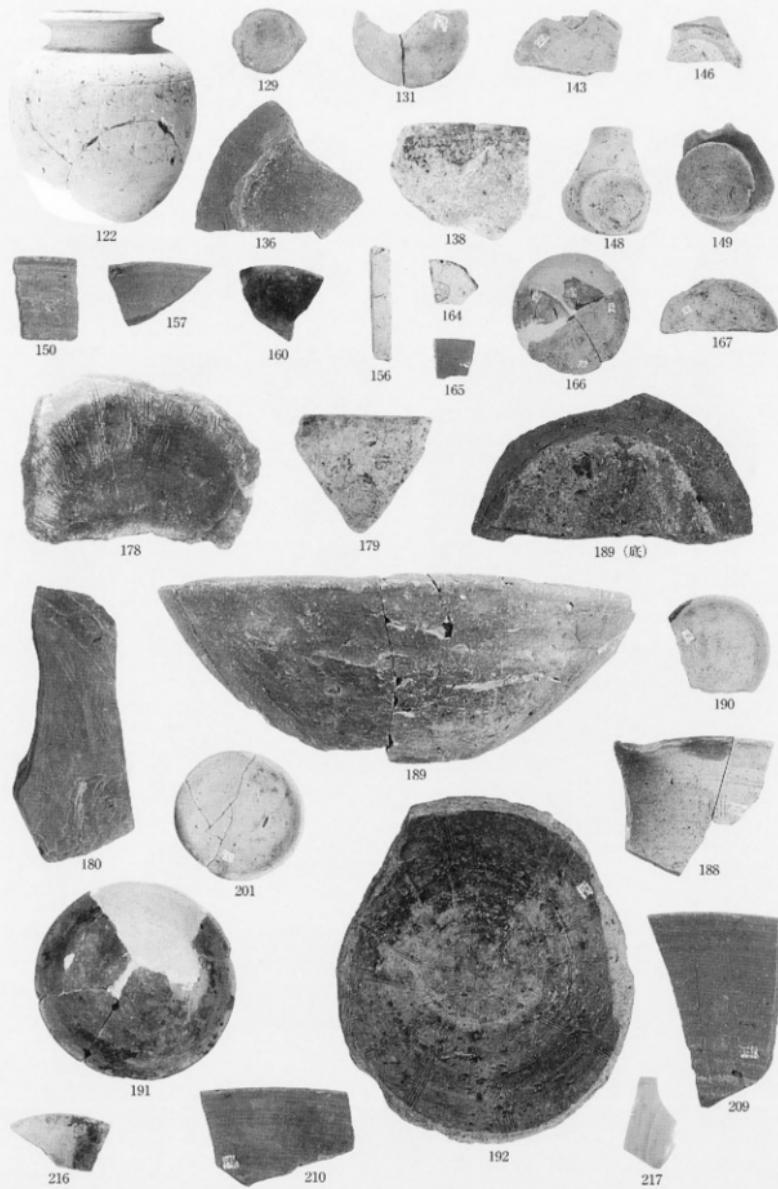
SD - 17内側上面
土器出土状況

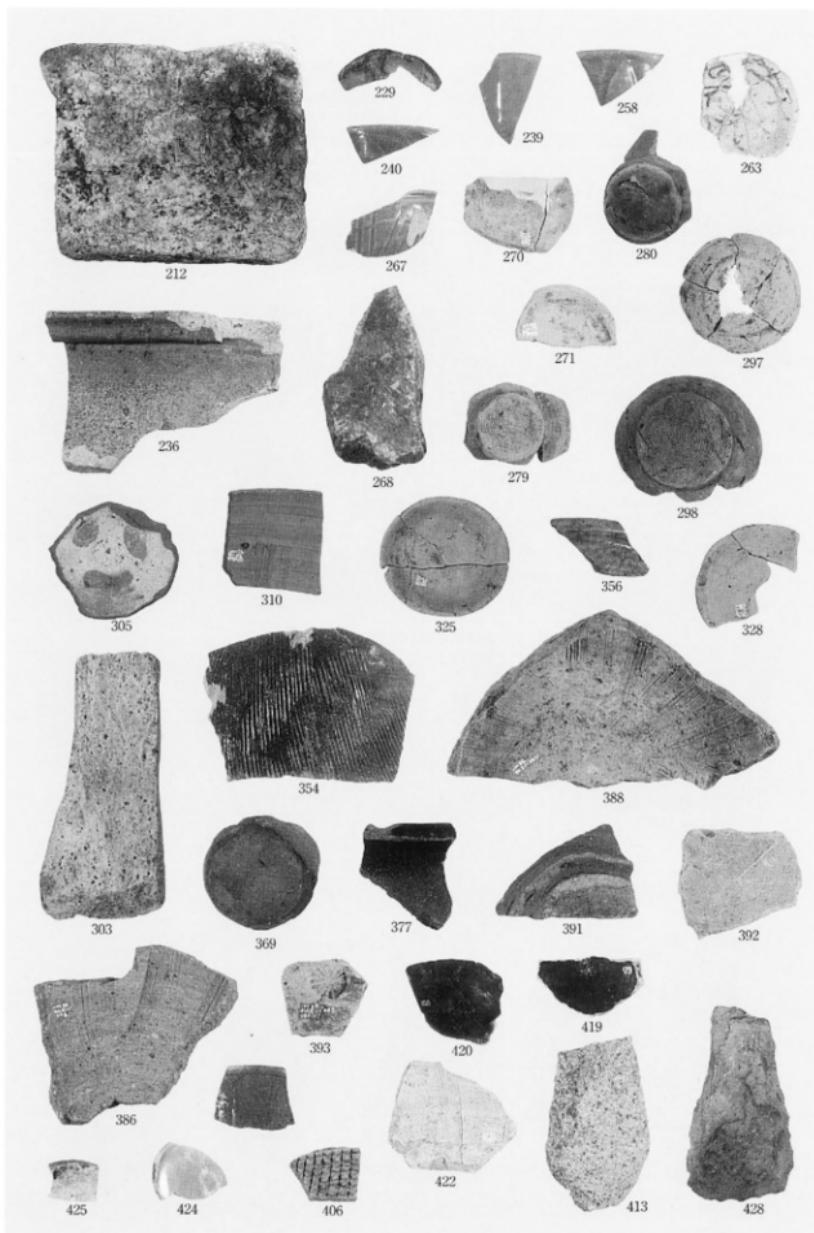
図版
20



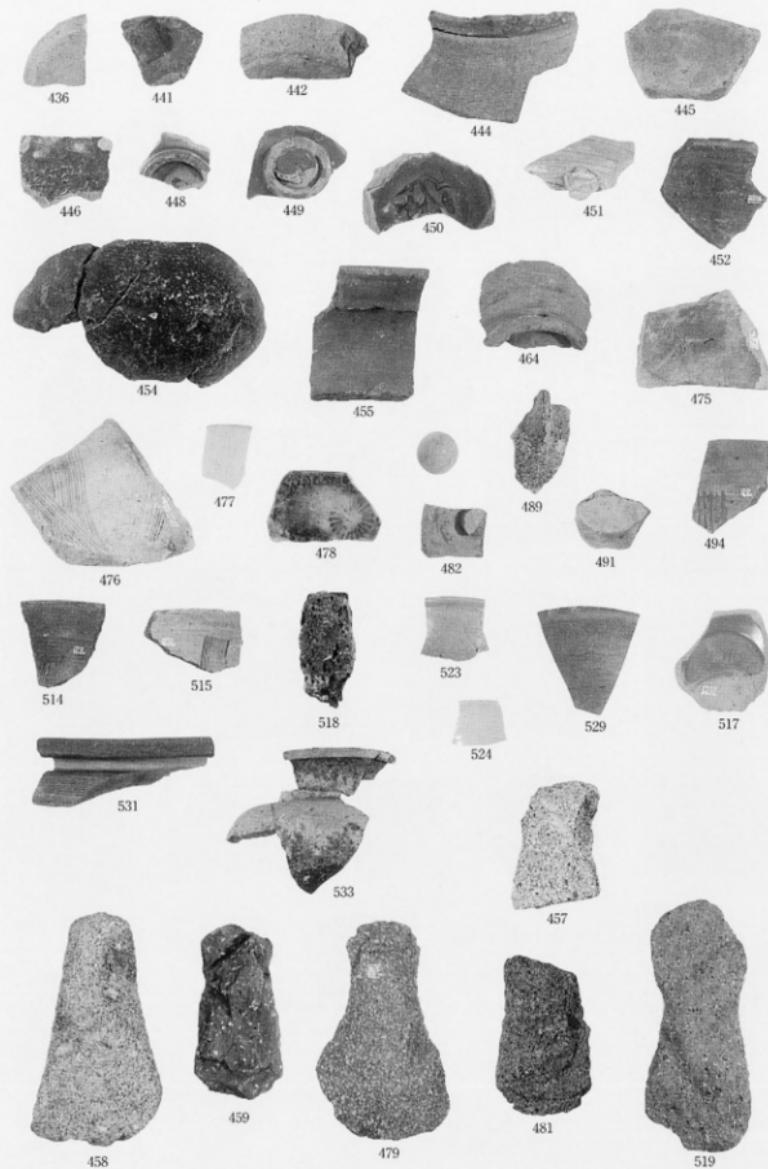


図版 22





図版
24



報 告 書 抄 錄

ふりがな	扇が丘ハワイゴク遺跡							
書名	扇が丘ハワイゴク遺跡							
副書名	扇が丘・住吉土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ							
卷次								
シリーズ名	扇が丘・住吉土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	Ⅲ							
編著者名	横山貴広							
編集機関	石川県石川郡野々市町教育委員会							
所在地	〒921-8815 石川県石川郡野々市町本町5丁目4番1号							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド 市町村	北緯 遺跡番号	東經 ° °'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
おおぎがおか 扇が丘 ハワイゴク 遺跡	いしかわけん 石川県 いしかわけん 石川郡 のいのちまち 野々市町 おおぎがおか 扇が丘	17344 17344	01122 01122	36° 31' 18"	136° 37' 37"	19970509 ~ 19971021 19980507 ~ 19980810 20000511 ~ 20000620	4,700 1,783 260	土地区画 整理事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
扇が丘 ハワイゴク	集落跡	縄文時代後期中葉 弥生時代後期後半 奈良・平安時代 鎌倉・室町時代	ビット 旧河道路 堅穴住居 ビット 堅穴住居 掘立柱建物 土坑・ビット 掘立柱建物 柵列 堅穴状遺構 土坑・ビット 溝・道状遺構	縄文土器 打製土掘具 弥生土器 須恵器 土師器 土師器 中世陶磁器 石製品	溝により区画された12世紀から15世紀の集落跡を確認。中世初頭の開発領主層の居館を検出。			

扇が丘ハイゴク遺跡

発 行 2003年3月31日（平成15年）

編集発行 野々市町教育委員会

〒921-8815

石川県石川郡野々市町本町5丁目4番1号

☎076-248-8545

印 刷 株式会社 ショセキ

